

持続可能な自治会モデル検討プロジェクト

令和 8 年度 自治会活動に関するアンケート

調査結果報告書

自治会や地域活動に対する市民の意識と、若い世代の参画に関する調査

回答 2,524 件（受付期間：2026 年 8 月 12 日～9 月 11 日）

2026 年 9 月 福井市 地域振興課

（協力：東京大学フィールドスタディ型政策協働プログラム 福井市チーム）

目次

要約	3
調査結果の概要.....	4
第 1 部 調査の設計	17
第 1 章 調査の概要	17
第 2 章 回答者の構成と標本の性質	18
第 2 部 全体で見る	20
第 3 章 結果の概観	20
第 4 章 世代で見る	28
第 5 章 活動分野で見る	31
第 6 章 地域で見る	34
第 3 部 若い世代を分けて見る	37
第 7 章 ライフステージ別に見る	37
第 8 章 ライフステージ別の代表的な 6 人.....	42
第 9 章 自治会との関わり方で 7 層に分ける	48
第 10 章 ライフステージと関わり方を重ねて見る	52
第 11 章 全体の集計では埋もれる層	54
第 4 部 示唆	58
第 12 章 考察と今後の取組への示唆	58
資料編.....	65
A 分析の方法	65
B 自由記述に書かれた訴え	72
C 単純集計表	80
D 層別集計表.....	87
E 調査票（設問と選択肢）	88

要約

自治会活動に参加したことがない若い人の67%は、参加できると答えている。
しかし、その多くは活動内容を知らず、案内も届いていない。

本調査で分かったこと

- 1 自治会活動に参加できると答えた若い人の71%は、既に加世帯の中にいる**
自治会活動に参加したことがない若い人の67%は、参加できると答えている。その71%は既に世帯として自治会に加入しており、参加できると答えた人の多くは、自治会の外ではなく加入世帯の中にいる。
- 2 自治会活動に参加している人と、していない人を分けるのは、活動内容を知っているかどうか**
15～39歳の37.9%が活動を「ほとんど知らない」「存在自体を知らない」（40歳以上は11.1%）。活動を知っている人ほど参加しており、知っているかどうかによる参加の差は、年齢や住まいによる差より大きい。
- 3 賃貸・集合住宅の若い世代も参加できると答えている。届いていないのは案内と入り方**
「参加は難しい」は賃貸22%対持家18%で差がなく、違うのは参加方法が分からない（20%対7%）と情報が届いていない（27%対15%）。未加入者の記述で最も多いのも「案内がない・入り方がわからない」（37%）である。
- 4 自由記述の6割は要望。最大の論点は役員の負担、次いで古い慣習と世代間の断絶**
批判を含む記述は73%だが、6割は「変えてほしい」という要望を伴う。役員の負担（33.9%）は40歳以上で高く、若い世代ではデジタル化と古い慣習・世代間の断絶が多い。
- 5 学生の48%は友人と一緒に参加しやすいと答えているが、実際に友人と参加した人は1.3%**
「友人と参加できる」を参加条件に挙げる人は学生48%にのぼる。一方、実際に一緒に参加した相手は家族か一人で、友達は1.3%、近所の人は3.1%。実際の参加は家族と一緒に一人である。
- 6 若い世代が続けたいのは交流を伴う活動。祭り・イベントは若い世代の方が続けたい人が多い**
同じ活動が続けたい人は祭り・イベント50.6%に対し、清掃28.0%、ごみステーション管理19.6%。祭り・イベントは40歳以上（42.8%）を上回る唯一の活動である。
- 7 地域による違いは考え方ではなく、抱えている課題の重さ。中山間は若い世代が少ない**
地区で説明できる回答のばらつきは2%以下で、地域ごとに別の若者参加に関する取組を用意する根拠は見当たらない。中山間の課題は若い世代の数そのものと、いる人の負担である。

今後の取組への示唆

対象

A 案内を届ける	1 転入時・加入時の案内を標準化する	自治会未加入者、転入者、賃貸の若い世代
	2 世帯主で止まらない連絡経路をつくる	加入世帯の中で活動を知らない若い人
	3 情報を紙から電子に移す	全世代
B 参加のきっかけをつくる	4 個人として関われるきっかけを設ける	こどものいない若者・単身者
	5 最初に頼む活動は交流と学びから	これから参加する人
	6 子育て配慮と、こどものいない層向けの行事を両立	子育て世帯と、それ以外の若い世代
C 負担を減らす	7 市や各種団体の依頼業務を見直す	役員を担っている人（全年代）
D 運営を見直す	8 慣習と役割を見直す場をつくる	自治会の役員・総会の運営（全年代）

調査結果の概要

本調査は、若い世代を含む市民が自治会をどのように見ており、何が地域活動への参加を妨げているかを把握するために実施した。回答は 2,524 件、うち 15～39 歳は 567 件である。回答者は既に自治会に加入し地域とつながっている層に偏っており（加入済み 97.2%、一戸建て持家 91.4%）、本書の数値は「回答者の構成における値」として読む必要がある。

本アンケート調査の結果は、自治会と若い世代のあいだで何が起きているかと、その若い世代の誰にどう働きかけるかの二段で整理する。



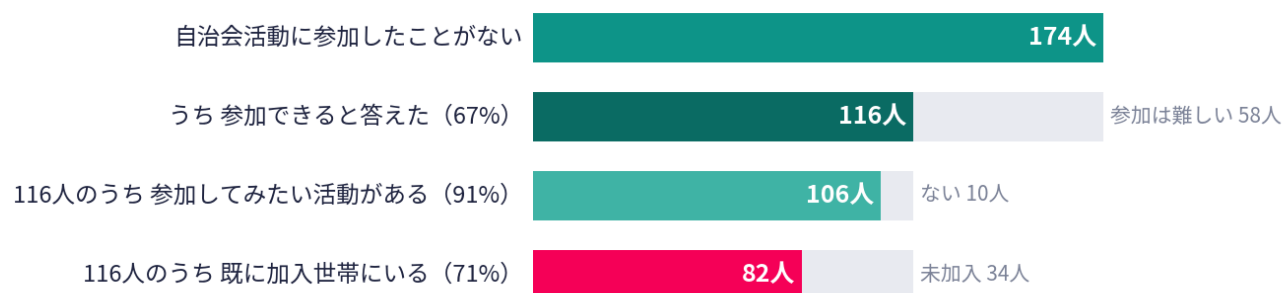
自治会と若い世代のあいだで何が起きているか

1 自治会活動に参加できると答えた若い人の 71%は、既に加入世帯の中にいる

参加したことがない 174 人のうち 116 人（67%）は、頼まれれば参加できる頻度を答え、この 116 人の 91%（106 人）が参加してみたい活動を挙げている。116 人の 71%（82 人）は、既に世帯として自治会に加入している。参加できると答えた人の多くは、自治会の外ではなく加入世帯の中にいる。（第 9 章）

概要図 1 参加したことがない 174 人の内訳 — 参加できる／参加してみたい活動がある／既に加入世帯にいる

帯の全体が、ラベルに示した母数。％はその母数に対する割合



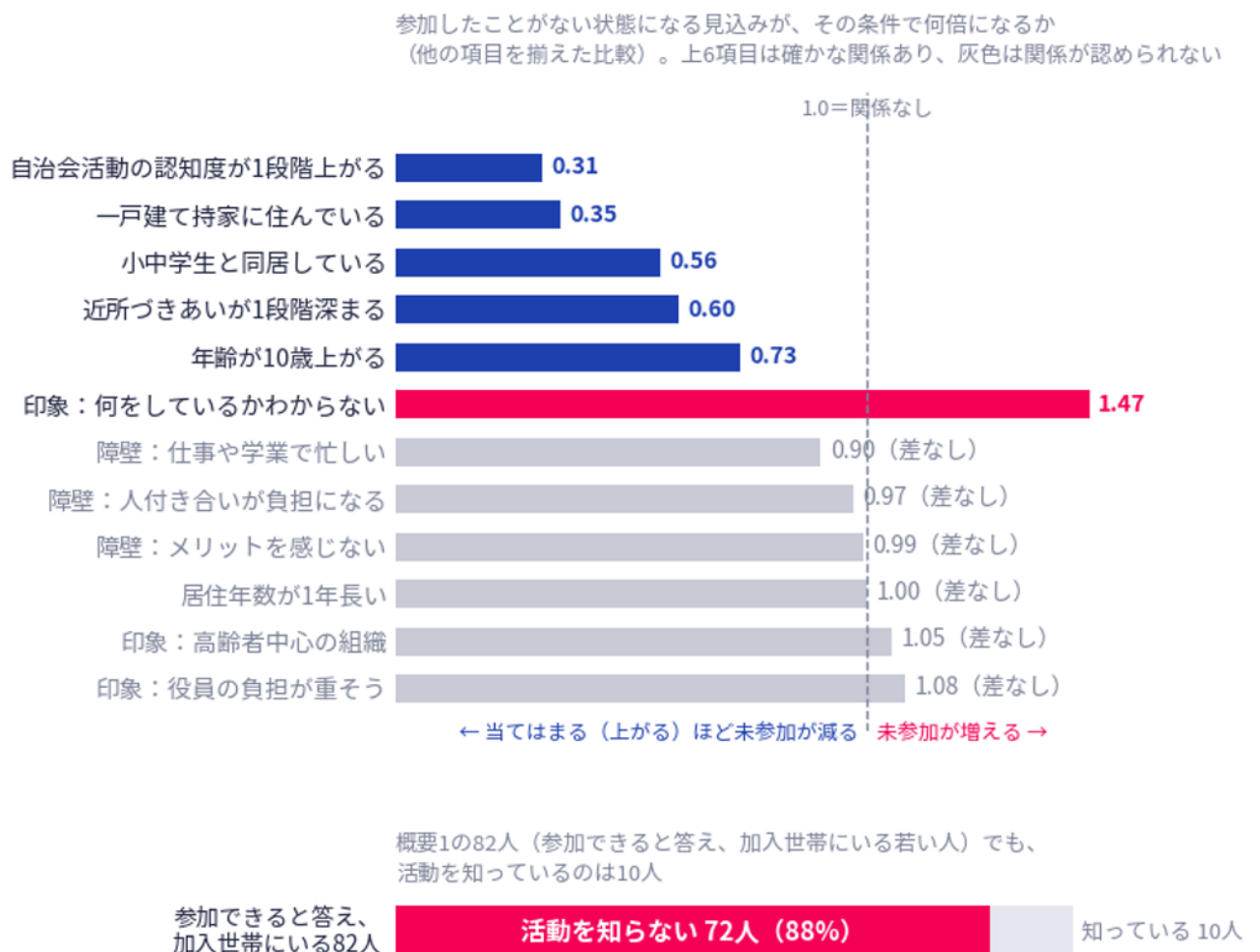
15～39 歳 567 人のうち参加したことがない 174 人を、参加できると答えたか（設問 20）、参加してみたい活動を挙げたか（設問 21）、世帯の加入状況（設問 14・17）で見たもの。赤が本項目の発見。「活動を知らない」は「よく知っている」「ある程度知っている」以外。

2 自治会活動に参加している人と、していない人を分けるのは、活動内容を知っているかどうか

参加したことがある人となない人を、年齢・住まい・認知度など 12 の項目で同時に比べると、最も強く結びつくのは活動を知っているかどうかである（結びつきの強さ 0.31。持家 0.35、年齢 0.73 より強い）。「役員の負担が重そう」といった印象や「忙しい」といった理由は、参加の有無と結びついていない。一方、「何をしているかわからない」という印象を持つ人は、参加したことがない状態になりやすい（1.47）。15～39 歳の 37.9%が活動を「ほとんど知らない」「存在自体を知らない」（40 歳以上は 11.1%）。（第 4 章）

概要 1 の 82 人（参加できると答え、加入世帯にいる人）に限っても、88%は活動を知らない。案内は世帯主に届いた段階で止まっている。（第 4 章、第 9 章）

概要図 2 参加したことがない人を分けている要素（結びつきの強さ）



上段は 12 項目を同時に考慮したロジスティック回帰のオッズ比。1.0 が「関係なし」で、小さいほどその項目が当てはまる人は参加したことがない状態になりにくい。灰色は統計的に関係が認められない項目（第 4 章 2 節）。

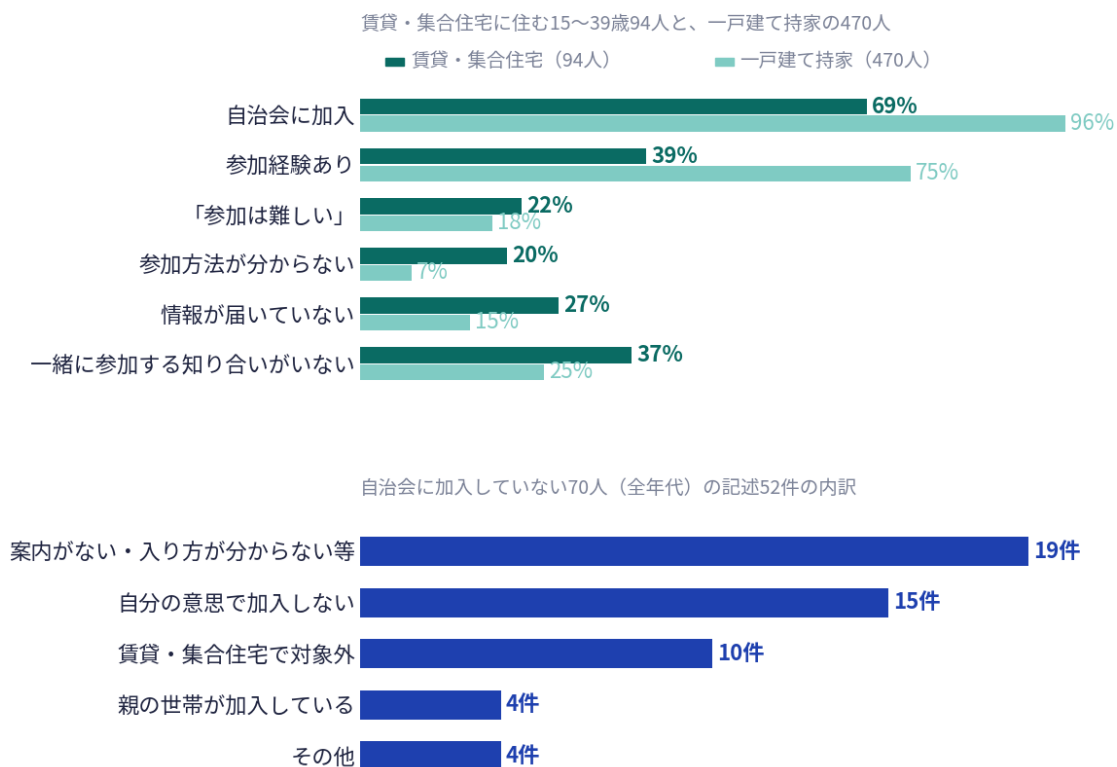
下段は概要図 1 の 82 人の、活動の認知（設問 9）。

3 賃貸・集合住宅の若い世代も参加できると答えている。届いていないのは案内と入り方

賃貸・集合住宅に住む 15～39 歳 94 人は、自治会に加入している割合が 69%、参加したことがある割合が 39%と、持家の 470 人（96%・75%）を大きく下回る。しかし、頼まれれば参加できるかを尋ねると、「参加は難しい」と答えた割合は賃貸 22%、持家 18%でほとんど変わらない。参加しようという気持ちは住まいで違わないのに、実際の参加は賃貸で少ない。賃貸で高いのは、参加方法が分からない（20%、持家 7%）と情報が届いていない（27%、同 15%）で、案内が届いていない。

入り方についても同じことが言える。自治会に入っていない人（70 人、全年代）は、70%が 15～39 歳で、過半が賃貸マンション・アパートに住んでおり、上の 94 人と重なる人たちである。その記述 52 件で最も多いのは「案内がない・入り方が分からない」の 19 件（37%）で、自分の意思で入らないと書いた 15 件（29%）を上回る。自治会に加入していない人の多くにとって、届いていないのは入り方の案内である。なお、賃貸や集合住宅だから自分は対象外だと思っていると書いた 10 件については、集合住宅と自治会の関係をどう取り扱うかという別の論点を含むため、別途の検討を要する。（第 11 章 1 節・2 節）

概要図 3 賃貸・集合住宅に住む若い世代と、自治会に入っていない理由

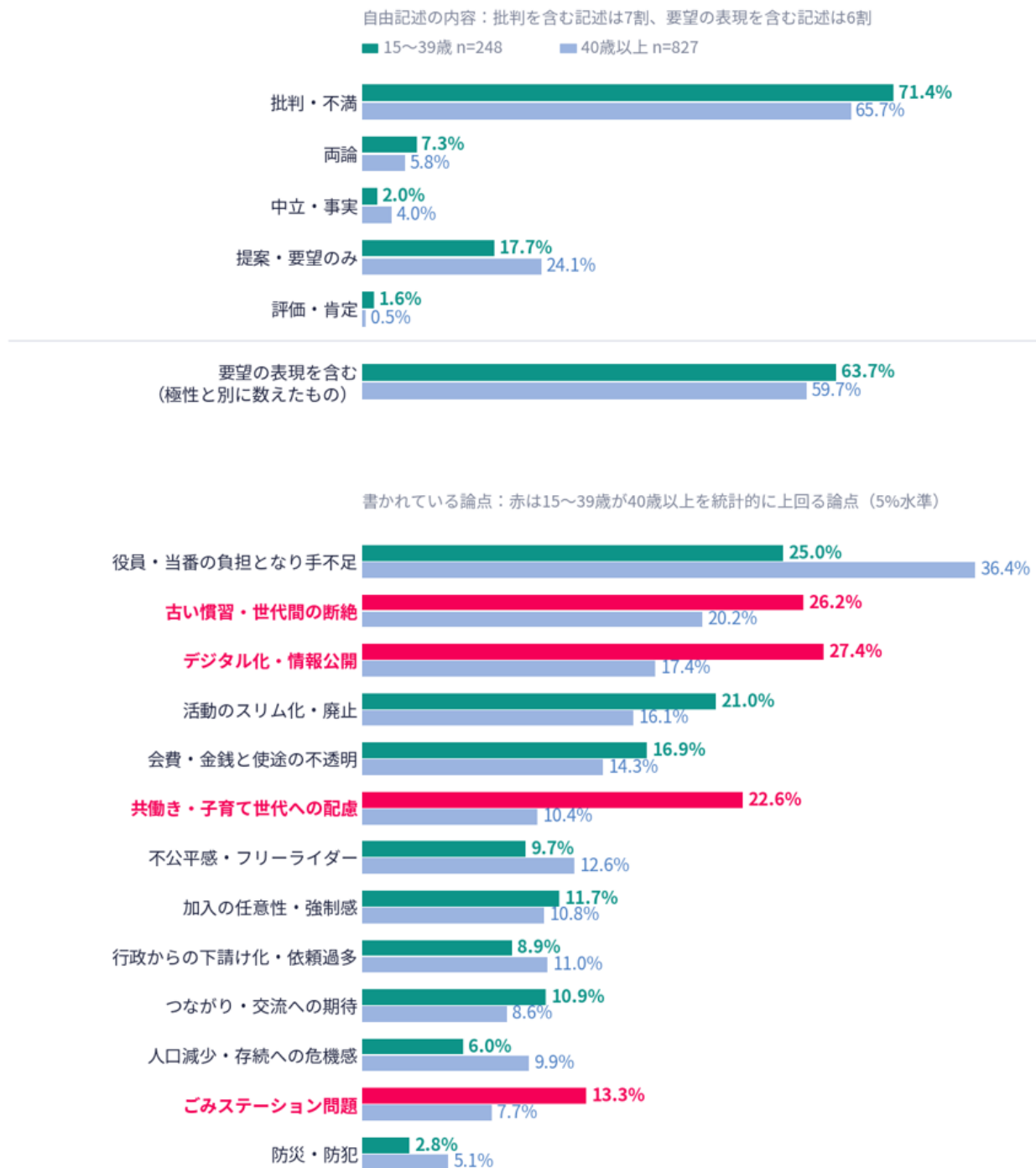


上段は設問 14・17・10・20・19 による。下段は加入状況の設問に付された記述 52 件の分類（資料編 A-7）。

4 自由記述の6割は要望。最大の論点は役員の負担、次いで古い慣習と世代間の断絶

自由記述 1,078 件を 1 件ずつ読むと、批判を含む記述（批判・不満・両論）は 15～39 歳 78.6%、40 歳以上 71.5%で、若い世代がやや多い。ただし、「こう変えてほしい」という要望の表現を含む記述は 15～39 歳 63.7%、40 歳以上 59.7%と、どちらの世代でも 6 割を占める。批判の多くは自治会を否定する声ではなく、自治会を変えてほしいという声である。

概要図 4 自由記述の内容と、書かれている論点



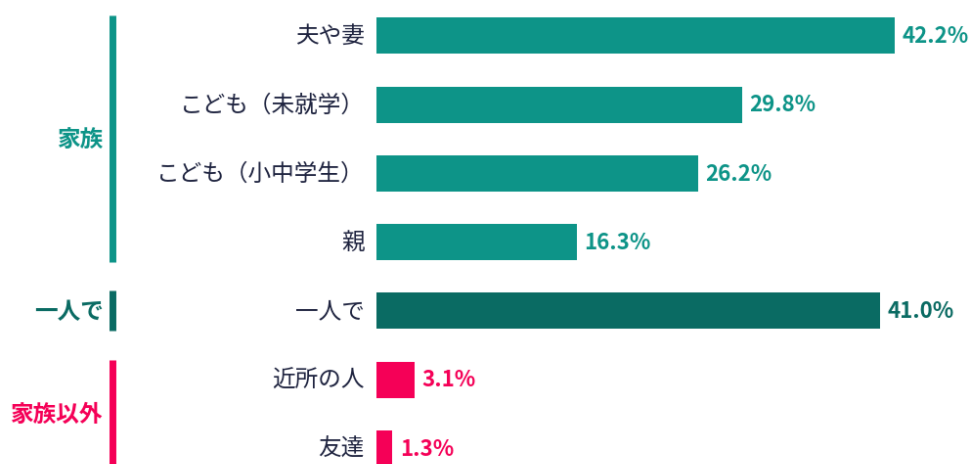
上段は極性、下段は論点で、いずれも 40 歳以上（827 件）と 15～39 歳（248 件）を比べたもの。1 件の記述が複数の論点に該当する場合がある。赤は 15～39 歳が 40 歳以上を有意水準 5%で上回る論点。論点ごとの内訳は資料編 B に示す。

論点別に数えると、最も多いのは役員・当番の負担で、40 歳以上の 36.4%が言及している。15～39 歳では 25.0%と少ない。役員を担う年代は 40 歳以上に偏っているためである。年齢などの条件を揃えると、以前役員を務めた人は役員経験のない人より月 1 回以上の参加に応じにくく（第 11 章 3 節）、役員の負担は再任を妨げる方向にも働いている。2 番目に多いのは古い慣習・世代間の断絶で、15～39 歳 26.2%、40 歳以上 20.2%。意思決定が高齢者中心で若い世代や女性の意見が通らない、未だに男尊女卑のような古い考え方が根付いている、という指摘である。15～39 歳が 40 歳以上を統計的に上回る論点はこれを含めて四つあり、デジタル化・情報公開（27.4%対 17.4%）、共働き・子育て世代への配慮（22.6%対 10.4%）、ごみステーション問題（13.3%対 7.7%）が並ぶ。（第 3 章 5 節、第 11 章 3 節）

5 学生の 48%は友人と一緒に参加しやすいと答えているが、実際に友人と参加した人は 1.3%

参加しやすくなる条件として「友人と参加できる」を挙げる人は、学生 48%にのぼる。一方、自治会活動に参加したことがある 15～39 歳（393 人）が実際に一緒に参加した相手は、配偶者 42.2%、一人で 41.0%、未就学のこども 29.8%、親 16.3%に対し、近所の人 3.1%、友達 1.3%である。実際の参加は、家族と一緒に、世帯の代表として一人で行くかのどちらかである。（第 3 章 2 節、第 4 章 3 節）

概要図 5 自治会活動と一緒に参加した相手（15～39 歳・参加経験者）



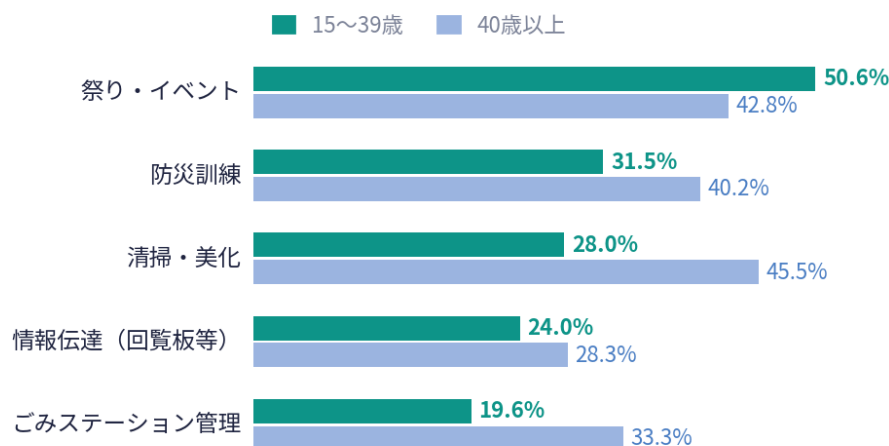
複数回答。家族と一緒にか一人でのどちらかであり、近所の人や友人と一緒に参加した人はごくわずかである。

6 若い世代が続けたいのは交流を伴う活動。祭り・イベントは若い世代の方が続けたい人が多い

清掃を経験した 15～39 歳のうち、今後も清掃をやりたいと答えた人は 28.0%、ごみステーション管理は 19.6%にとどまる。祭り・イベントは 50.6%で、若い世代の方が 40 歳以上（42.8%）よ

り続けたい人が多い唯一の活動である。（第5章）

概要図6 経験した活動を今後も続けたい人の割合（継続率）



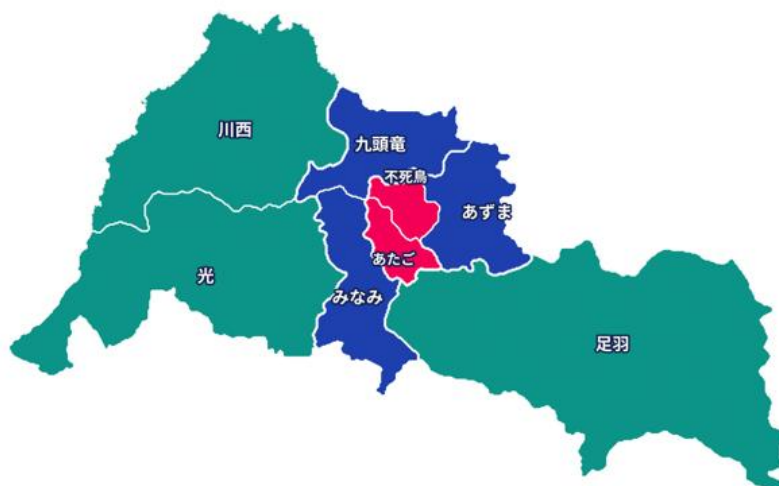
その活動を経験した人のうち、同じ活動を今後もやりたいと答えた人の割合。祭り・イベントのみ15～39歳で40歳以上を上回る。

7 地域による違いは考え方ではなく、抱えている課題の重さ。中山間は若い世代が少ない

地域は、8つの公民館ブロックについて都市計画マスタープランを参考に、市街地中心（不死鳥・あたご、620人）、市街地周辺・郊外（みなみ・あずま・九頭竜、1,305人）、郊外集落・中山間（足羽・光・川西、419人）の3類型に分けて整理した。

概要図7 地域の3類型（公民館ブロック）

- A 市街地中心：不死鳥・あたご（620人）
- B 市街地周辺・郊外：みなみ・あずま・九頭竜（1,305人）
- C 郊外集落・中山間：足羽・光・川西（419人）

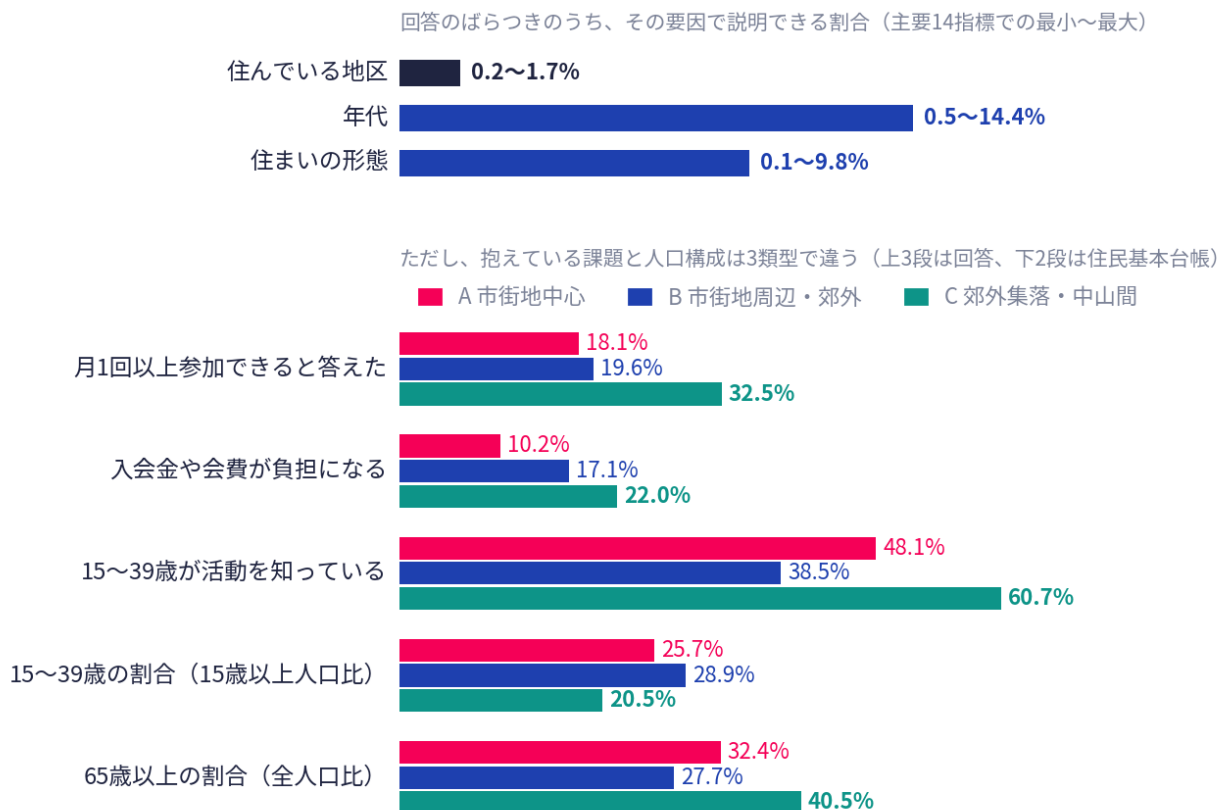


8つの公民館ブロックを、都市計画マスタープランの地域区分に基づき3類型に集約した（資料編A-9）。

地域ごとに取組を分ける必要があるかを確かめるため、参加経験や認知度など主要14の指標について、回答のばらつきが住んでいる地区でどれだけ説明できるかを調べた（資料編A-8）。地

区で説明できるのはいずれの指標でも 2%以下で、年代（最大 14%）や住まい（最大 10%）より小さい（概要図 8）。

概要図 8 地域による違い



若い世代の参加に関する取組は、まず市内共通のものとして考えてよく、地域によって変わるのは、共通の取組のうち何を優先するかである。市街地周辺・郊外では若い世代に活動を知ってもらうことが課題に当たる。中山間では、15歳以上に占める15～39歳の割合が20.5%と3類型で最も低く、65歳以上が人口の40.5%を占める。

中山間にいる若い世代は活動を知っている割合61%、月1回以上参加できると答えた割合17%と3類型で最も自治会に近く、中山間の課題は案内の届き方ではなく、若い世代の数そのものと、いる人の負担である。中山間の会費の負担と高齢者支援の不足は、本調査で確認された課題であり、若い世代の参加とは別の論点を含むため、別途の検討を要する。（第6章）

若い世代の誰に、どう働きかけるか

若い世代を見る軸は二つある。ライフステージ（就業状況と世帯構成）は、何を、どんな形で

頼めるか、そして案内をどの経路で届けるかを決める。自治会との関わり方（参加経験と、参加できると答えた頻度で分けた7層）は、どれくらいの頻度なら引き受けてもらえるかを決める。前者は年齢や世帯構成を見れば判断できるが、後者は本人に尋ねなければわからず、一方から他方を読み取ることはできない。そのため、別々に見たうえで重ねて整理する。（第3部）

軸A ライフステージで見る ― 何を求め、どんな形なら参加でき、案内はどこに届くか

概要表1 ライフステージ別の、求めているものと参加の条件

ライフステージ	求めているもの	参加してもらうために必要な条件	案内が届く経路
 学生 33人	地域の行事より、同世代と関われる場（学生向けイベント 33%、15～39歳全体では 5.8%）	友人と一緒に参加できる 48%、単発で参加できる 45%、その場で分かる見返りがある 42%	LINE 61%、Instagram 42%。電子回覧板は 21% で、世帯宛の配信では届かない
 一人暮らし 29人	祭り・イベントと防災が最多。交流は避けていないが、人付き合いそのものを負担とする人が 69%	短時間で終わる 69%、単発で参加できる 48%、関わりの深さを自分で決められること	電子回覧板 59%、LINE 48%。賃貸・集合住宅の 17 人は多くが未加入で、加入世帯にはある回覧板やごみ当番といった接点がなく、自治会の案内は届かない
 親と同居 56人	同世代と会える場（社会人向けイベント 25%）、技能を活かす場（デジタル関連 16%）	世帯は加入していても本人の認知は 36%、「参加は難しい」38%は 6 つで最も高い。案内が本人に届くこと	電子回覧板 46%。世帯ではなく本人を宛先とする登録が要る
 夫婦のみ 68人	祭り 28%、清掃 26%、防災 24%と分散。こどもを介さずに参加する理由そのもの	「役員の負担が重そう」78%は 6 つで最も高い。引き受けたら何をどれだけやるのが事前に分かること	電子回覧板 75%と、6 つで最も高い
 子育て世帯（未就学児） 283人	子育てに関わる活動 47%。15～39歳の 50%を占める最大のライフステージ	短時間で終わる 66%、こども連れで参加できる 59%。月 1 回以上なら参加できると答えた人は 8% で、月に何度も出してもらう前提の役割は成り立たない	電子回覧板 63%、LINE 62%。紙の回覧板と異なり、世帯主を通さず本人に直接届く手段を求める
 子育て世帯（小中学生） 88人	やりたい活動は平均 1.5 件で分散している。参加経験 86%と最も関わってきた層	「メリットを感じない」59%、「古い慣習が多そう」64%。回数を重ねず、一回ごとに完結する形で頼むこと	LINE 65%、電子回覧板 60%

割合はいずれも 15～39 歳の各ライフステージ内の値。人物像の詳細は第 8 章。

15～39 歳 567 人を 6 つのライフステージに分けると、自治会活動に参加したことがある割合は、一人暮らし 34%から子育て世帯（小中学生）86%まで開く。自治会活動に参加したことがあ

るかかどうかは、ライフステージでかなり説明できる（一方、どれくらいの頻度なら参加できるかはライフステージからは分からない。軸 B で扱う）。求めているものも、参加できる形も、案内が届く経路も、ライフステージによって異なる。

求めているものと参加の条件はライフステージで分かれ、案内の経路も、電子回覧板が夫婦のみ 75% に対し、学生 21% と 3 倍以上の開きがあって一本に絞れない。LINE はどのライフステージでも 41~65% と、最も共通した手段である。（第 7 章、第 8 章）

軸 B 自治会との関わり方で見るとどれくらいの頻度なら引き受けてもらえるか

同じ 567 人を、参加経験の有無と、参加できると答えた頻度で 7 つの層に分けた。最も大きいのは B 層 284 人（15~39 歳の 50%）で、半年~年 1 回の頻度で参加を続けている。以下では、最大の層である B 層と、働きかけの余地が大きいと読める三つの層を代表例として示す。

概要図 9 15~39 歳 567 人を、自治会との関わり方で 7 層に分ける



「参加あり」は自治会や地域の活動に参加したことがある人、「未参加」は参加したことがない人。

既に月 1 回以上参加している層（A 層、48 人）— 若い担い手が既にいる

A 層 48 人は、自治会活動に参加したことがあり、月 1 回以上参加している層である。技能を持つ人が 69%、やりたい活動が平均 3.6 件と最も前向きだが、活動条件として「活動内容が事前に分かる」56%、「こども連れで参加できる」58%を挙げる。こどもを連れて出られることと、何をどれだけやるのかが事前に分かることが、この層が参加を続ける条件である。（第 9 章）

半年~年 1 回の参加を続けている層（B 層、284 人）— 50%を占める最大の層

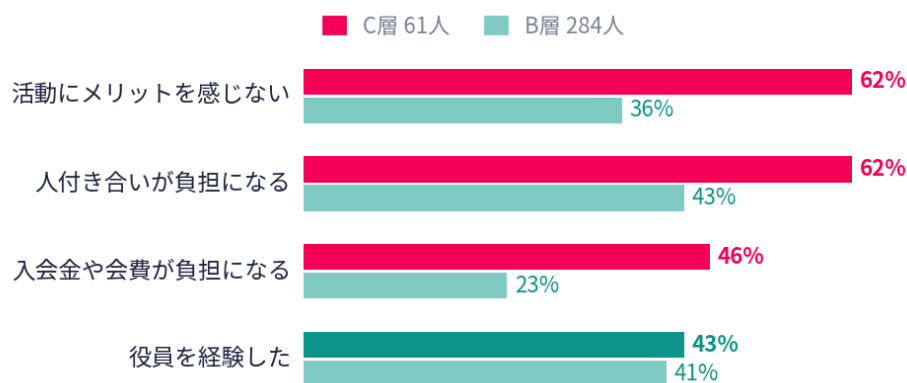
参加は続いているが頻度は半年~年 1 回で、活動を知っている人 62%、技能を持つ人 40%、参

加してみたい活動として選んだ数は一人あたり平均 1.9 件と、A 層と C 層の中間にある。58%は子育て世帯（未就学児）である。参加しやすくなる条件は「短時間で終わる」70%が最も高く、「単発で参加できる」は 33%にとどまる。この層が参加を続けるか、C 層に近づくかが全体を左右する。（第 9 章 1 節、図 10-2）

参加をやめかけている層（C 層、61 人） — 64%はやりたい活動を持っている

C 層 61 人は、「活動にメリットを感じない」62%、「人付き合いが負担になる」62%、「入会金や会費が負担になる」46%と、否定的な回答が他層より際立って高い（役員経験は 43%で他層と差はない）。直近の参加が今年のは 54%と A 層 75%・B 層 68%より低く、参加の間隔が開きつつある。関心は残っており、やりたい活動を挙げた人が 64%いる。求めているのは短時間で終わること（51%）と、会費や人付き合いの負担が軽いことである。（第 9 章、第 11 章 3 節）

概要図 10 C 層 61 人と B 層 284 人の比較

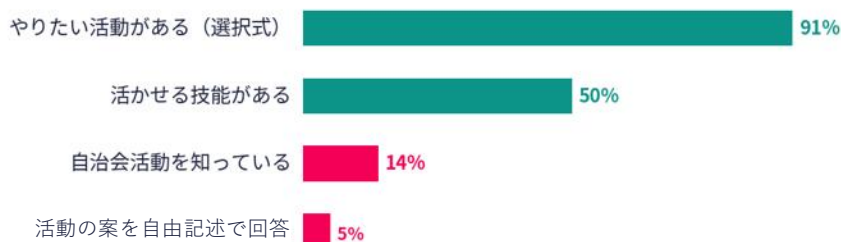


参加を妨げているもの（複数回答）と役員経験の割合。障壁の 3 項目は C 層が B 層を大きく上回るが、役員経験に差はない。

参加できると答えた層（D・E・F 層、116 人） — 91%が参加してみたい活動を持つ

参加したことがない 174 人の 67%にあたる 116 人は、頼まれれば参加できる頻度を答えており、7 層では D・E・F 層にあたる。この層はやりたい活動を挙げた人が 91%、活かせる技能を持つ人が 50%いる。一方、116 人の 71%（82 人）は既に加入世帯にいるのに、その 88%は活動を知らない（概要 1・2）。選択肢を示して尋ねれば、この層の希望は拾える（自由記述で活動案を書いたのは 5%）。参加できると答えた頻度は、半年に 1 回 55 人、年 1 回 32 人と年 1～2 回が中心で、月 1 回以上は 14 人である。したがって、この層には年 1～2 回で完結する役割を用意することが前提になる。（第 9 章 2 節・3 節）

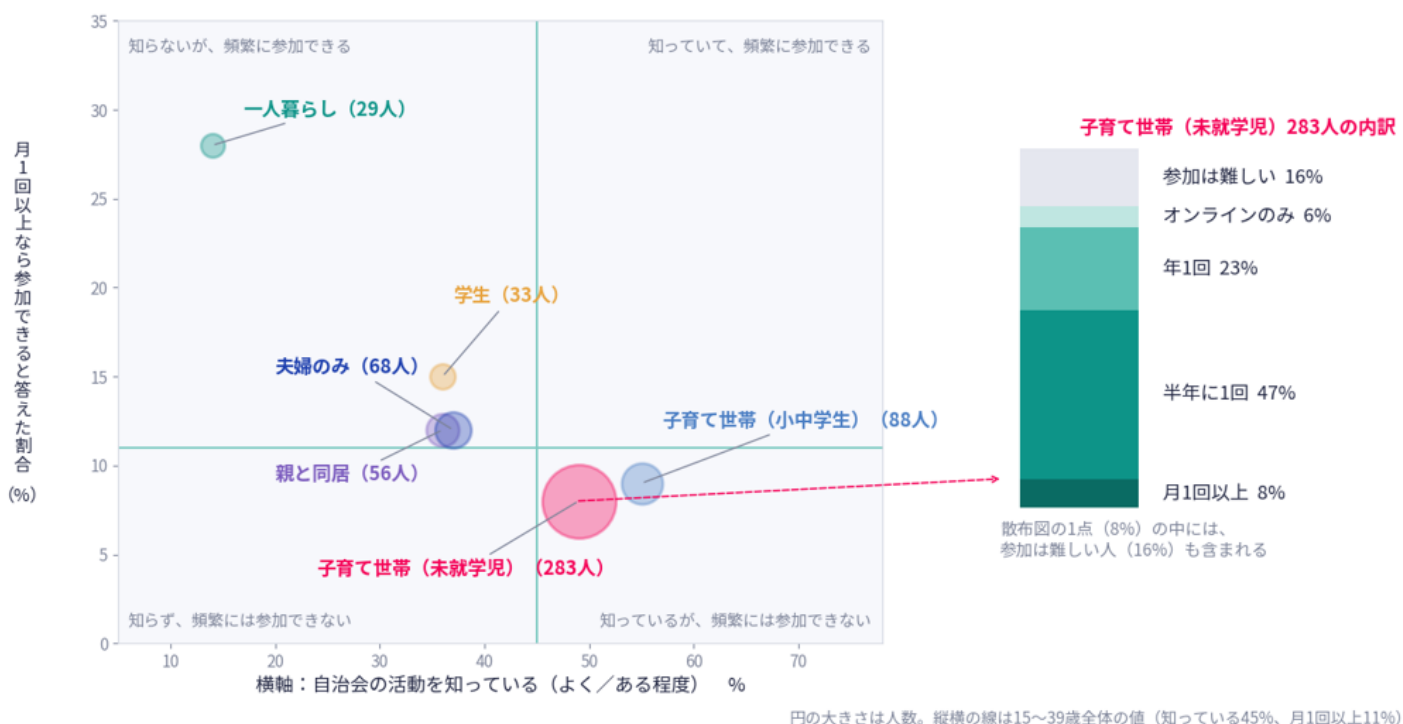
概要図 11 参加できると答えた 116 人に、あるものと足りないもの



軸 A×B 重ねて見る — 最も頻繁に参加できると答えたのは、つながりの少ない一人暮らし

ライフステージごとに見ると、活動を最もよく知っている子育て世帯（小中学生）（55%）と子育て世帯（未就学児）（49%）は、月 1 回以上なら参加できると答えた割合が 9%・8%と最も低い。活動を最も知らない一人暮らし（14%）は 28%と、最も頻繁に参加できると答えている。個人として見れば、第 7 章 3 節で示すように活動を知っている人ほど頻繁に参加できると答えるが、ライフステージ単位では、つながりの多い層ほど時間の制約が強く、逆の傾向になる。

概要図 12 ライフステージ別の、活動の認知と、月 1 回以上参加できると答えた割合



15～39 歳のみ。左の散点図は、横軸が設問 9 で「よく」「ある程度」知っていると答えた割合、縦軸が設問 20 で「月 1 回以上なら参加できる」と答えた割合。円の大きさは人数（図 10-1 と同じ）。右の帯は、例として子育て世帯（未就学児）283 人が答えた頻度の内訳（図 7-2 と同じ）。

概要図 12 の散点図はライフステージごとに一つの値を示しているが、同じライフステージの中でも、参加できる頻度は人によって大きく違う。右の帯が示すように、子育て世帯（未就学児）283 人のうち、月 1 回以上参加できると答えた人は 8%いる一方、参加は難しいと答えた人も

16%いる（他のライフステージは図 7-2）。ライフステージからその人の頻度は分からないため、自治会が外から対象を選ぶのではなく、選択肢を示して本人に選んでもらう形が前提になる。

（第 10 章）

ライフステージと関わり方の 7 層を重ねると（図 10-2）、誰に、どの経路で案内し、どんな形で頼めばよいか具体的になる。参加できると答えた 116 人は、子育て世帯（未就学児）37%、親と同居 18%、夫婦のみ 17%、一人暮らし 15%と、一つのライフステージに偏っていない。したがって案内の経路は一本では届かず、園を通じた告知、世帯の中の若い人に宛てた案内、集合住宅の管理会社を通じた案内等を組み合わせる必要がある。月 1 回以上参加している 48 人（A 層）は 46%が子育て世帯（未就学児）で、この層が参加を続けるには、こども連れで参加できる運営が条件になる。参加をやめかけている 61 人（C 層）は 69%が子育て世帯（未就学児・小中学生）で、こどもが小学校を卒業すると地域とのつながりが切れるという第 8 章 6 節の指摘と重なる。

（第 10 章）

今後の取組への示唆

以上から、次の 8 点が導かれる。それぞれ誰に効果があるのかを対象と規模で示す。

概要表 2 分析から導かれる取組の示唆と、その対象

示唆	誰に（規模）	関係する主体	根拠となる数字
A 案内を届ける			
1 転入時・加入時の案内を標準化する	未加入者（全年代 70 人）、転入 5 年未満（64 人）、賃貸・集合住宅の 15～39 歳（94 人）	地域振興課、市自治会連合会、自治会	未加入者の記述 52 件中 33 件は案内・対象外・親世帯経由。自分の意思是 15 件
2 世帯主で止まらない連絡経路をつくる	会員世帯の中の若い人＝参加できると答えた未参加（D・E・F 層 116 人）。希望は選択肢を示して聞く	地域振興課、自治会	未参加 174 人の 67% が参加できると答え、その 71% は加入世帯、うち 88% が活動を知らない
3 情報を届ける手段を、紙から電子に移す	全世代（電子回覧板で見たい 63.0%）	地域振興課、依頼文書を出す各課、自治会	若い世代で高い論点（15～39 歳 27.4%、40 歳以上 17.4%）
B 参加のきっかけをつくる			
4 個人として関われるきっかけを設ける	技能があるのに参加したことがない 15～39 歳（70 人）	自治会、まちづくり組織、公民館等	近所の人と参加 3.1%、友人と 1.3%
5 最初に頼む活動は、維持管理ではなく交流と学びから	これから参加する人すべて	自治会、まちづくり組織、公民館等	継続率は祭り 50.6%、清掃 28.0%。選択肢にない案 37 件
6 子育て世帯への配慮と、こどものいない層向けの行事や役割を両立させる	子育て世帯（371 人）とこどものいない若い世代（186 人）	自治会、まちづくり組織、公民館等	前者はつながりがあり時間がなく、後者は逆。地域で力点が違う
C 負担を減らす			
7 市や各種団体が自治会に依頼している業務を見直す	現に役員を担っている人（全年代、参加経験者の 27.7%）	全庁、地域振興課	最多論点は役員・当番の負担（33.9%、40 歳以上 36.4%）
D 運営を見直す			
8 慣習と役割を見直す場をつくる	自治会の役員・総会の運営（全年代）	自治会、市自治会連合会、地域振興課	2 番目に多い論点は古い慣習・世代間の断絶（21.6%、15～39 歳 26.2%）。不公平感 12.0%

規模は、断りのない限り 15～39 歳 567 人の中での人数。関係する主体は事務局の整理（表 12-1）。示唆 6 の地域の力点は概要の 7 を参照。

第 1 部 調査の設計

第 1 章 調査の概要

1.1 目的

自治会の担い手不足と加入率の低下が続くなか、福井市は 2026 年度（令和 8 年度）に「持続可能な自治会モデル検討プロジェクト」を開始した。本調査はその基礎資料として、市民が自治会をどう認識し、何が参加を妨げているかを、若い世代に焦点を当てて把握するものである。

1.2 調査の設計

表 1-1 調査の概要

項目	内容
対象	福井市民（15 歳以上）
周知	回覧板（紙・電子）、福井市公式ホームページ、福井市公式 LINE、庁内掲示板
方法	インターネット回答（2,320 件）、庁内 LGWAN 回答（204 件）
期間	2026 年 8 月 12 日～9 月 11 日
設問数	28 問（5 群）
回答数	2,524 件

1.3 設問の構成

設問は 5 つの群で構成した。（表 1-2。設問と選択肢の全文は資料編 E）

表 1-2 設問の 5 群

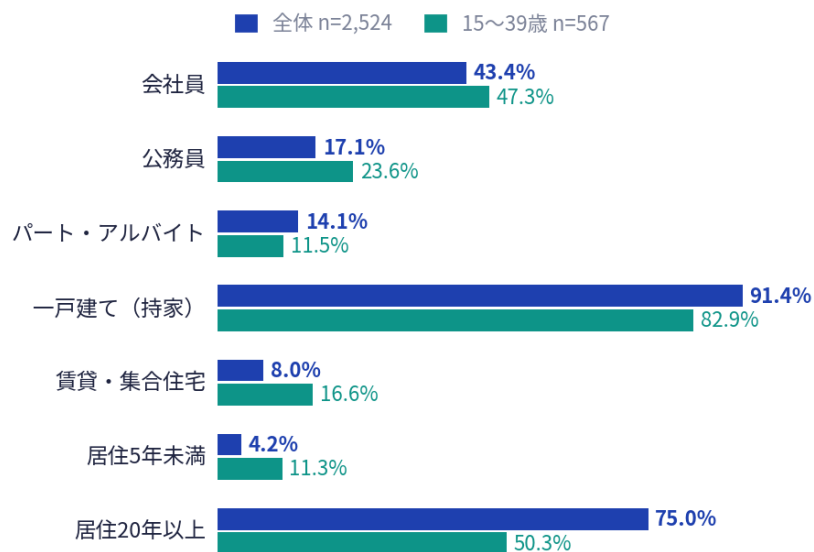
設問	群	内容
1～7	あなたのこと	年齢、就業状況、世帯、居住年数、住居、公民館ブロック
8～18	自治会との距離	近所づきあい、認知度、参加経験、参加した活動、同行者、加入状況、印象、役員経験
19～22	参加の障壁と条件	参加を妨げるもの、参加できる頻度、今後やりたい活動、参加しやすくなる条件
23～26	情報と暮らし	情報発信の手段、困りごと、知りたい情報、活かせる技能
27・28	自由記述	参加したい活動の案、自治会への本音

第2章 回答者の構成と標本の性質

2.1 回答者の構成

回答者の年代は30代から60代に集中し、40歳以上が77.3%、15～39歳は567人（22.5%）である。公務員が17.1%と高いのは片内LGWAN経由の回答を含むためである。住まいは一戸建て持家が91.4%、居住20年以上が75.0%を占める。

図2-1 回答者の属性（全体／15～39歳）



「賃貸・集合住宅」は一戸建て（賃貸）、賃貸マンション・アパート、団地・社宅、分譲マンション・アパートの合計。

2.2 標本の性質

本調査は無作為抽出ではなく、回覧板と広報による自発的な回答である。回答者は自治会加入済みが97.2%、参加経験ありが86.6%と、既に自治会とつながっている層に偏っている。市の若年人口全体を代表する数字ではなく、「加入世帯に属する人たちの声」として読む必要がある。なお回答者の17.1%を占める公務員を除いても、主要指標の差は3ポイント以内である（資料編A-10）。

地理的な代表性

公民館ブロック別の回答シェアは、市の人口シェア（2026年8月1日現在、15歳以上・日本人）と比べておおむね±4ポイント以内に収まる（図2-2。最大はあずまブロックの+4.0ポイント）。人口シェアで重み付けした場合の主要指標の変化は最大0.6ポイントであり、地理的な偏りは結論に影響しない。

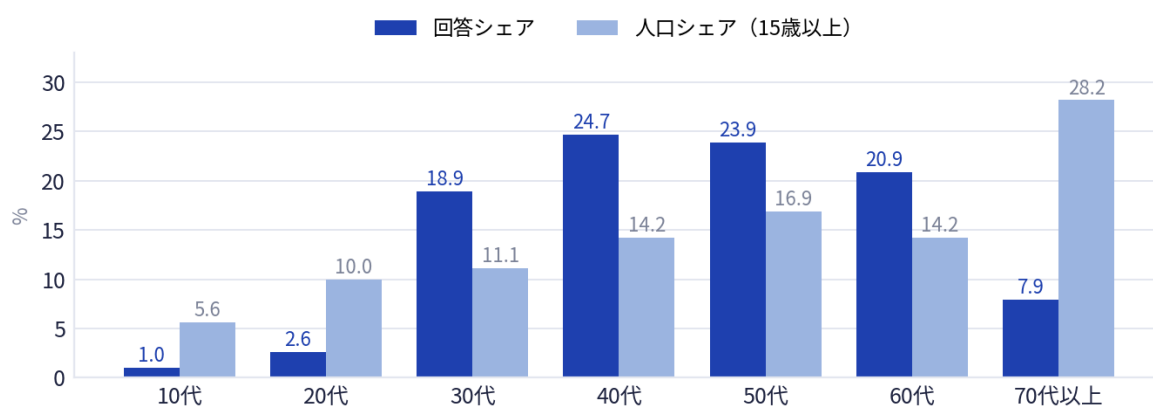
図 2-2 公民館ブロック別の回答シェアの過不足（人口は 15 歳以上・日本人）



年代構成の偏りと補正の検討

一方、年代構成は市の人口と大きく異なり、市民の 28.2% を占める 70 代以上の回答は 7.9% にとどまる。（図 2-3）

図 2-3 回答者の年代構成と市の人口構成



この偏りは、年代ごとに回答の重みを変えて数え直す補正で打ち消せる。しかし本調査では 10 代 24 件を 5.8 倍、70 代以上 200 件を 3.6 倍に数えることになり、少数の回答の偶然に全体の値が左右され、精度を表す有効な回答数は 2,518 件から 1,221 件へ半減する。このため本書は補正前の値を本文の数値とし、補正後の値は参考にとどめた（資料編 A-10）。

第2部 全体で見る

第3章 結果の概観

本章では全設問の集計結果を、設問の5群に沿って示す。数値の解釈は第12章で行い、本章は事実の記録にとどめる。本章の図は15～39歳と40歳以上を棒で示し、全体の値を右端に数字で添えた。資料編Cの表には三つを併記した。本文で世代差に触れるときは、15～39歳を含む全体ではなく、40歳以上と比較する。

3.1 自治会との距離

近所づきあいが「ある」「少しある」人は全体で63.2%、15～39歳で47.8%である。15～39歳では「あまりない（挨拶を交わすのみ）」が最も多い。自治会活動を「よく知っている」「ある程度知っている」人は全体72.5%に対し15～39歳は44.8%にとどまり、「ほとんど知らない」「存在自体を知らない」は15～39歳で37.9%と、40歳以上（11.1%）の3倍を超える。

図3-1 ご近所づきあい【設問8】

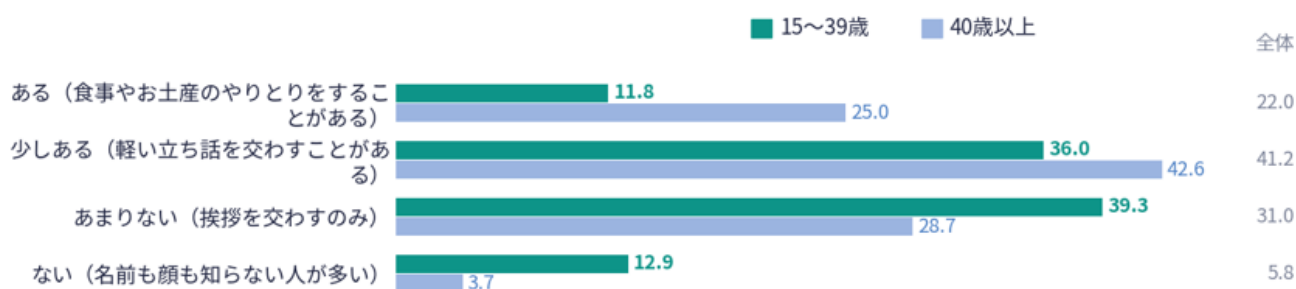
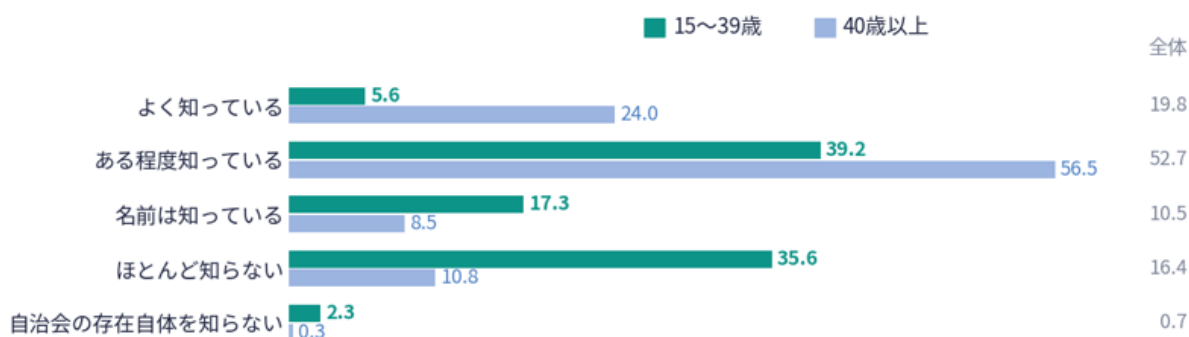


図3-2 自治会活動の認知度【設問9】



参加経験がある人は全体 86.6%、15～39 歳 69.3%である。自治会に加入済みの人は全体 97.2%で、未加入・退会済みは 2.4%にとどまる。参加経験者のうち役員を現に務めている人は全体 27.7%、以前務めた人は 47.0%である。

図 3-3 自治会活動への参加経験【設問 10】

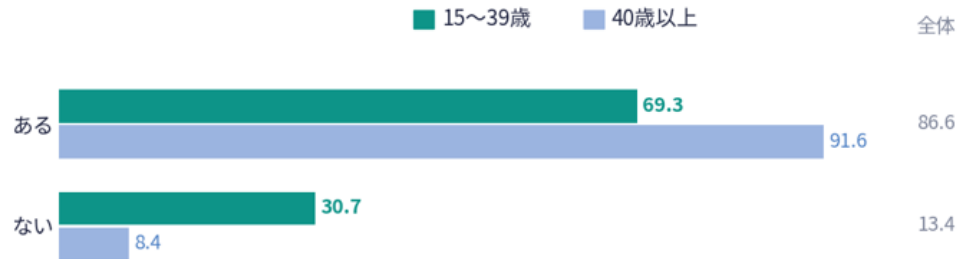


図 3-4 自治会の加入状況【設問 14・17】

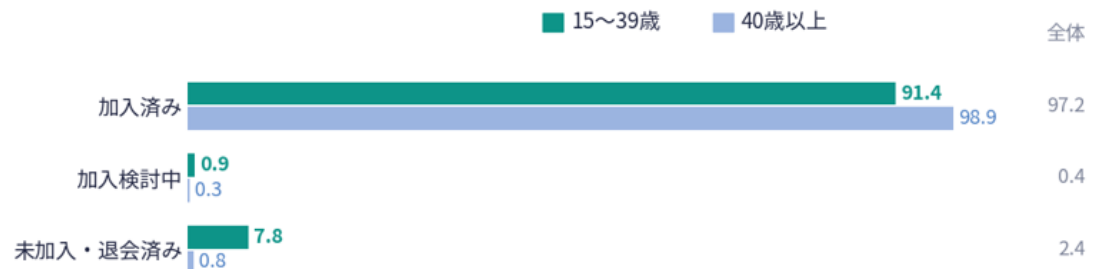
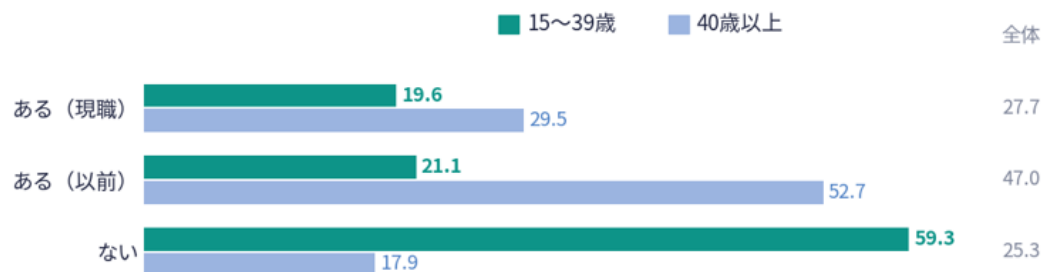


図 3-5 役員・運営の経験【設問 16】（参加経験者）



母数は参加経験者（全体 2,186 人、15～39 歳 393 人）。

3.2 参加の経験

参加経験者が経験した活動は、清掃・美化が全体 84.8%で最も多く、情報伝達（回覧板等）、祭り・イベントが続く。15～39 歳は 40 歳以上に比べ、いずれの活動でも経験率が低い。

図 3-6 参加したことのある活動【設問 11】（参加経験者、複数回答）

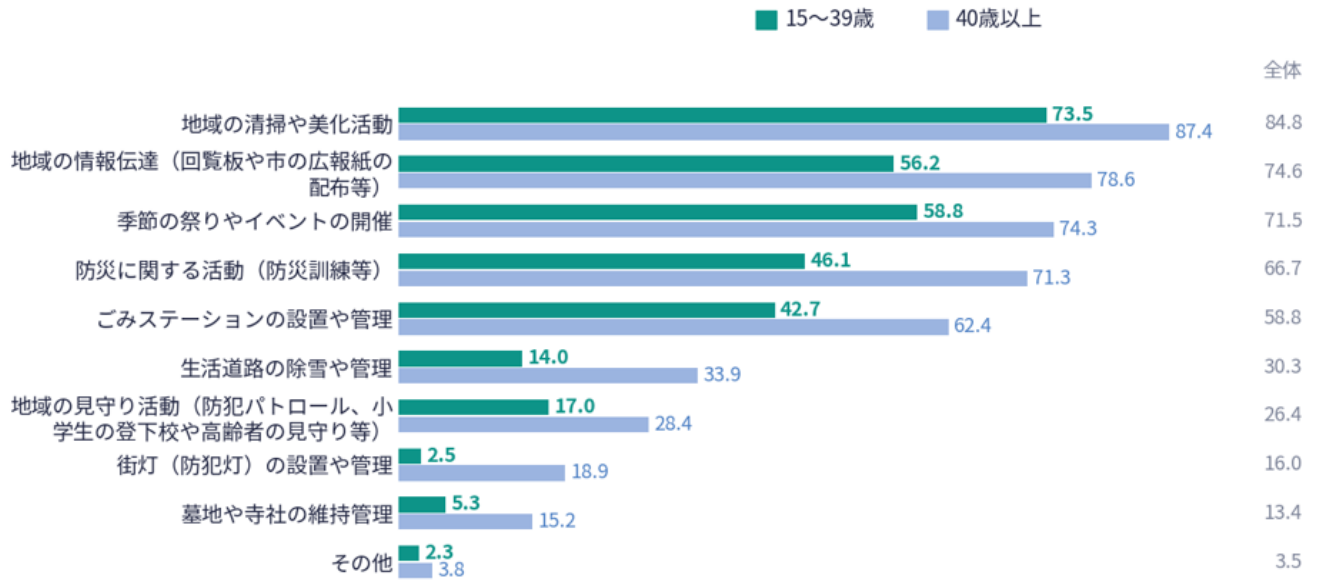
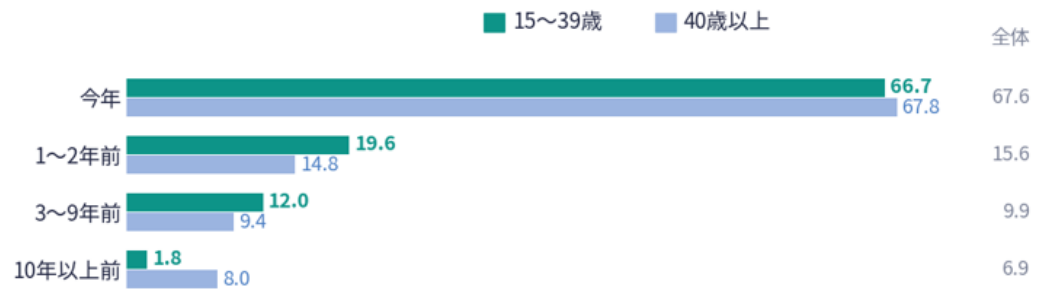


図 3-7 直近の参加時期【設問 12】（参加経験者）

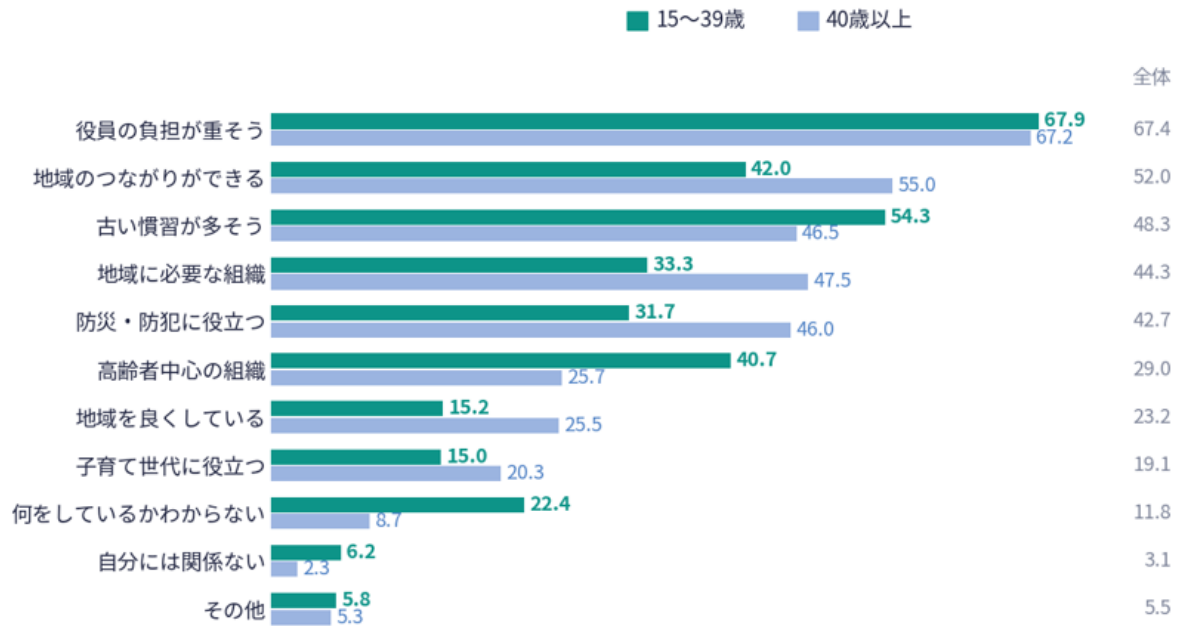


誰と一緒に参加したかは、世代で違いが大きいため第 4 章 3 節（図 4-3）で扱う。

3.3 印象・障壁と条件

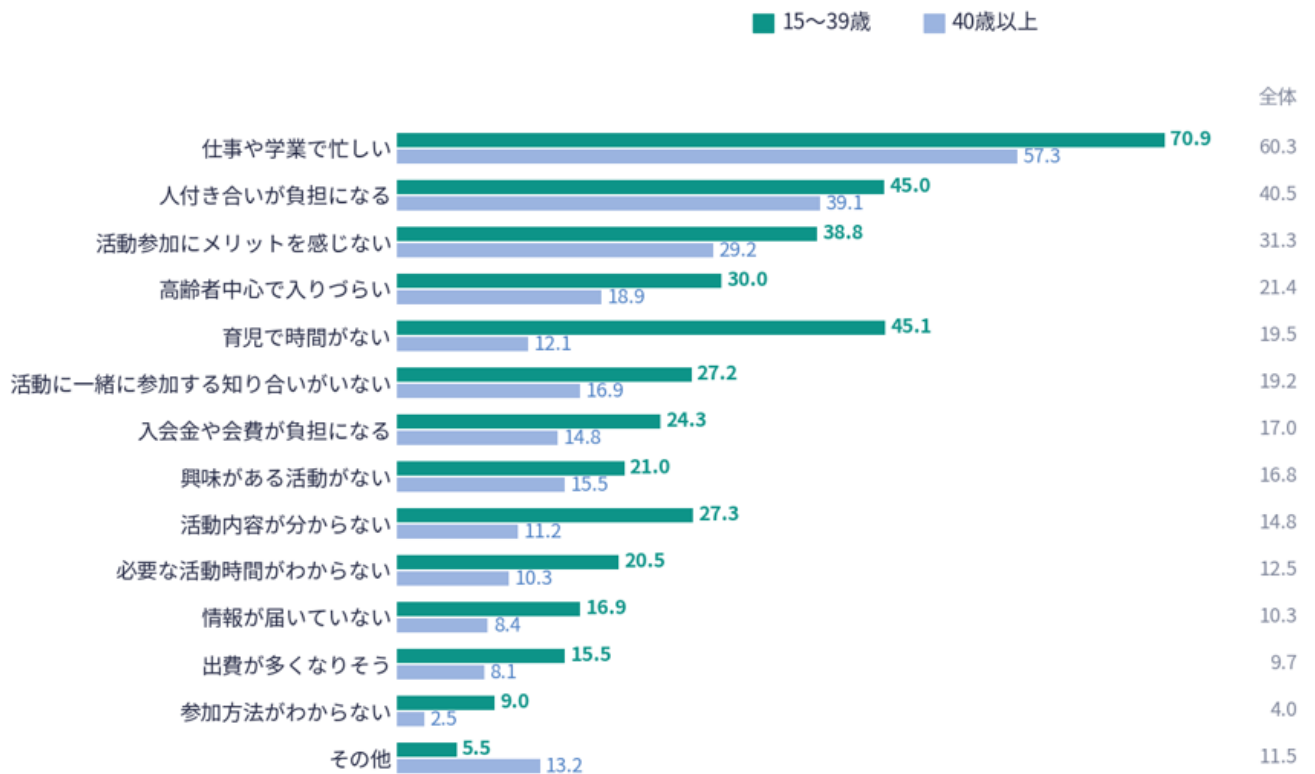
「役員の負担が重そう」が全体 67.4%で最も多い。15～39 歳では「古い慣習が多そう」「高齢者中心の組織」が 40 歳以上より高く、「地域に必要な組織」は低い。

図 3-8 自治会に対する印象【設問 15・18】（複数回答）



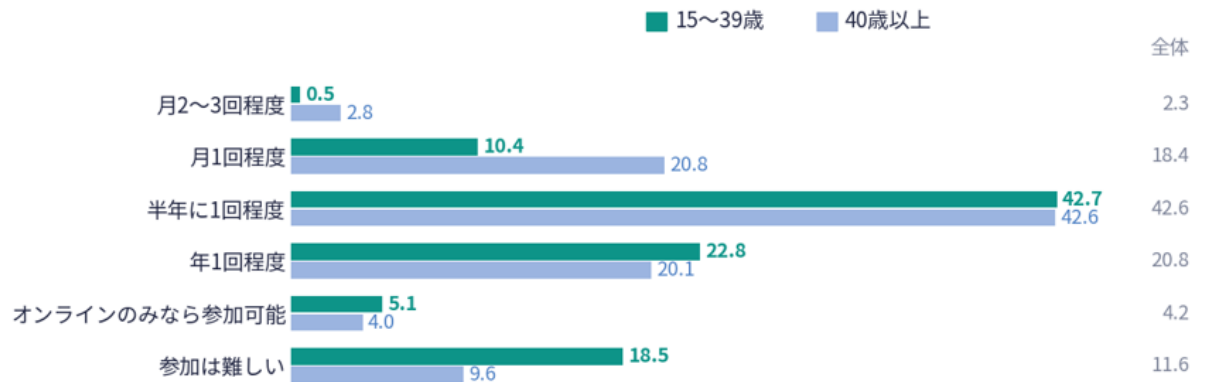
参加を妨げているものは「仕事や学業で忙しい」が全体 60.3%で最も多い。15～39 歳では「育児で時間がない」が 45.1%と 40 歳以上（12.1%）を大きく上回る。

図 3-9 活動への参加を妨げているもの【設問 19】（複数回答）



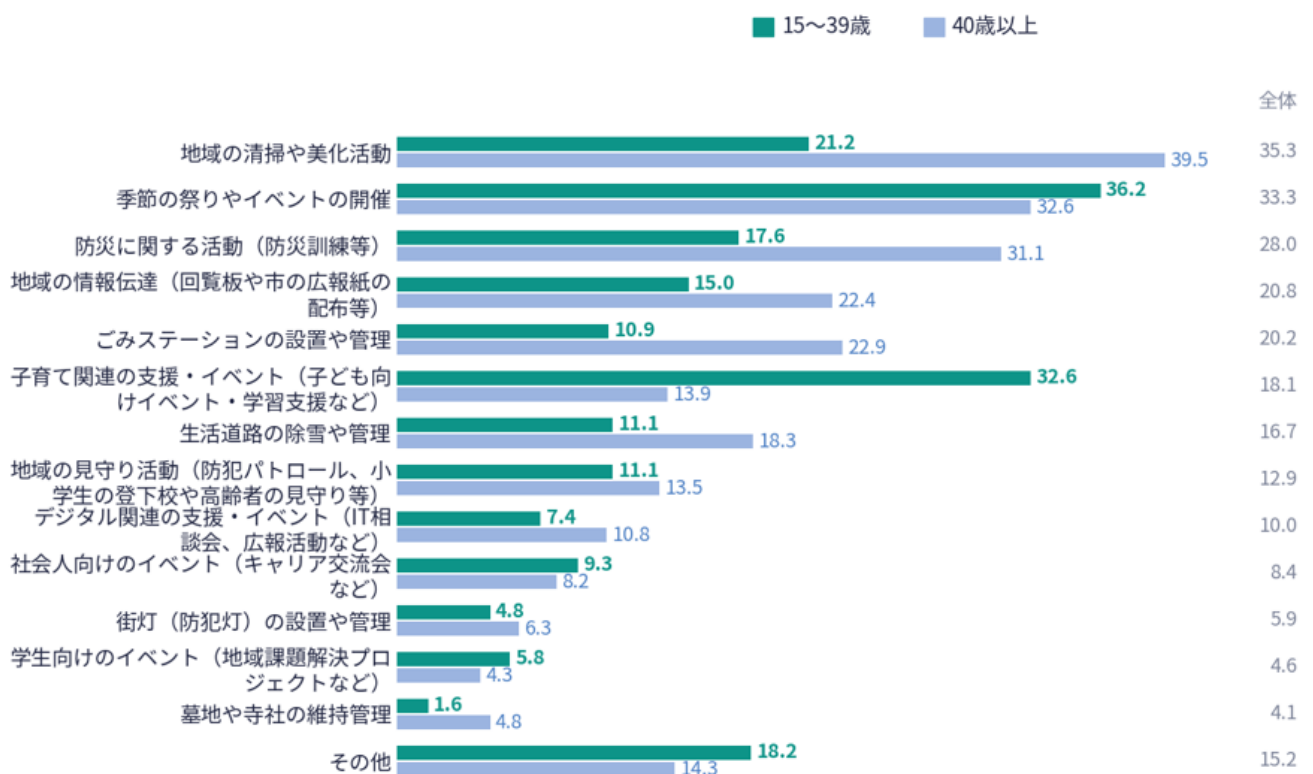
参加できると答えた頻度は「半年に1回程度」が最も多い。月1回以上なら参加できる人は全体 20.7%、15～39 歳 10.9%である。「参加は難しい」は 15～39 歳で 18.5%と 40 歳以上 (9.6%) より高い。

図 3-10 参加できる負担の程度【設問 20】



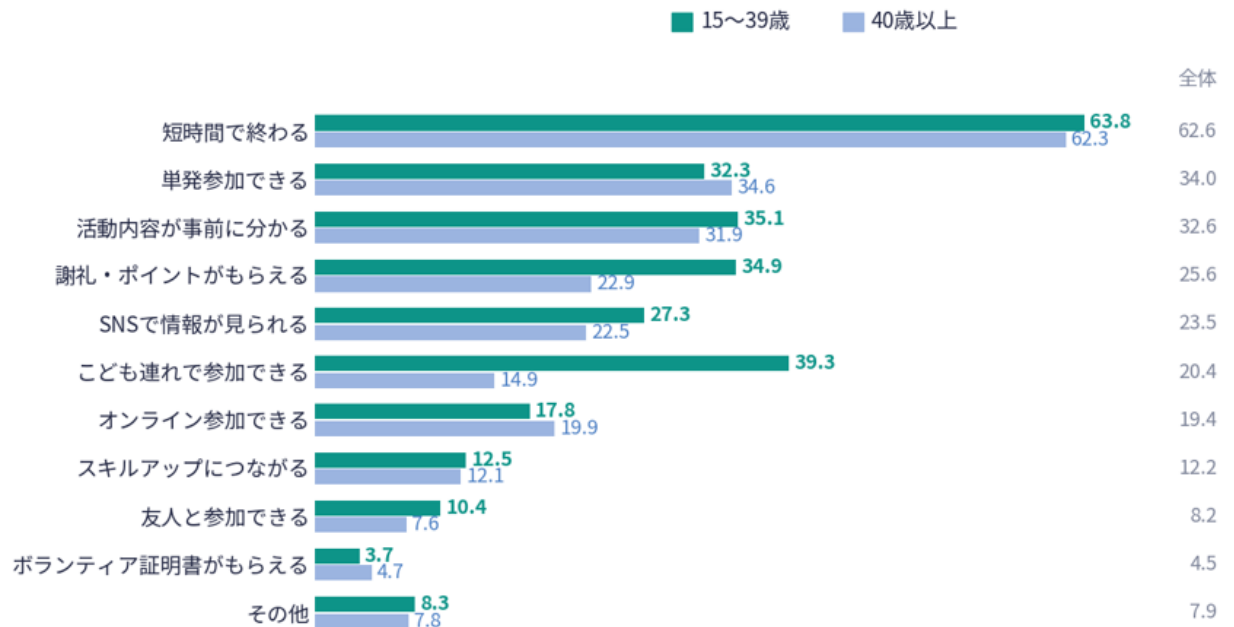
今後参加してみたい活動は清掃・美化と祭り・イベントが上位である。15～39 歳では子育て関連の支援・イベントが 32.6%と、40 歳以上 (13.9%) を大きく上回る。また、この 13 の選択肢では拾えない活動が自由記述に書かれており、第 5 章 2 節で扱う。

図 3-11 今後参加してみたい活動【設問 21】（複数回答）



参加しやすくなる条件は「短時間で終わる」が全体 62.6%で突出している。15～39 歳では「こども連れで参加できる」が 39.3%、「謝礼・ポイントがもらえる」が 34.9%と、いずれも 40 歳以上（14.9%、22.9%）を上回る。

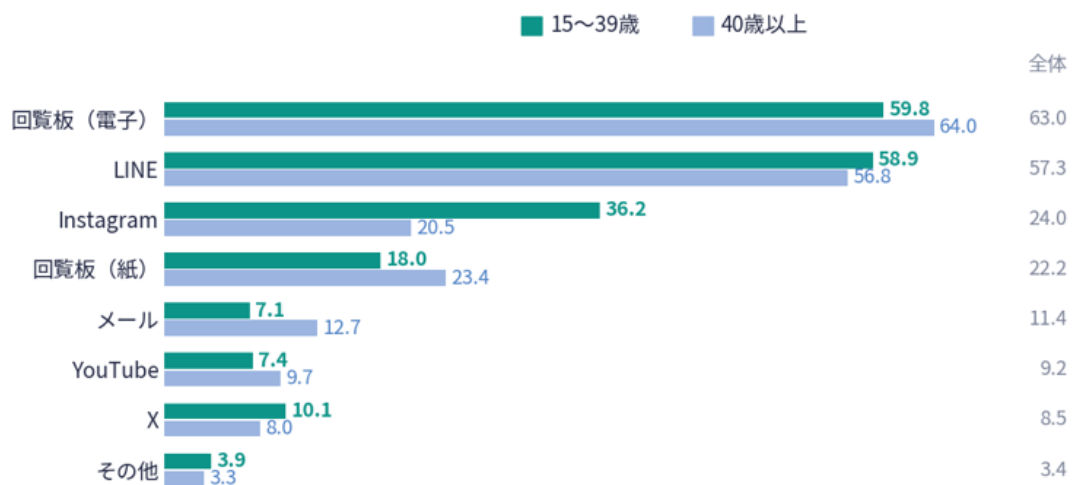
図 3-12 参加しやすくなる条件【設問 22】（複数回答）



3.4 情報と暮らし

見たい情報発信の手段は「回覧板（電子）」が全体 63.0%、「LINE」が 57.3%で上位である。15～39 歳では Instagram が 36.2%と、40 歳以上（20.5%）を大きく上回る。

図 3-13 見たい情報発信の手段【設問 23】（複数回答）



地域で困っていることは「特にない」が全体 32.6%で最も多く、災害への備えと防犯の不安が続く。15～39 歳では「若者同士の交流が少ない」（27.3%、40 歳以上 17.8%）と「子育て支援が不足」（14.8%、同 5.2%）が 40 歳以上を上回る。知りたい情報は防災情報が全体 67.6%で最も多いが、15～39 歳では子育て情報が 45.7%と 40 歳以上（12.6%）を大きく上回る。

図 3-14 地域で困っていること【設問 24】（複数回答）

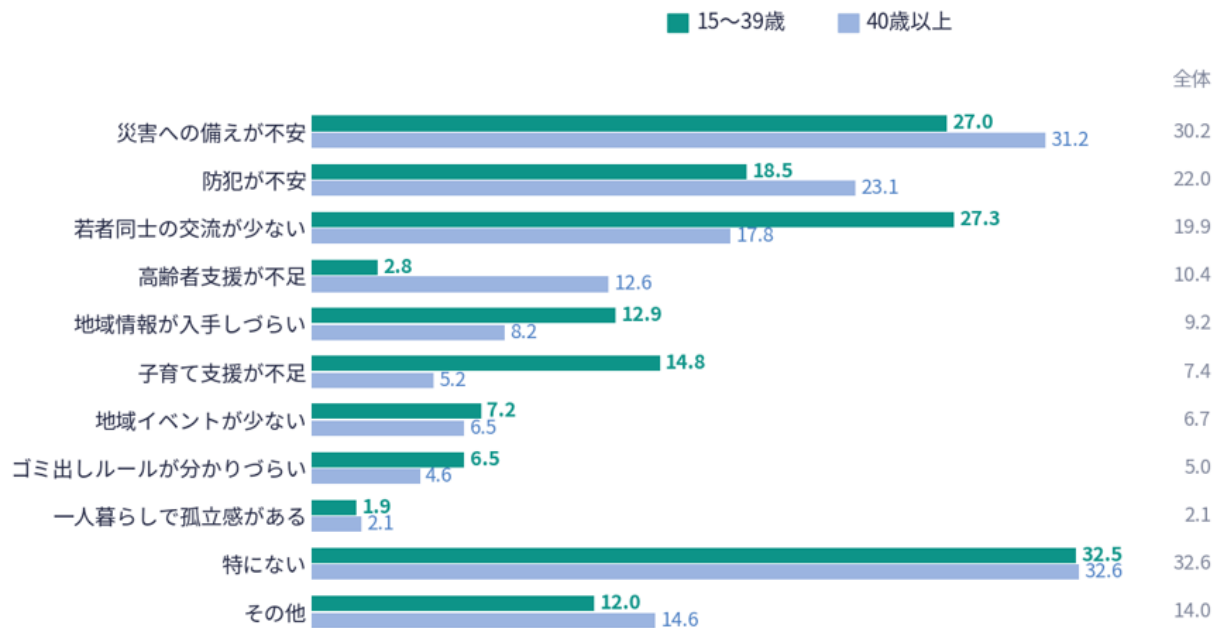
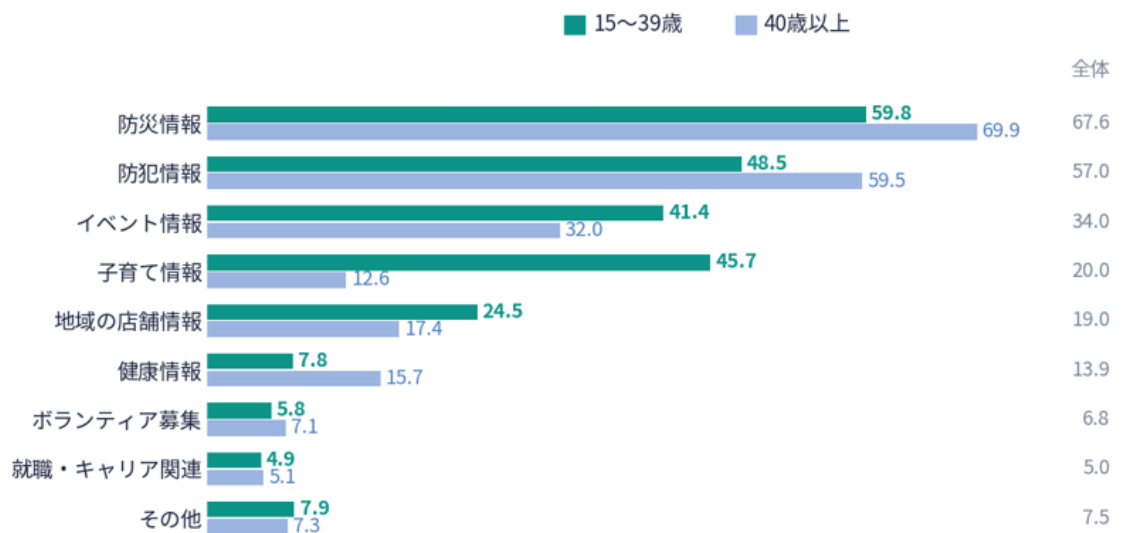
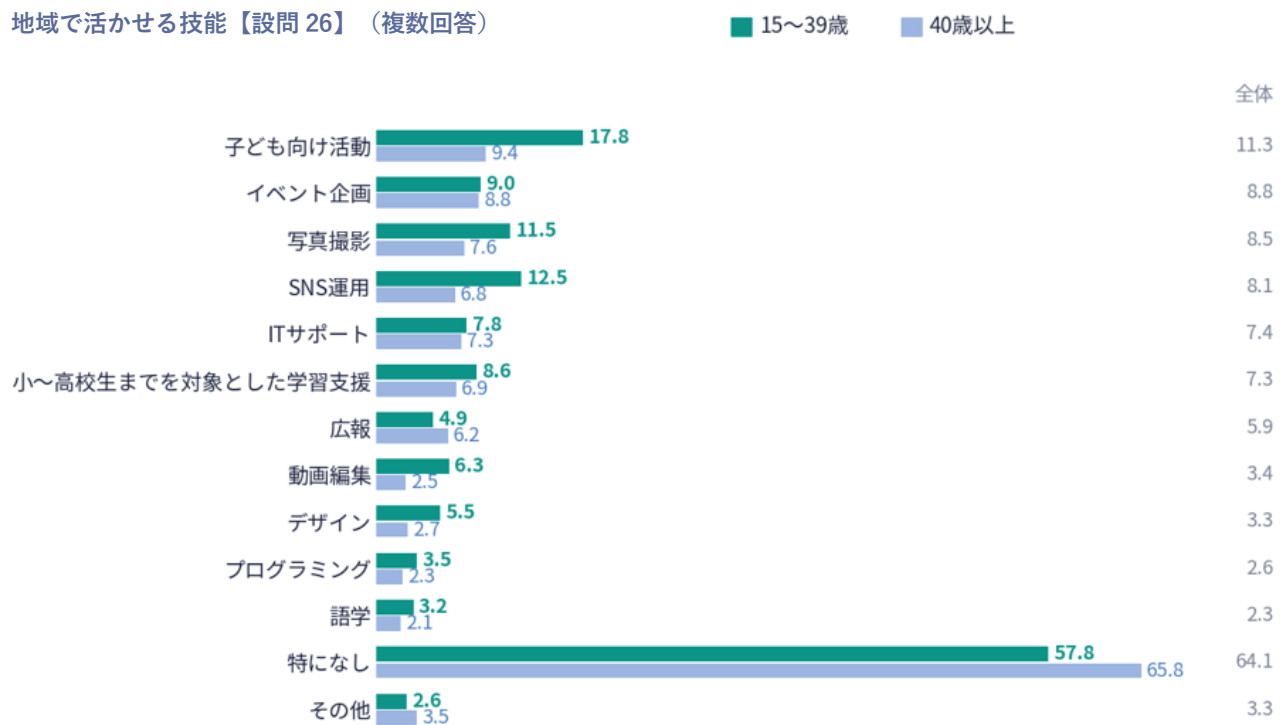


図 3-15 地域について知りたい情報【設問 25】（複数回答）



地域で活かせる技能は「特になし」が全体 64.1%を占めるが、15～39 歳ではこども向け活動（17.8%、40 歳以上 9.4%）、SNS 運用（12.5%、同 6.8%）、写真撮影（11.5%、同 7.6%）を挙げる割合が 40 歳以上を上回る。

図 3-16 地域で活かせる技能【設問 26】（複数回答）



3.5 自治会への本音

本節は設問 28「自治会への本音」の 1,078 件を扱う。合計は約 11 万 8 千字、1 件あたり平均 109 字（中央値 75 字、最長 946 字）で、100 字以上の記述が 415 件ある。設問 27「参加したい活動の案」の 300 件は活動分野の話であるため、第 5 章 2 節で扱う。

本音を 1 件ずつ読んで分類すると、批判を含む記述（批判・不満・両論）は 15～39 歳 78.6%、40 歳以上 71.5%で、若い世代がやや多い。ただし、「こう変えてほしい」という要望の表現を含む記述は 15～39 歳 63.7%、40 歳以上 59.7%と、どちらの世代でも 6 割を占める（概要図 4）。

論点別に数えると、最も多いのは役員・当番の負担で、40 歳以上の 36.4%が言及している。15～39 歳では 25.0%と少ない。役員を担う年代は 40 歳以上に偏っているためである。年齢などの条件を揃えると、以前役員を務めた人は役員経験のない人より月 1 回以上の参加に応じにくく

（第 11 章 3 節）、役員の負担は再任を妨げる。2 番目に多いのは古い慣習・世代間の断絶で、15～39 歳 26.2%、40 歳以上 20.2%。意思決定が高齢者中心で若い世代や女性の意見が通らない、未だに男尊女卑のような古い考え方が根付いている、という指摘である。15～39 歳が 40 歳以上を統計的に上回る論点はこれを含めて四つあり、デジタル化・情報公開（27.4%対 17.4%）、共働き・子育て世代への配慮（22.6%対 10.4%）、ごみステーション問題（13.3%対 7.7%）が並ぶ。

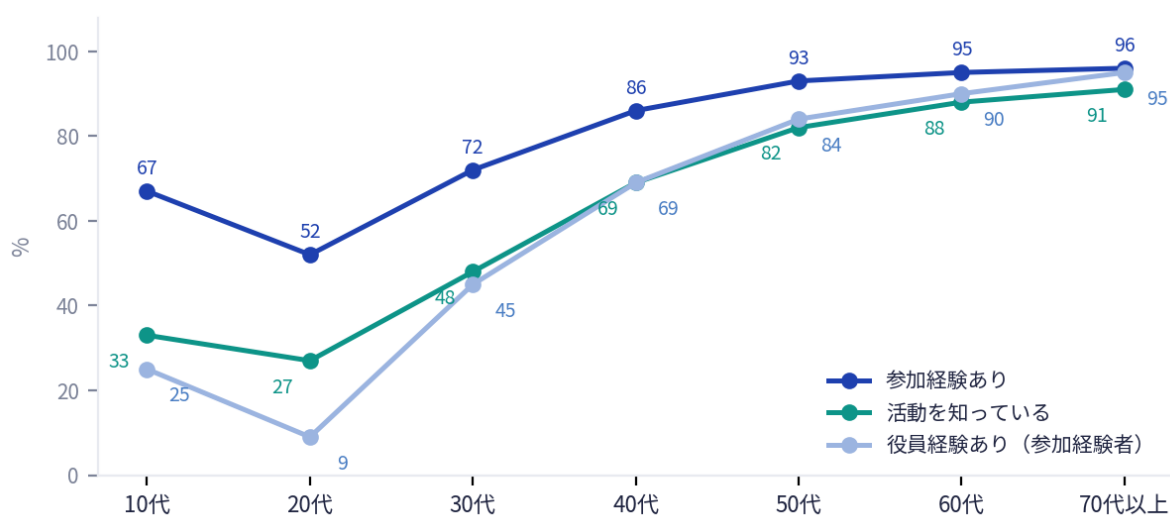
各論点にどのような訴えが書かれていたかは資料編 B に整理した。回答者の特定を避けるため原文は掲載していない。

第4章 世代で見る

4.1 認知と参加は年代とともに上がる

参加経験と認知度は年代が上がるほど高く、役員経験は40代以降で増える。30代と40代の間で認知度が変わることは、若い世代が特別に知らないというより、役員が回ってくる年齢になれば誰でも知るようになるという加齢の効果を含んでいる可能性がある。本調査ではこの二つを区別できない。

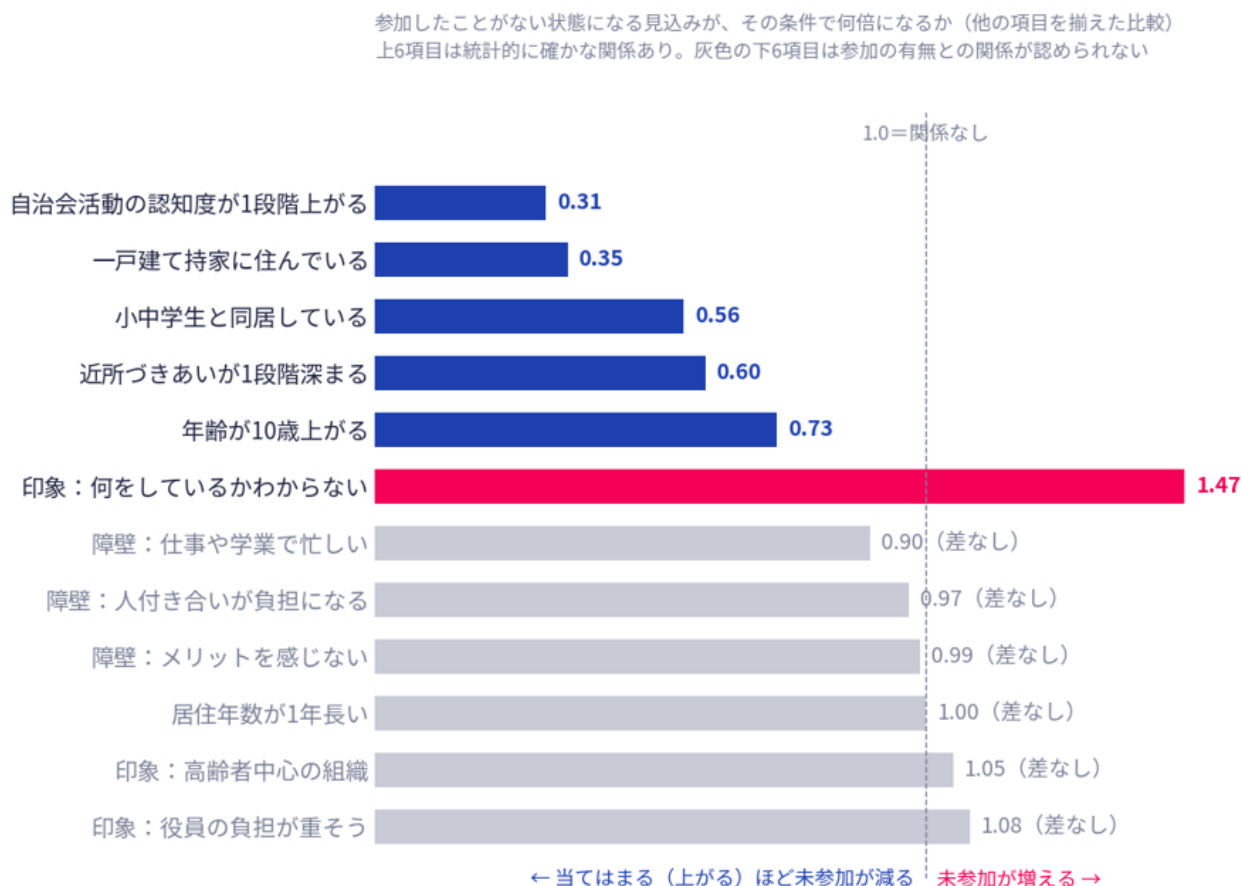
図4-1 年代別の参加経験・認知度・役員経験



4.2 若い世代の参加と最も強く結びつくのは、年齢ではなく活動の認知

参加したことがある人となない人を分けているのは何かを、年齢・住まい・居住年数・こどもの同居・近所づきあい・自治会活動の認知度・自治会への印象・参加を妨げる要因の12項目を同時に考慮して調べた（方法は資料編A-6）。図4-2の「結びつきの強さ」は、他の項目を揃えたうえで、その項目が1段階変わると「参加したことがない」状態の起こりやすさが何倍になるかを示す。1.0なら関係なし、0.5なら半分である。

図 4-2 参加したことがない人を分けている要素（結びつきの強さ）



n=2518。12項目を同時に考慮したロジスティック回帰のオッズ比。上6項目は有意水準5%で有意、灰色の6項目は参加の有無との関係が認められなかった（資料編A-6、表A-1）。

最も強く結びつくのは活動の認知度（0.31）で、一戸建て持家（0.35）、小中学生との同居（0.56）、近所づきあい（0.60）、年齢（0.73）がこれに続く。「役員の負担が重そう」「高齢者中心の組織」といった印象や、「忙しい」「メリットを感じない」といった理由は、参加の有無と結びついていない。印象のうち「何をしているかわからない」だけは、そう答えた人ほど参加したことがない状態になりやすく（1.47）、活動の認知度と同じ方向を指している。年齢だけで見れば10歳上がるごとに未参加の起こりやすさは約半分（0.50）になるが、認知度などを揃えると0.73まで縮む（資料編A-6、表A-2）。若い世代の参加が少ないことの半分近くは、年齢ではなく活動を知らないことと結びついている。

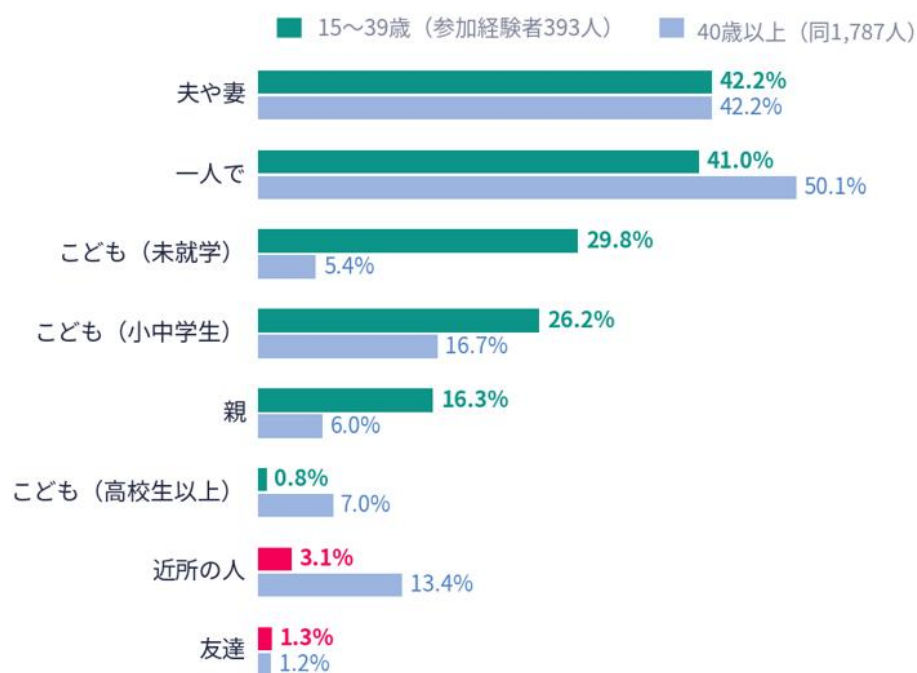
これは統計上の結びつきであり、知らないから参加していないのか、参加していないから知らないままなのかは、一時点の調査では断定できない。第9章の「参加できると答えたのに活動を知らない」116人の存在と、第11章1節の未加入者の記述は前者を支持する。

4.3 若い世代の参加は家族と一緒にか一人。近所の人と参加するのは40歳以上

自治会活動に参加したことがある15～39歳と一緒に参加した相手は、配偶者42.2%、未就学のこども29.8%、小中学生のこども26.2%、親16.3%である。「一人で」は41.0%（161人）で、40歳以上の50.1%より低い。配偶者と並ぶ規模である。一人で参加した161人のうち130人は家族の誰とも一緒に参加しておらず、ライフステージでは子育て世帯（未就学児）74人、子育て世帯（小中学生）21人、夫婦のみ17人が多い。

一方、40歳以上では「近所の人」が13.4%であるのに対し、15～39歳では近所の人3.1%、友達1.3%にとどまる。若い世代の参加は、家族と一緒にか、世帯の代表として一人で出るかのどちらかであり、近所の人や友人と一緒に参加する機会がほとんどない（図4-3）。

図4-3 一緒に参加した相手 — 15～39歳と40歳以上【設問13】



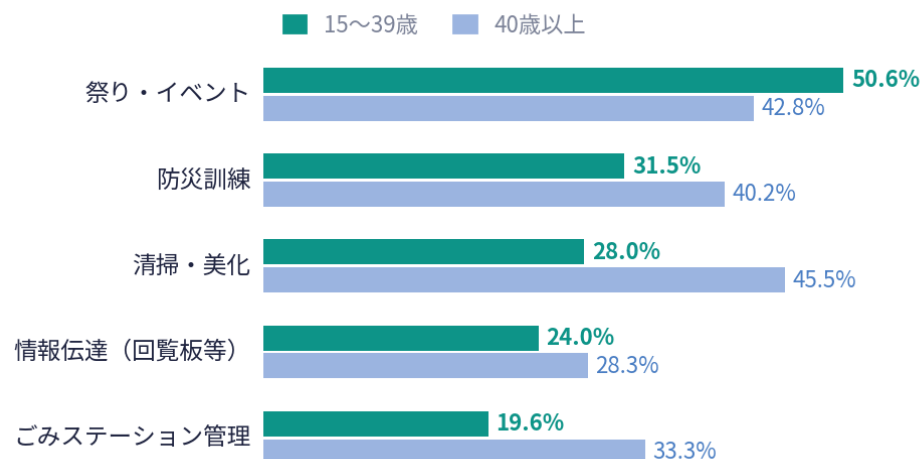
参加経験者、複数回答。赤は家族以外と一緒に参加した人。

第5章 活動分野で見る

5.1 祭り・イベントは若い世代の方が続けたい人が多い

参加経験者について、経験した活動【設問 11】と今後やりたい活動【設問 21】を同一人物で突き合わせ、その活動を経験した人のうち同じ活動を今後もやりたいと答えた人の割合を「継続率」とした（図 5-1。概要図 6 と同じ）。

図 5-1 経験した活動を今後も続けたい人の割合（継続率）



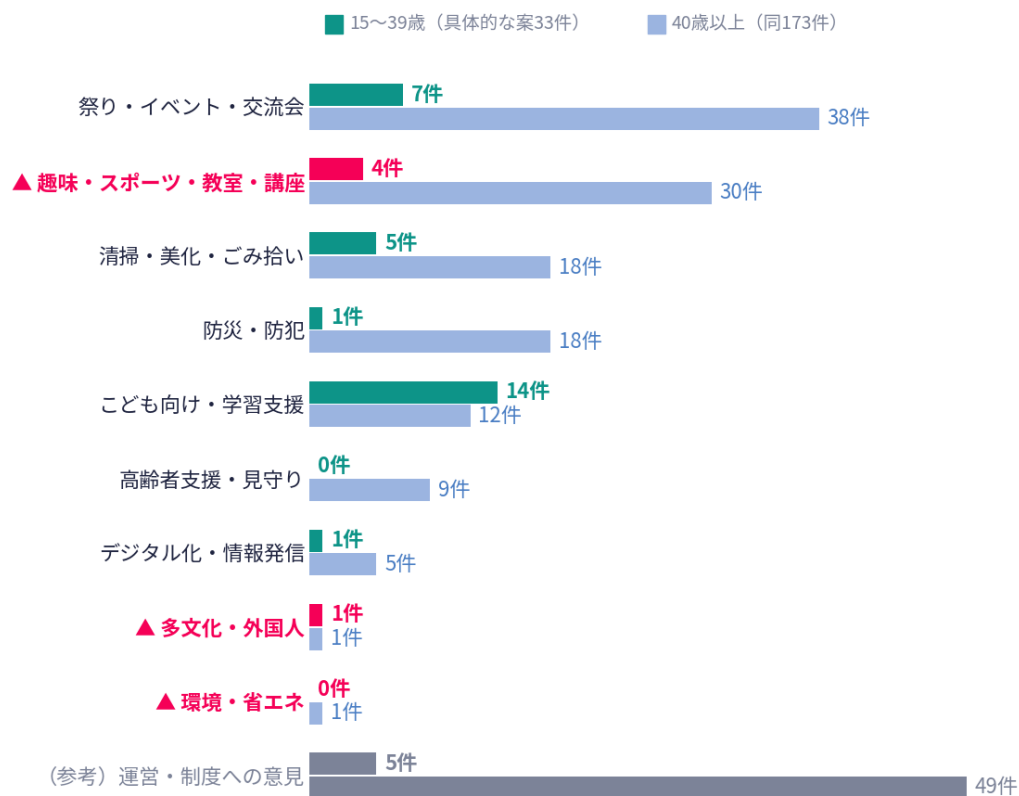
その活動を経験した人のうち、同じ活動を今後もやりたいと答えた人の割合。祭り・イベントのみ 15～39 歳で 40 歳以上を上回る。概要図 6 と同じ。

15～39 歳の継続率は防災訓練 31.5%、清掃・美化 28.0%、情報伝達（回覧板等）24.0%、ごみステーション管理 19.6%と、維持管理系の活動は 2～3 割にとどまり、いずれも 40 歳以上を下回る。祭り・イベントは 50.6%で最も高く、40 歳以上（42.8%）を上回る唯一の活動である（資料編 A-12）。

5.2 学びと楽しみに関わる案が、選択肢の外から出ている

設問 27 では、参加してみたい活動の案を自由に記述してもらった。300 件の記述があり、うち「特にない」「思いつかない」等が 68 件、参加そのものを拒む記述が 26 件、具体的な案が書かれていたものが 206 件である（第 9 章 3 節・表 9-1）。具体的な案を 1 件ずつ読んで活動分野に分類した結果を図 5-2 に示す。

図 5-2 参加したい活動の案の内容【設問 27】（手作業分類）



最も多いのは祭り・イベント・交流会の 45 件で、趣味・スポーツ・教室・講座 34 件、こども向け・学習支援 26 件、清掃・美化 23 件、防災・防犯 19 件が続く。40 歳以上（具体的な案 173 件）では祭り 38 件がこども向け 12 件の 3 倍だが、15～39 歳（同 33 件）ではこども向け 14 件が祭り 7 件を上回る。設問 21 でも 40 歳以上は祭り 32.6% 対子育て関連 13.9%、15～39 歳は 36.2% 対 32.6% で、若い世代ほど子育て関連が祭りに近づくという点で、選択式と自由記述は同じ方向を示す。

一方で、自由記述にしか現れない内容がある。趣味・スポーツ・教室・講座 34 件、多文化・外国人 2 件、環境・省エネ 1 件の計 37 件は、設問 21 の 13 の選択肢に対応するものがない。趣味・スポーツ・教室・講座には、スポーツイベントや日帰り旅行のように祭り・イベント・交流会に近い案もあるが、料理教室、健康体操、救命救急講座、スマホ講習、地域の歴史を学ぶ会といった「学ぶ」形の案が大半を占める。外国人との交流も、形式は交流会だが対象が現行の選択肢にない。第 5 章 1 節の継続率は設問 21 の選択肢の範囲で算出したものであり、この範囲の外にも若い世代の関心があり得る。

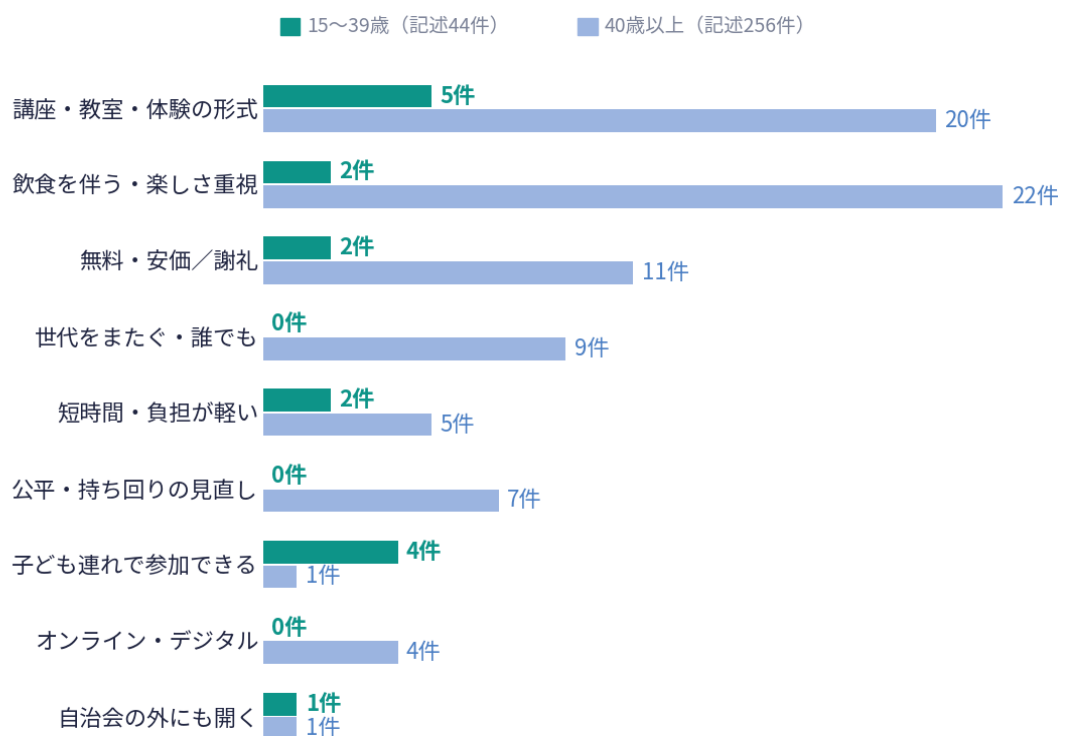
なお、活動の案を問う設問に対し、会費の集め方や役員の持ち回り、行事の廃止など、運営や

制度に関する記述が 54 件あった。具体的な案 206 件の 4 分の 1 にあたり、活動の内容より先に運営のあり方について意見を持つ回答者が多いことを示している。

5.3 何をやるかだけでなく、どうやるかが書かれている

どうやるかが書かれた記述は 300 件中 79 件（15～39 歳 14 件）で、件数は多くないが具体的である（図 5-3）。最も多いのは講座・教室・体験の形式（25 件、うち 15～39 歳 5 件）と、飲食や楽しさを伴う形式（24 件、同 2 件）で、前者は救命救急講座やスマホ講習のように、分類上は防災やデジタル化に入るが「講座に出る」形が想定されている。こども連れへの言及は 5 件と少ないが、うち 4 件は 15～39 歳からで、第 9 章 1 節の A 層の条件（こども連れで参加できる 58%）と一致する。

図 5-3 やり方・条件への言及【設問 27】



1 件の記述が複数に該当する場合がある。15～39 歳は設問 27 の記述 44 件、40 歳以上は 256 件。

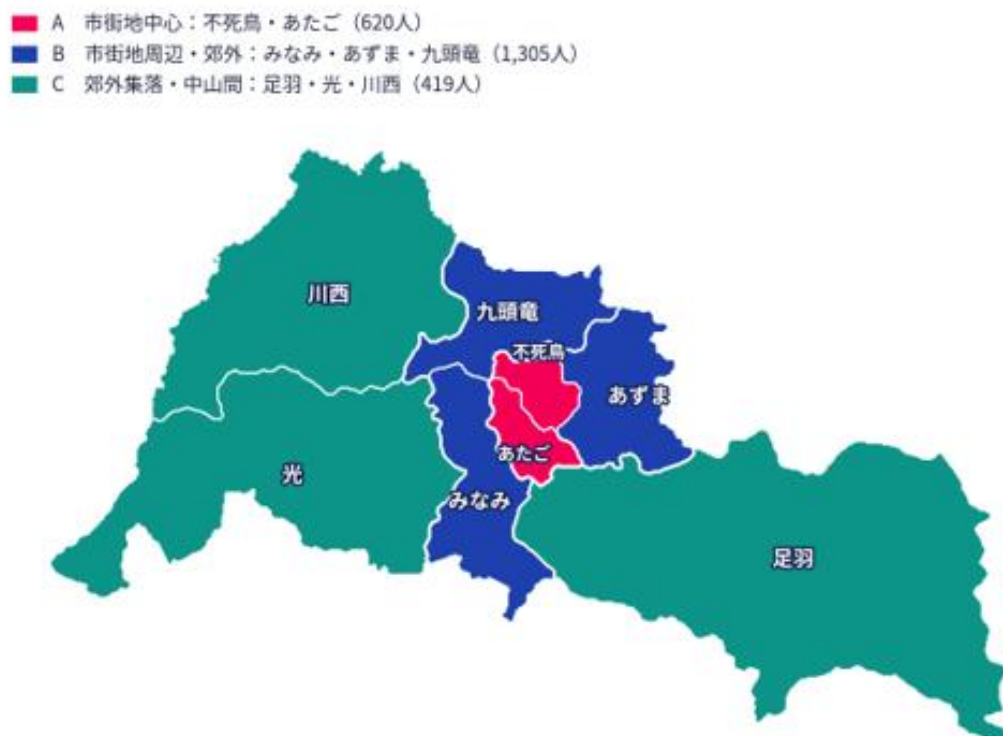
こども連れで参加できることを案内文に書いてほしいという記述や、地区外の友人も誘って参加したいという記述があり、これらは活動の追加というより、案内のしかたと参加の単位への要望である。

第6章 地域で見る

6.1 地域を3類型に分けて比べる

8つの公民館ブロックを、都市計画マスタープランの地域別構想に照らして3類型に集約した（図6-1、資料編A-9）。市街地中心型（不死鳥・あたご、620人）、市街地周辺・郊外型（みなみ・あずま・九頭竜、1,305人）、郊外集落・中山間型（足羽・光・川西、419人）である。

図6-1 地域の3類型（公民館ブロック）

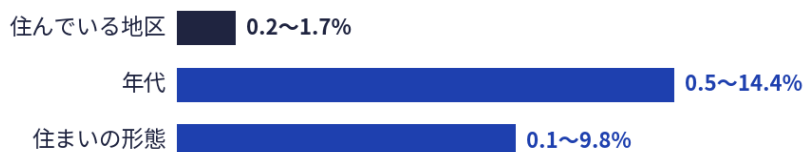


6.2 地域で違うのは考え方ではなく、抱えている課題の重さ

地域ごとに取組を分ける必要があるかを確かめるため、参加経験や認知度など主要14の指標について、回答のばらつきが住んでいる地区でどれだけ説明できるかを調べた（資料編A-8）。地区で説明できるのはいずれの指標でも2%以下で、年代（最大14%）や住まい（最大10%）より小さい（図6-2）。自治会に対する印象も参加を妨げる理由も3類型でほぼ同じ順に並び、住民の考え方が地区で大きく違うわけではない。地域ごとに別の取組を用意する根拠は、本調査からは見当たらない。

図 6-2 要因ごとの説明力

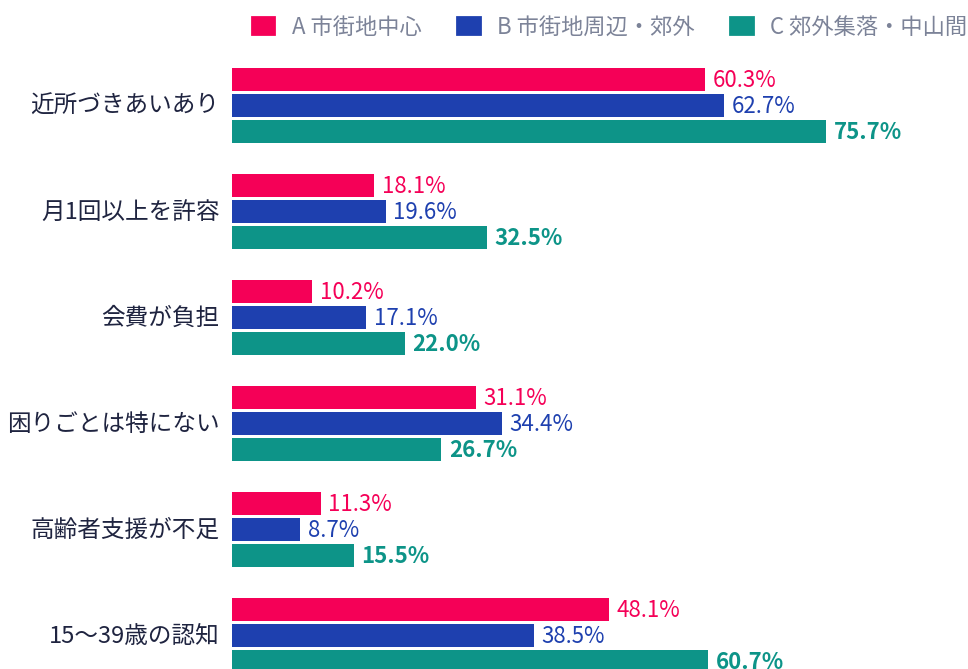
回答のばらつきのうち、その要因で説明できる割合（主要14指標での最小～最大）



個人差のうちその要因で説明できる割合を主要 14 指標で求めた範囲（算出方法は資料編 A-8）。

一方、抱えている課題の重さは 3 類型で異なる（図 6-3）。郊外集落・中山間は、近所づきあいのある人が 75.7%、月 1 回以上参加できると答えた人が 32.5%と最も多い一方で、会費を負担と感じる人が 22.0%と市街地中心の 2 倍にのぼり、高齢者支援の不足を挙げる人も最も多い。市街地中心は、会費や高齢者支援のように突出した課題がなく、困りごとが「特にない」人も 31.1%いる。市街地周辺・郊外は、回答が最も多い地域でありながら、15～39 歳で活動を知っている人が 38.5%と最も低い。

図 6-3 地域類型別の主要指標



したがって、若い世代の参加に関する取組はまず市内共通のものとして考えてよく、地域によって変わるのは、共通の取組のうち何を優先するかである。市街地周辺・郊外では若い世代に活動を知ってもらうことが課題に当たる。中山間は事情が異なり、若い世代の数そのものが少ない。福井市住民基本台帳（2026 年 8 月 1 日現在）では、中山間 3 ブロックの 15 歳以上に占める 15～39 歳の割合は 20.5%と市全体（26.6%）を下回り、65 歳以上が人口の 40.5%を占める（表

6-1)。

一方、中山間にいる若い世代（回答者 89 人）は活動を知っている割合 61%、月 1 回以上参加できると答えた割合 17%と、3 類型で最も自治会とつながりがある（市街地中心 48%・7%、市街地周辺 39%・10%）。中山間の課題は案内の届き方ではなく、若い世代の数そのものと、いる人の負担であり、示唆 1（転入者の案内）と示唆 7（依頼業務の見直し）が主に関わる。

表 6-1 地域類型別の人口構成（2026 年 8 月 1 日現在、日本人）

類型	15 歳以上人口	15～39 歳	15～39 歳の割合	65 歳以上の割合 (全人口比)	15～39 歳の回答者
A 市街地中心	68,957	17,751	25.7%	32.4%	129 人
B 市街地周辺・郊外	113,285	32,769	28.9%	27.7%	301 人
C 郊外集落・中山間	33,617	6,888	20.5%	40.5%	89 人
市全体	215,859	57,408	26.6%	31.1%	519 人

住民基本台帳（福井市年齢別人口統計表、2026 年 8 月 1 日現在）から、公民館ブロックの地区構成（表 A-3）に従って集計。回答者は本調査の 15～39 歳（ブロック不明を除く）。

中山間の会費の負担や高齢者支援の不足は、本調査で課題の所在が確認されたが、若い世代の参加とは別の論点（自治会の財政、高齢者福祉）を含むため、本書の示唆とは切り分けて別途の検討を要する。

第3部 若い世代を分けて見る

本部では、15～39 歳 567 人を二つの軸で分けて見る。二つを用意するのは、一方から他方が読み取れないためである（表 7-1）。

表 7-1 本部で用いる二つの軸

	ライフステージ	自治会との関わり方（7 層）
表すもの	就業状況と世帯構成	参加経験と、参加できると答えた頻度
外から分かるか	分かる（年齢・世帯構成）	分からない（尋ねないと出ない）
決まるもの	何を、どんな形で頼めるか。案内をどの経路で届けるか	どれくらいの頻度なら引き受けてもらえるか
本書での扱い	第 7 章・第 8 章	第 9 章

一つはライフステージ（就業状況と世帯構成）である。自治会活動に参加したことがある人の割合は、一人暮らしの 34%から子育て世帯（小中学生）の 86%まで、ライフステージによって大きく異なる。何を頼めるか、どんな形なら参加できるか、案内をどう届けるかは、この軸で決まる（第 7 章・第 8 章）。もう一つは自治会との関わり方（参加経験の有無と、参加できると答えた頻度で分けた 7 層）である。どれくらいの頻度なら引き受けてもらえるかは、ライフステージからは分からない。どのライフステージにも、月 1 回以上参加できる人から参加は難しい人までが揃っているからである（資料編 A-8）。この軸は本人に尋ねなければ分からず、自治会も外から判断できない。働きかける相手を選び出すための分類ではなく、「どれくらいの頻度なら参加できる人が、どれだけいるか」を示す分布として読む（第 9 章）。第 10 章では二つを重ねる。

第7章 ライフステージ別に見る

第 6 章までは、15～39 歳を一つの塊として 40 歳以上と比較してきた。しかしこの 567 人には、高校生から子育て世帯まで、生活の異なる人が含まれる。全体の平均値からは、誰に何を届けなければよいかが決まらない。本章から第 10 章までは、同じ回答データを二つの軸で切り直す。第 11 章では、この二つの軸では取り出せない層を、加入状況・住まい・役員経験で切って扱う。

本章は、二つの軸のうちライフステージを扱う。就業状況と世帯構成から 6 つに分けた。生活時間と地域との接し方が、ここで大きく変わる。何を、どんな形で頼めるか、そして案内をどう届けるかは、この軸で決まる。

7.1 ライフステージの分け方と人数

表 7-2 ライフステージの分け方

ライフステージ	定義	人数	構成比	年齢中央値
学生	高校生・高専生、大学生・専門学校生等	33 人	6%	18 歳
一人暮らし	学生を除く、世帯人数 1 人	29 人	5%	33 歳
親と同居	親と同居、配偶者・こどもなし	56 人	10%	30 歳
夫婦のみ	配偶者と同居、こどもなし	68 人	12%	34 歳
子育て世帯（未就学児）	未就学のこどもと同居	283 人	51%	35 歳
子育て世帯（小中学生）	小中学生と同居（未就学児なし）	88 人	16%	37.5 歳

15～39 歳 567 人のうち、上記に当てはまらない 10 人（こどもが高校生以上、世帯構成が不明等）は分析から除いた。表の構成比は 6 区分に該当する 557 人に対する割合であり、本文の「15～39 歳の 50%」（283 人）は 567 人に対する割合である。

分け方の基準は世帯構成であり、住まいではない。一人暮らしは賃貸・集合住宅が 59%、親と同居は一戸建て持家が 86%と住まいは関連するが、分け方の条件ではない（住まいの軸は第 11 章 2 節）。

子育て世帯（未就学児）が 283 人（51%）を占め、学生と一人暮らしは合わせて 62 人（11%）にとどまる。回答者の半数を子育て世帯が占めるため、若い世代の姿は子育て世帯の姿として見えやすく、それ以外のライフステージは数が小さいために見えにくくなっている点に注意が必要。人数の少ないライフステージは、比率 50%付近の 95%信頼区間が学生±17 ポイント、一人暮らし±18 ポイント、親と同居・夫婦のみ±12～13 ポイントと広い。これらは順位や大小の傾向として読み、小さな差は論じない。子育て世帯（未就学児）は±6 ポイントで、他章の数値と同等の精度がある。

7.2 自治会とのつながりの多さは、ライフステージでほぼ決まる

自治会への加入、参加経験、活動の認知、近所づきあいのいずれも、子育て世帯で高く、一人暮らしで低い（図 7-1。同図の右 2 列は 7.3 で扱う）。一人暮らしは加入 55%、認知 14%、近所づきあい 14%と、6 つの中で最も自治会とのつながりが少ない。学生は加入 82%・参加経験 67%と数字の上ではつながりがあるが、これは世帯としての加入であり、参加も親に連れられてのものである。

図 7-1 ライフステージ別の、自治会とのつながりと参加できる頻度

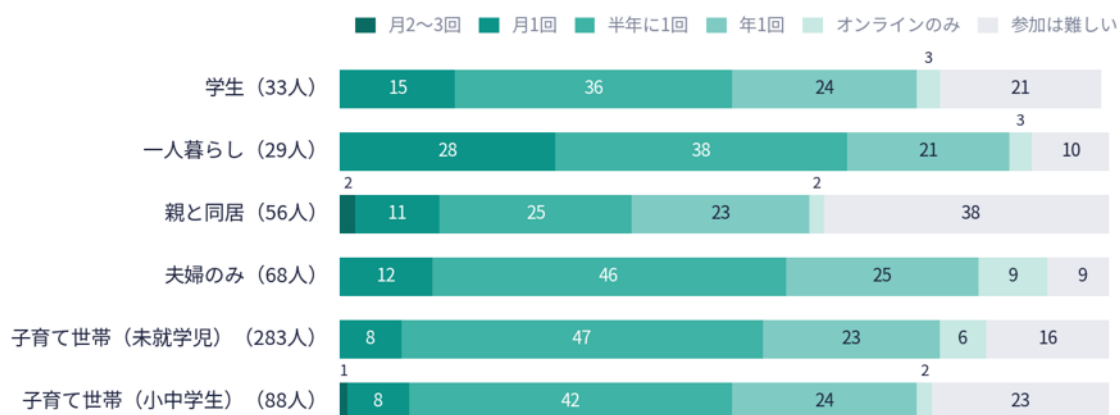
各ライフステージ内の割合。色が濃いほど高い（列ごとではなく図全体で共通）

	自治会に 加入	参加経験 あり	活動を知っている	近所づきあい あり	月1回以上 を許容	参加は 難しい
学生（33人）	82%	67%	36%	48%	15%	21%
一人暮らし（29人）	55%	34%	14%	14%	28%	10%
親と同居（56人）	82%	41%	36%	34%	12%	38%
夫婦のみ（68人）	91%	62%	37%	32%	12%	9%
子育て世帯（未就学児）（283人）	97%	75%	49%	55%	8%	16%
子育て世帯（小中学生）（88人）	97%	86%	55%	55%	9%	23%

7.3 最も頻繁に参加できると答えたのは、つながりの少ない一人暮らし

個人として見れば、活動を知っている人や近所づきあいのある人ほど、月1回以上参加できると答える割合は高い（15～39歳で13.8%対8.6%、14.0%対8.1%）。しかしライフステージで見ると、つながりの多い層ほど月1回以上参加できると答えた割合は低い。自治会とのつながりが最も少ない一人暮らしは28%（95%信頼区間15～46%、資料編A-12）と6つの中で最も高く、「参加は難しい」は10%と、夫婦のみ（9%）に次いで低い。逆に、つながりが最も多い子育て世帯（未就学児）は8%にとどまる。「参加は難しい」が最も高いのは親と同居の38%である。つながりの多い層ほど時間の制約が強いため、ライフステージ単位ではつながりと頻度は逆の傾向になる。

図 7-2 ライフステージ別 参加できると答えた頻度



7.4 何があれば参加できるかは、ライフステージによって違う

「短時間で終わる」はどのライフステージでも 52~69%で共通する。分かれるのはその先である。こども連れで参加できることを参加条件に挙げるのは子育て世帯（未就学児）59%に対し、学生 6%・一人暮らし 10%。友人と参加できることを挙げるのは学生 48%で、子育て世帯では 6%にとどまる。単発で参加できることは学生 45%・一人暮らし 48%と、自治会とのつながりが少ないライフステージほど高い。

図 7-3 ライフステージ別 参加しやすくなる条件

参加しやすくなる条件（設問22、複数回答）。各ライフステージ内の割合

	短時間で終わる	単発で参加できる	こども連れで参加できる	友人と参加できる	謝礼・ポイント	内容が事前に分かる	SNSで情報がえられる	オンライン参加できる
学生 (33人)	52%	45%	6%	48%	42%	27%	21%	15%
一人暮らし (29人)	69%	48%	10%	17%	28%	38%	21%	14%
親と同居 (56人)	59%	43%	7%	12%	45%	38%	21%	12%
夫婦のみ (68人)	69%	37%	13%	6%	31%	50%	38%	24%
子育て世帯 (未就学児) (283人)	66%	29%	59%	7%	34%	33%	28%	17%
子育て世帯 (小中学生) (88人)	65%	23%	41%	6%	36%	32%	24%	18%

7.5 やってみたい活動と、情報の受け取り方もライフステージで違う

やってみたい活動では、祭り・イベントがどのライフステージでも上位に入る。子育て関連は

子育て世帯（未就学児）47%と突出する一方、学生 24%・一人暮らし 10%にとどまる。学生向けイベントは学生 33%、社会人向けイベントは親と同居 25%・一人暮らし 17%と、それぞれのライフステージでのみ高く出る。

図 7-4 ライフステージ別 今後参加してみたい活動

今後参加してみたい活動（設問21、複数回答）。各ライフステージ内の割合

	祭り・イベント	子育て関連	清掃・美化	防災	情報伝達（回覧板等）	見守り	学生向けイベント	社会人向けイベント	デジタル関連
学生（33人）	52%	24%	27%	24%	6%	9%	33%	6%	12%
一人暮らし（29人）	31%	10%	24%	31%	14%	3%	3%	17%	3%
親と同居（56人）	29%	9%	12%	14%	16%	2%	7%	25%	16%
夫婦のみ（68人）	28%	16%	26%	24%	22%	9%	4%	7%	13%
子育て世帯（未就学児）（283人）	39%	47%	22%	17%	16%	13%	3%	6%	5%
子育て世帯（小中学生）（88人）	31%	26%	16%	10%	10%	16%	3%	7%	5%

情報の受け取り方も分かれる。電子回覧板を挙げる割合は夫婦のみ 75%・子育て世帯（未就学児）63%に対し、学生 21%。世帯単位で配信される電子回覧板は、家族ユーザーとして世帯主以外も登録できるものの、学生にはまだ届きにくい。学生では Instagram42%が LINE に次ぎ、紙の回覧板 18%を大きく上回る。

図 7-5 ライフステージ別 見たい情報発信の手段

見たい情報発信の手段（設問23、複数回答）。各ライフステージ内の割合

	回覧板（電子）	LINE	Instagram	回覧板（紙）	X	YouTube	メール
学生（33人）	21%	61%	42%	18%	21%	15%	3%
一人暮らし（29人）	59%	48%	34%	17%	21%	7%	10%
親と同居（56人）	46%	41%	30%	25%	14%	12%	7%
夫婦のみ（68人）	75%	57%	37%	18%	10%	12%	6%
子育て世帯（未就学児）（283人）	63%	62%	36%	17%	7%	4%	7%
子育て世帯（小中学生）（88人）	60%	65%	35%	18%	9%	9%	9%

第8章 ライフステージ別の代表的な6人

各ライフステージの中央値・最頻値から、代表的な人物像を組み立てた。年齢はライフステージごとの中央値、職業・住まい・世帯は最頻値である。実在の回答者ではなく、性別は尋ねていないため記載しない。学生 33 人、一人暮らし 29 人、親と同居 56 人、夫婦のみ 68 人は少数であり、比率 50% 付近の 95% 信頼区間は ±12～18 ポイントに及ぶ。各節の数値は順位や大小の傾向として読む（第7章1節）。

8.1 学生（33人）

表 8-1 学生の属性と、自治会との関わり

年代	属性	自治会加入	活動を知っている	技能あり	月1回以上／参加難しい
10代後半	高校生・大学生／実家の一戸建て／ 世帯4人／市内在住17年	82%	36%	67%	15%／21%

n=33 年齢中央値18歳／情報の受け取り方：LINE 61%／Instagram 42%／X 21%／回覧板（電子）21%

いまの状態

世帯としては自治会に加入しているが、本人は活動をよく知らない。参加経験のある22人が一緒に行ったのは親である（86%）。友達と参加した人は9%（2人）にとどまる。

印象では「地域に必要な組織」48%と「役員の負担が重そう」42%が拮抗しており、6つの中で唯一、肯定が否定を上回るライフステージである。やってみたい活動は祭り・イベント52%に次いで学生向けイベント33%（15～39歳全体では5.8%）で、地域行事そのものより同世代と関われる場に関心がある。この年代に何を経験するかが、その後の関わり方を左右する可能性がある層である。

求めているもの

求めているのは、地域行事そのものよりも同世代と関われる場である。写真撮影24%、SNS運用21%、動画編集21%と技能を持つ人がおり、能力を活かせる役割を提供できるかが重要である。

頼むときに満たす必要がある条件

やりたい活動は祭り・イベント52%が最も多く、参加条件は「友人と一緒に参加できる」

48%、「単発で参加できる」45%、「その場で分かる見返り（謝礼・ポイント）」42%である。同年代と参加でき、タイパ重視で、その場で返るものがある形でなければ届かない。案内の経路については、電子回覧板を挙げたのは21%にとどまり（第7章5節）、電子回覧板の更なる普及に加えて、学校やSNSなど世帯を経由しない経路が必要である。

8.2 一人暮らし（29人）

表 8-2 一人暮らしの属性と、自治会との関わり

年代	属性	自治会加入	活動を知っている	技能あり	月1回以上／参加難しい
30代前半	会社員・公務員／賃貸マンション・アパート（59%）／单身／市内在住	55%	14%	28%	28%／10%
15年					

n=29 年齢中央値 33 歳／情報の受け取り方：回覧板（電子） 59%／LINE 48%／Instagram 34%

いまの状態

加入 55%、活動の認知 14%、近所づきあい 14%と、つながりは6つの中で最も少ない。それでいて月1回以上なら参加できると答えた割合は28%で最も高く、「参加は難しい」は10%と、夫婦のみ（9%）に次いで低い。

賃貸・集合住宅が59%を占め、その多くは自治会に加入していない（加入24%）。加入世帯なら日常的にある回覧板やごみ当番といった接点がないため、自治会からの案内は本人に届かない。困りごとでは「一人暮らしで孤立感がある」31%が突出する（15～39歳全体1.9%）。つながりそのものは求めているが、負担の重い関係を避けている層である。

ただしこの29人は、住まいの違う二つの集団が含まれる。賃貸マンション・アパートに住む17人は加入24%・認知18%と地域の外にいる状態にあるのに対し、一戸建て持家の12人は加入100%で、持家があって一人で暮らしている人たちである。一人暮らし全体の数字はこの二つを合わせた平均なので、読むときは賃貸の17人と持家の12人を分けて考える必要がある。

求めているもの

やりたい活動として最も多いのは祭り・イベントと防災（各9人）で、交流そのものを避けているわけではない。ただし人付き合いそのものを負担とする人が69%おり、関わりの深さを自分で決められることを求めている。

頼むときに満たす必要がある条件

条件は「短時間で終わる」69%、「単発で参加できる」48%で、関わりの深さと時間を自分で決められる形であることが必要である。案内の経路については、この29人のうち賃貸・集合住宅に住む17人には回覧板は届いておらず、住まいを通じた別の経路が必要である。残る12人は一戸建て持家で加入100%であり、同じ経路では扱えない。

留意点

29人と少数であり、住まいで性格が分かれる。施策の働きかけ先としては、住まいで分けた賃貸・集合住宅の若い世代94人（第11章2節）のほうが規模も経路も具体的である。

8.3 親と同居（56人）

表 8-3 親と同居の属性と、自治会との関わり

年代	属性	自治会加入	活動を知っている	技能あり	月1回以上／参加難しい
20代後半～ 30代前半	会社員／実家の一戸建て持家／世帯3人／市内在住25年以上	82%	36%	39%	12%／38%

n=56 年齢中央値30歳／情報の受け取り方：回覧板（電子）46%／LINE 41%／Instagram 30%

いまの状態

世帯の加入率は82%だが、本人の参加経験は41%、「参加は難しい」は38%で6つの中で最も高い。親が自治会活動を担っており、本人に案内は届かず、参加も少ない。

親と同居と、一人暮らしの違いは住まいの形ではなく、本人が世帯の窓口（回覧板や案内を受け取る立場）かどうかにある。市内に20年以上住んでいる人だけを取り出して比べる（親と同居49人、一人暮らし12人。人数が少ないので傾向として読む）と、自治会の加入率はどちらも82～83%で同じである。ところがこの二つの集団で「参加は難しい」と答えた割合は、親と同居39%に対し一人暮らし8%と親と同居の方が高く、「月1回以上参加できる」と答えた割合は、親と同居10%に対し一人暮らし25%と一人暮らしの方が高い。加入率は同じでも、活動参加への姿勢は一人暮らしの方が前向きである。

印象では「高齢者中心の組織」50%が高く、親が担っている負担を間近で見ている層でもある。

求めているもの

同世代と会える場（社会人向けイベント 25%）や技能を活かす場（デジタル関連 16%）に、他のライフステージより関心がある。

頼むときに満たす必要がある条件

求めているものは同世代と会える場と技能を活かす場だが、その前に本人に宛てた案内の経路がない。世帯は加入していても本人の認知は 36%、「参加は難しい」は 38%で 6 つの中で最も高い。電子回覧板を挙げた割合は 46%あり、家族ユーザーとして登録することが条件になる。

8.4 夫婦のみ（68 人）

表 8-4 夫婦のみの属性と、自治会との関わり

年代	属性	自治会加入	活動を知っている	技能あり	月 1 回以上／参加難しい
30 代前半～ 半ば	会社員／一戸建て持家（76%）／世帯 2 人／市内在住 12 年	91%	37%	51%	12%／9%

n=68 年齢中央値 34 歳／情報の受け取り方：回覧板（電子） 75%／LINE 57%／Instagram 37%

いまの状態

加入 91%、参加経験 62%とつながりはあるのに、「役員の負担が重そう」78%は 6 つの中で最も高く、「メリットを感じない」も 41%。転入 5 年未満が 22%と流動的である。

本プロジェクト検討の過程で出された「こどもがいない世帯はメリットを感じにくい」という意見と重なる層である。

求めているもの

行事の多くがこども向けで、参加する理由が見つからない。やりたい活動は祭り 28%、清掃 26%、防災 24%と分散する。電子回覧板を見たい人が 75%と最多。

頼むときに満たす必要がある条件

やりたい活動は祭り 28%、清掃 26%、防災 24%と分散し、突出したものがない。「役員の負担が重そう」78%は 6 つの中で最も高く、「メリットを感じない」も 41%である。こどもを介さずに参加する理由が要るという点が、この層に固有の条件である。案内の経路については、電子回覧板を挙げた割合が 75%と 6 つの中で最も高い。

8.5 子育て世帯（未就学児）（283 人）

表 8-5 子育て世帯（未就学児）の属性と、自治会との関わり

年代	属性	自治会加入	活動を知っている	技能あり	月 1 回以上／参加難しい
30 代半ば	会社員／一戸建て持家（88％）／世帯 4 人／市内在住 15 年	97%	49%	41%	8％／16%

n=283 年齢中央値 35 歳／情報の受け取り方：回覧板（電子） 63％／LINE 62％／Instagram 36%

いまの状態

15～39 歳の 50％を占め、6 つのライフステージの中では最大である。加入 97％、参加 75％、認知 49％と、地域と最もつながっている。

一緒に参加した相手は未就学のこども 53％、配偶者 50％（参加経験者 213 人）で、家族単位の参加という構図が最もはっきり出る。障壁は「仕事や学業で忙しい」75％が最も高い。

求めているもの

やりたい活動は子育て関連 47％が突出する。参加を妨げているのは「仕事や学業で忙しい」75％と「育児で時間がない」70％であり、条件として「短時間で終わる」66％、「こども連れで参加できる」59％を挙げる。

頼むときに満たす必要がある条件

条件は「短時間で終わる」66％、「こども連れで参加できる」59％である。月 1 回以上なら参加できると答えた人は 8％にとどまり、月に何度も出してもらう前提の役割は成り立たない。子連れで、短時間で完結する形であることが条件になる。

8.6 子育て世帯（小中学生）（88 人）

表 8-6 子育て世帯（小中学生）の属性と、自治会との関わり

年代	属性	自治会加入	活動を知っている	技能あり	月 1 回以上／参加難しい
30 代後半	会社員・パート／一戸建て持家（85％）／世帯 4 人／市内在住 25 年以上	97%	55%	36%	9％／23%

n=88 年齢中央値 37.5 歳／情報の受け取り方：LINE 65％／回覧板（電子） 60％／Instagram 35%

いまの状態

参加経験 86%、認知 55%と、実際に役を担った経験を持つ。それでいて「メリットを感じない」59%、「古い慣習が多そう」64%と評価は厳しい。

自由記述に見られる「こどもが小学校を卒業すると地域とのつながりが切れる」という指摘は、このライフステージの先にある姿を示している。

求めているもの

やりたい活動は平均 1.5 件で、子育て世帯（未就学児）の 2.0 件を下回り、挙げられる活動も分散している。求めるものがはっきりしないまま、参加の意向だけが下がっている状態である。役を一巡した層が多く含まれることが背景にあると考えられるが、本調査では確かめられない。

頼むときに満たす必要がある条件

参加経験 86%・認知 55%と 6 つの中で最も関わっているが、「メリットを感じない」59%、「古い慣習が多そう」64%と評価は厳しく、「参加は難しい」は 23%に上がる。回数を重ねて頼むのではなく、一回ごとに完結する形で頼むことが条件になる。

第9章 自治会との関わり方で7層に分ける

本章は、もう一方の軸である自治会との関わり方を扱う。参加経験と、参加できると答えた頻度で15～39歳を7つに分けた。どれくらいの頻度なら引き受けてもらえるかは、この軸で決まる。ライフステージからは読み取れないため、別に分ける必要がある（第3部冒頭）。7層の規模は概要図9に示したとおりである。

9.1 7層の全体像 — 既に参加している393人と、参加できると答えた116人

図9-1 7層のプロファイル

各層の中の割合。色が濃いほど高い。「本音を書いた」は設問28に記述した人の割合

		自治会に 加入	活動を近所づきあ 知っている	いあ あり	活かせる 技能あり	やりたい 活動あり	短時間で 終わる	単発で 参加できる	本音を 書いた
参加あり	A層 参加あり・月1回以上（48人）	96%	71%	69%	69%	96%	54%	40%	38%
	B層 参加あり・半年～年1回（284人）	99%	62%	57%	40%	86%	70%	33%	48%
	C層 参加あり・今は難しい（61人）	93%	34%	39%	34%	64%	51%	11%	57%
未参加	D層 未参加・月1回以上も可（14人）	36%	7%	36%	57%	100%	50%	71%	14%
	E層 未参加・年1回～半年（87人）	75%	17%	36%	48%	92%	64%	44%	25%
	F層 未参加・オンラインのみ（15人）	80%	0%	27%	53%	80%	73%	33%	40%
	G層 未参加・参加は難しい（58人）	90%	10%	19%	21%	62%	55%	19%	50%

参加経験のあるA～C層は、参加できると答えた頻度だけが異なる。

A層48人は月1回以上参加している層で、技能69%、一人あたりが設問21で選んだやりたい活動は平均3.6件と最も前向きだが、条件に「こども連れで参加できる」58%、「活動内容が事前に分かる」56%を挙げる。前者はA層の46%を子育て世帯（未就学児）が占めることによるもので、後者は何をどれだけやるのかが事前に分かることを求めている。

B層284人は15～39歳の50%を占める最大の層で、参加はしているが頻度は半年～年1回にとどまり、技能40%・やりたい活動平均1.9件とA層とC層の中間にある。58%は子育て世帯（未就学児）である。参加しやすくなる条件は「短時間で終わる」70%が最も高く、「単発で参加できる」は33%にとどまる。この層が参加を続けるか、C層に近づくかが全体を左右する。

C層 61人は「メリットを感じない」62%、「人付き合いが負担」62%、「会費が負担」46%と他層より際立って高く、直近の参加が今年の人では54%（A層 75%・B層 68%）と参加の間隔が開いている。役員経験は43%で、A層 38%・B層 41%と差はない（ $p=0.80$ 、資料編 A-12）。

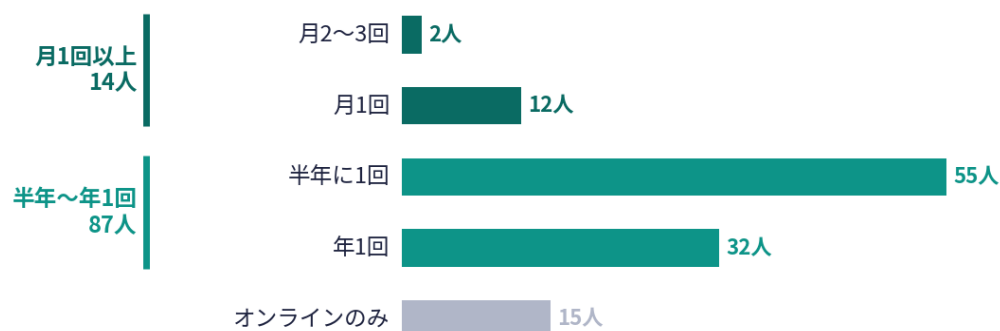
D・E・F層 116人は、頼まれれば参加できる頻度を答えている。この層はやりたい活動を挙げた人が91%、活かせる技能を持つ人が50%いる。一方、活動を知っている人は14%で、残る86%には案内が届いていない。月1回以上なら参加できると答えた人は14人にすぎず、年1～2回で完結する役割の設計が前提になる。

G層 58人はやりたい活動を挙げた人が62%いるが一人あたりの平均1件と具体性に乏しく、技能も21%と最も少ない。活動を知っている人は10%にとどまり、活動を知らないまま「参加は難しい」と答えている層である。ただし本音（設問 28）を書いた人は50%とC層（57%）に次いで多く、自治会への意見は持っている。

9.2 参加できると答えた層（D・E・F層、116人） — 91%が参加してみたい活動を持ち、71%は加入世帯にいる

参加したことがない174人のうち116人（67%）は、設問 20で「参加は難しい」ではなく、参加できる頻度を答えている。内訳は、半年に1回55人、年1回32人、月1回以上14人、オンラインのみ15人である（図 9-2）。ライフステージは子育て世帯（未就学児）43人、親と同居21人、夫婦のみ20人、一人暮らし17人と分散しており、案内の経路はライフステージごとに組み合わせる必要がある（図 10-2、第 10 章）。

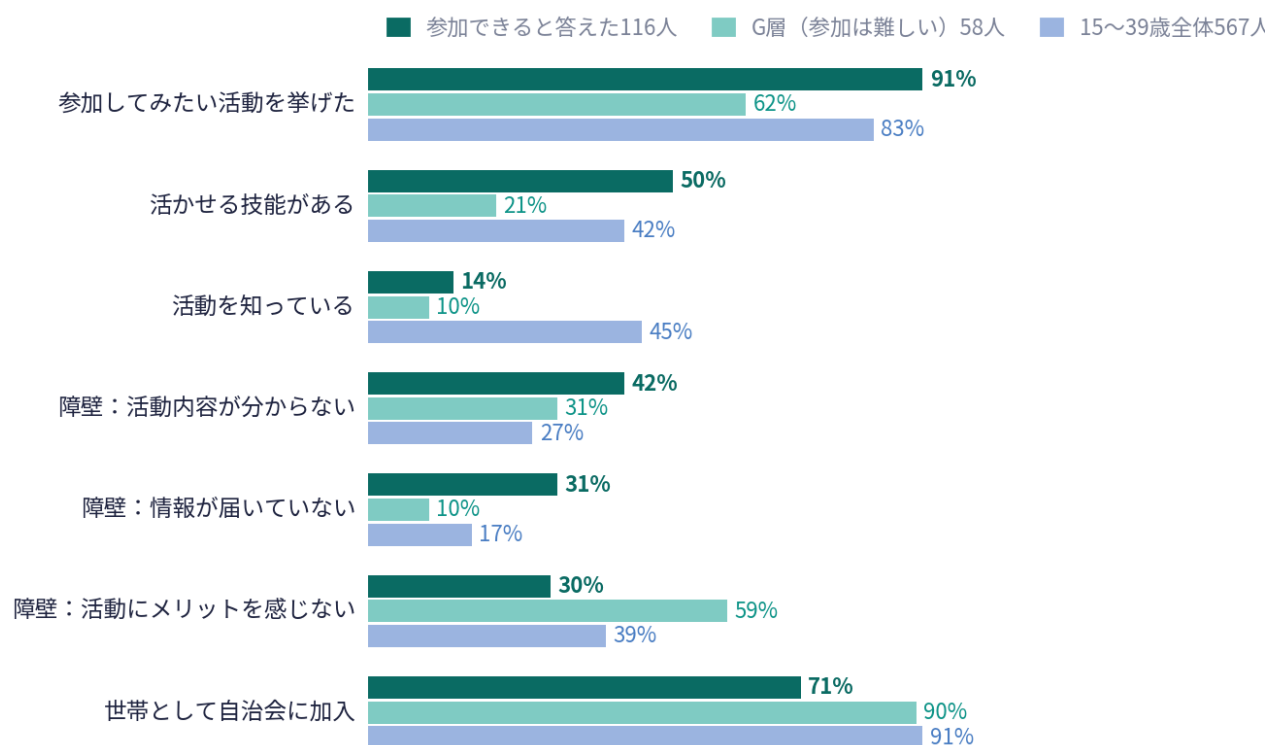
図 9-2 参加できると答えた 116 人が答えた頻度



116人のうち82人（71%）は世帯として自治会に加入しており、この82人の88%（72人）は活動を知らない。案内が届いていないのは自治会の外の人ではなく、加入世帯の中の若い人であ

る。116 人は参加してみたい活動を挙げた人が 91%、活かせる技能を持つ人が 50%と、G 層（参加は難しいと答えた 58 人）より前向きである。一方、活動を知っている人は 14%にとどまる。参加を妨げているものとして挙げるのは「活動内容が分からない」42%、「情報が届いていない」31%で、情報に関するものが多い。参加しやすくなる条件は「短時間で終わる」63%、「単発参加できる」46%である（図 9-3）。

図 9-3 参加できると答えた 116 人の特徴（G 層・15～39 歳全体との比較）

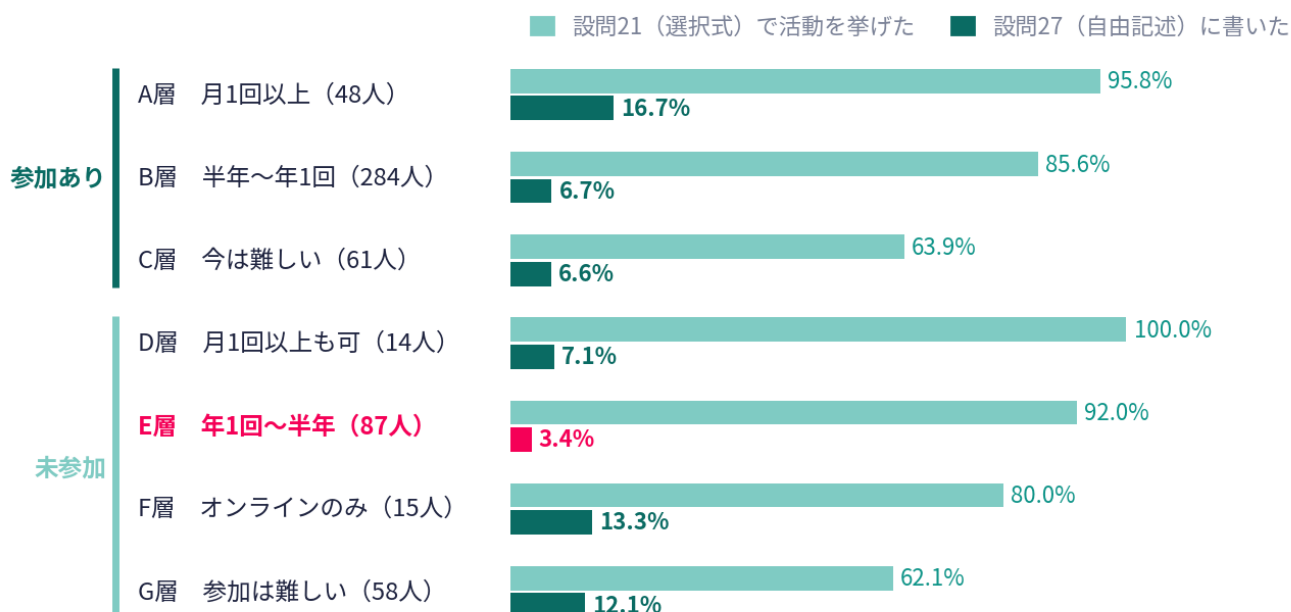


障壁は設問 19、条件は設問 22、活動は設問 21、技能は設問 26 による。

9.3 参加できると答えた層（D・E・F 層、116 人）は、活動の選択肢を示せば 91%が答える。ただし、自由記述で書けるのは 5%

第 5 章 2 節で扱った設問 27（参加したい活動の案）を、7 層に重ねると、層によって答えられる度合いが大きく違うことが分かる。

図 9-4 選択式では答えられるが、自由記述では書けない



自由記述に何かを書いた割合は、A層 16.7%に対し、参加できると答えたE層 87人では 3.4%（3人）である。ところが同じE層は、選択式（設問 21）では 92.0%が活動を挙げている。自由記述は書かなくてもよい欄であり、書かない理由には書く手間や関心の薄さも含まれる。ただし同じE層の 92.0%が選択式では今後参加してみたい活動を挙げていることから、参加してみたい活動そのものがないのではなく、自治会活動として何があり得るかを知らないために案を書けない、とも読める。

表 9-1 設問 27 に書かれた内容の三分類と、書いた人の特徴

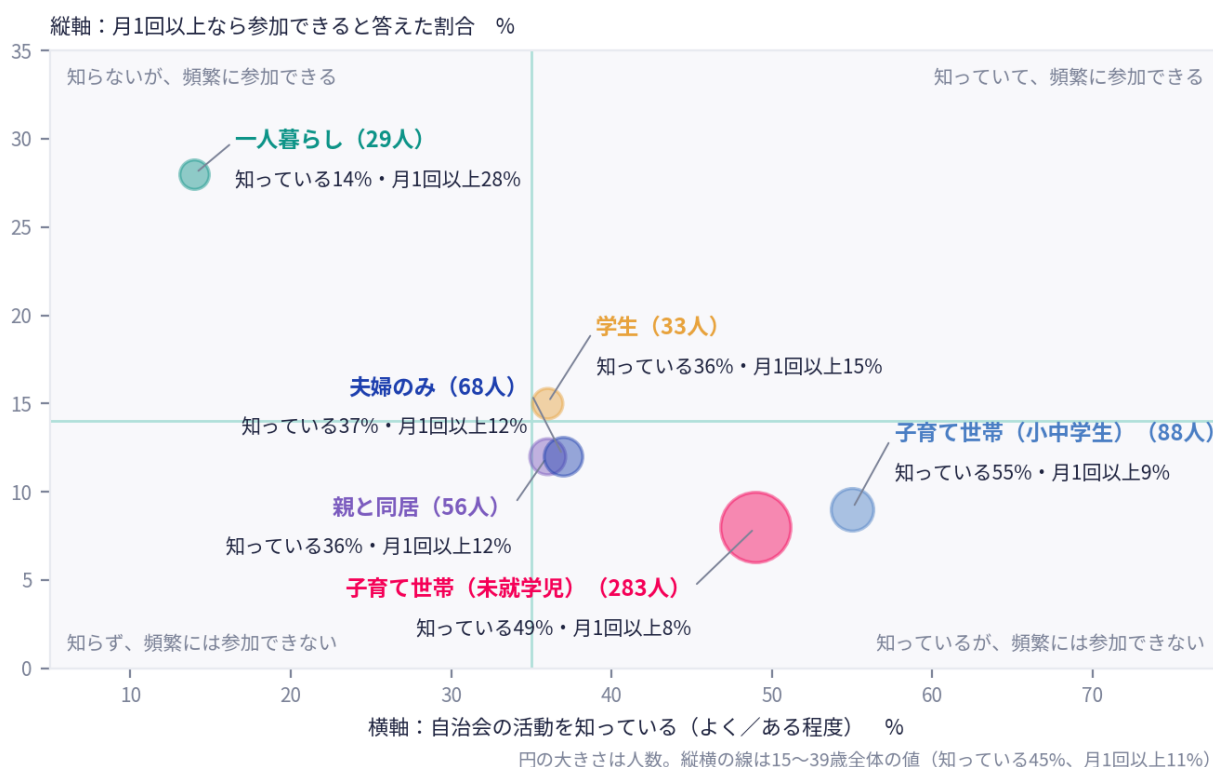
記述の内容	件数	うち 15～39 歳	参加経験あり	活動を知っている	月 1 回以上可	技能あり	年齢中央値
具体的な案	206 件	33 件	95%	85%	37%	50%	57 歳
「特になし」等	68 件	7 件	90%	72%	18%	31%	57.5 歳
参加そのものを拒否	26 件	4 件	81%	65%	4%	8%	49 歳

具体的な案を書いた 206 人は参加経験 95%・活動を知っている 85%と回答者全体（87%・72%）より自治会に近い側に偏り、年齢中央値は 57 歳である。参加を拒む 26 件は 49 歳と若い。自由記述で案を募れば集まるのはいま参加している人の希望であり、参加していない層の希望を拾うには選択肢を示して希望を尋ねる形が必要である（示唆 2）。

第10章 ライフステージと関わり方を重ねて見る

ライフステージと自治会との関わり方を重ねると、働きかけ先が整理できる。横軸に活動の認知、縦軸に月1回以上なら参加できると答えた割合をとり、円の大きさを人数とした（概要図12・第7章3節と同じ指標）。個人として見れば認知の高い人ほど頻繁に参加できると答えるが、ライフステージ単位では、つながりの多い層ほど時間の制約が強く、両者は逆の傾向になる（第7章3節）。

図10-1 活動の認知と、月1回以上参加できると答えた割合



左上の一人暮らしは、活動を知らないが月1回以上参加できる層である（ただし29人であり、値には幅がある）。右下の子育て世帯（未就学児・小中学生）は、最もよく知っているが月1回以上の参加は難しい層で、前者は時間の制約、後者は意欲の低下が理由である。親と同居と、夫婦のみはその中間にあり、前者は親が肩代わりすることによる役割の不在、後者は参加する理由の不在が背景にある。学生は認知が中程度で、月1回以上なら参加できると答えた割合は15%と一人暮らしに次いで高い。

図 10-2 ライフステージ×関わり方の7層（人数と、各ライフステージ内の割合）

	参加経験あり			参加したことがない			
	A層 月1回以上	B層 半年～年1回	C層 今は難しい	D層 月1回以上も可	E層 年1回～半年	F層 オンラインのみ	G層 参加は難しい
学生（33人）	3人 (9%)	15人 (45%)	4人 (12%)	2人 (6%)	5人 (15%)	1人 (3%)	3人 (9%)
一人暮らし（29人）	4人 (14%)	5人 (17%)	1人 (3%)	4人 (14%)	12人 (41%)	1人 (3%)	2人 (7%)
親と同居（56人）	3人 (5%)	11人 (20%)	9人 (16%)	4人 (7%)	16人 (29%)	1人 (2%)	12人 (21%)
夫婦のみ（68人）	7人 (10%)	33人 (49%)	2人 (3%)	1人 (1%)	15人 (22%)	4人 (6%)	6人 (9%)
子育て世帯（未就学児）（283人）	22人 (8%)	165人 (58%)	26人 (9%)	2人 (1%)	33人 (12%)	8人 (3%)	27人 (10%)
子育て世帯（小中学生）（88人）	7人 (8%)	53人 (60%)	16人 (18%)	1人 (1%)	5人 (6%)	0人 (0%)	6人 (7%)
合計（557人）	46人 (8%)	282人 (51%)	58人 (10%)	14人 (3%)	86人 (15%)	15人 (3%)	56人 (10%)

各セルは人数と、そのライフステージ内での割合。色が濃いほど割合が高い。合計行の括弧内は 557 人に対する割合。ライフステージを特定できない 10 人を除くため、7 層の人数（A 層 48 人など）とは合計行の値が異なる。

この図から読み取れることは二つある。第一に、B 層 284 人の 58%（165 人）が子育て世帯（未就学児）であり、この層の扱いが全体を左右する。第二に、E 層は子育て世帯（未就学児）33 人、親と同居 16 人、夫婦のみ 15 人、一人暮らし 12 人と分散している（図の合計はライフステージを特定できなかった 10 人を除いた人数）。

ライフステージが異なれば案内の届く経路も違うため、子育て世帯には学校や園を通じた告知、親と同居には世帯の中の若い人に宛てた案内、一人暮らしには集合住宅の管理会社を通じた案内や電子回覧板での配信というように、経路を組み合わせる必要がある。

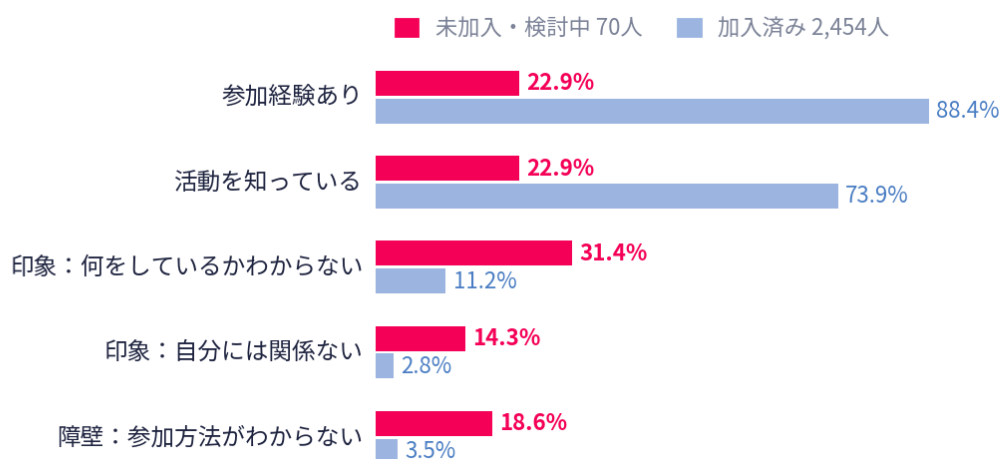
第 11 章 全体の集計では埋もれる層

本章では、回答者の中でも人数が少なく、全体の集計では埋もれてしまう層を取り出す。自治会に加入していない人、賃貸・集合住宅に住む若い世代、そして役員を経験した人の三つである。前の二つは案内が届いていない層であり、最後の一つは自治会とのつながりがあったがゆえに離れつつある層である。

11.1 自治会に入っていない人 — 記述で最も多いのは「案内がない・入り方が分からない」

未加入・退会済みと加入検討中を合わせて 70 人（全体の 2.8%）で、量的な分析には足りない。70.0%が 15～39 歳、住まいは賃貸マンション・アパートが 36 人と過半を占める。

図 11-1 加入していない人と加入している人の比較

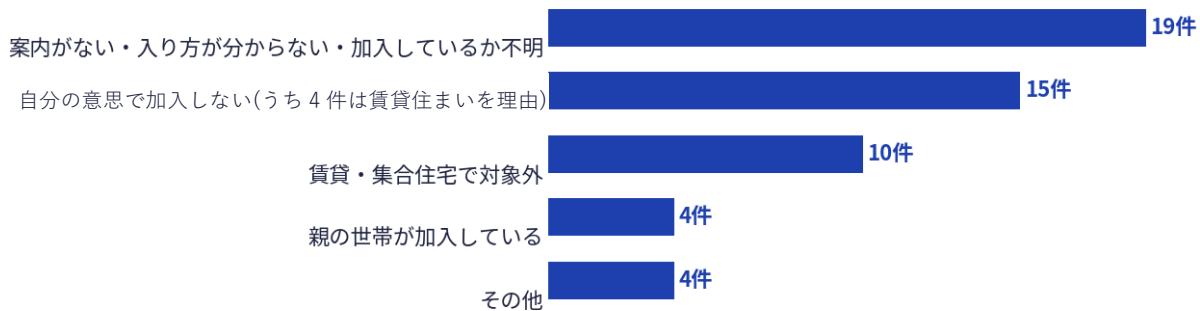


未加入・検討中は設問 14・17 で「未加入・退会済み」「加入検討中」。

この層に共通するのは、自治会について知らないことである。「何をしているかわからない」が 31.4%を占める一方、「自分には関係ない」は 14.3%にとどまる。

加入状況の設問に付された記述 52 件（分類基準は資料編 A-7）进行分类すると、案内がない・入り方が分からない・加入しているか分からない 19 件（37%）、自分の意思で加入しない 15 件（29%）、賃貸・集合住宅で対象外 10 件（19%）、親の世帯が加入している 4 件、その他 4 件である。

図 11-2 加入していない理由（自由記述 52 件の分類）



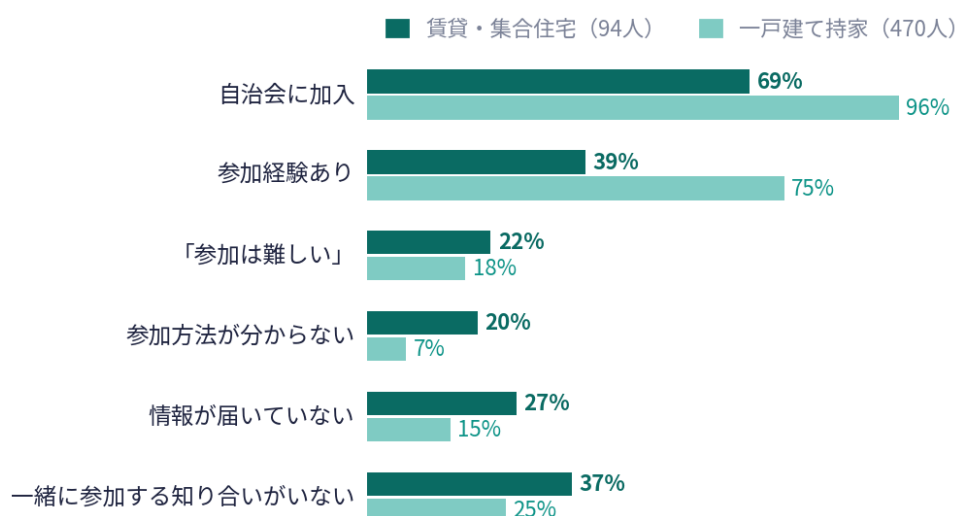
「加入しない」は、入りたくない・必要を感じないなど本人の判断を書いたもの（うち 4 件は理由に賃貸住まいを添える）。「賃貸・集合住宅で対象外」は、アパートには自治会がない・対象になっていないなど、本人の判断ではなく状況を書いたもの。分類の優先順位は資料編 A-7。

52 件に量的な代表性はないが、最も多いのは「案内がない・入り方が分からない」の 19 件で、自分の意思で入らない 15 件を上回る。入っていない人の多くにとって、届いていないのは入り方の案内である。なお、賃貸や集合住宅だから自分は対象外だと思っていると書いた 10 件については、集合住宅と自治会の関係をどう取り扱うかという別の論点を含むため、別途の検討を要する。

11.2 賃貸・集合住宅の若い世代 — 参加できると答えた割合は持家と同じ

15～39 歳のうち賃貸・集合住宅に住む 94 人は、一戸建て持家に住む 470 人と比べて、明確に自治会とのつながりが少ない。加入率は 69.1%（持家 96.0%）、参加経験は 39.4%（同 75.3%）である。

図 11-3 住まいの形態別に見た 15～39 歳



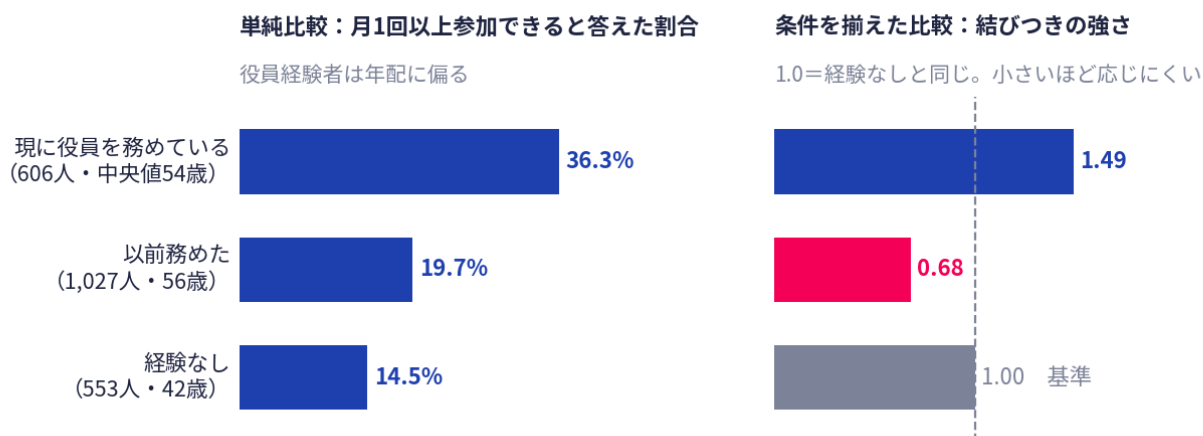
賃貸・集合住宅の若い世代で参加が少ないのは、参加する気持ちが持家の人より弱いからではない。設問 20 で「参加は難しい」と答えた割合は賃貸 22.3%、持家 17.7%とほとんど変わらず、月 1 回以上なら参加できると答えた割合も賃貸 11.7%、持家 10.9%と同じ水準である。つまり、頼まれれば参加できると答える人の割合は、住まいで違わない。違いが出るのは参加を妨げているものの中身で、賃貸では「参加方法がわからない」20%（持家 7%）、「情報が届いていない」27%（同 15%）、「一緒に参加する知り合いがいない」37%（同 25%）が高い。持家の世帯には回覧板が回り、ごみステーションの当番があり、その過程で自治会の活動が目に入るが、賃貸・集合住宅ではこの流れがない。差を生んでいるのは案内が届くかどうかである（概要図 3）。

第 7 章の一人暮らし 29 人のうち 17 人がこの 94 人と重なるが、94 人には配偶者や子どもと賃貸に住む世帯も含む。管理会社や不動産事業者を通じた案内、電子回覧板での配信といった案内の経路を考えると、ライフステージより住まいでの分類の方が、対象と手段が具体的になる。

11.3 役員を経験した人 — 次の関わりは鈍る

本節は、自治会とつながりがあったがゆえに離れつつある層を扱う。参加経験者 2,186 人を役員経験で分けると、月 1 回以上なら参加できると答えた割合は、現に役員を務めている人 36.3%、以前務めた人 19.7%、経験のない人 14.5%で、単純に比べれば役員経験者の方が高い（図 11-4 左）。

図 11-4 役員経験別 月 1 回以上参加できると答えた割合（参加経験者）



左：参加経験者 2,186 人の単純比較。右：年齢・認知度・近所づきあい・こどもの同居を揃えたロジスティック回帰のオッズ比（資料編 A-6）。

ただしこの比較には年齢の違いが混ざっている。役員経験者は年齢の中央値が 54～56 歳で、経験のない人（42 歳）より年配であり、年配の人ほど参加に応じやすい。そこで年齢・認知度・近所づきあい・こどもの同居が同じ人どうして比べると、以前役員を務めた人は、経験のない人より月 1 回以上の参加に応じにくい（図 11-4 右。結びつきの強さ 0.68。1.0 が「経験のない人と同じ」、小さいほど応じにくい）。現に役員を務めている人は 1.49 と応じやすいが、これは役員だから参加している状態の裏返しである。以前役員を務めた人は、直近の参加が今年である割合も 61.3%と最も低い。

一方、自治会に対する印象も自由記述の批判の割合も役員経験で変わらない。役員の経験は評価を下げるのではなく、次の関わりを鈍らせる方向に働く。

15～39 歳に限ると確かめにくい。C 層 61 人の役員経験は 43%で A 層 38%・B 層 41%と差はなく（ $p=0.80$ ）、参加経験のある 15～39 歳 393 人で同じ回帰分析を行うと結びつきの強さは 0.54 と同じ方向だが有意ではない（ $p=0.20$ 、資料編 A-6）。役員を担った経験が再任を妨げているとすれば、担い手不足は循環的に悪化する。

第4部 示唆

第12章 考察と今後の取組への示唆

本章は、第3章から第11章までの結果を踏まえ、そこから導かれる今後の取組への示唆を整理する。あわせて、市が別途行った市内の自治会等に対する依頼業務調査の結果を参照する。

12.1 調査結果から見たこと

本調査の結果は、調査結果の概要と同じく、次の七つにまとめられる。

第一に、自治会活動に参加したことがない若い人の67%は参加できると答え、その91%は参加してみたい活動を持ち、71%は既に加入世帯の中にいる。参加できると答えた人の多くは、自治会の外ではなく加入世帯の中にいる。

第二に、参加の有無と最も強く結びつくのは、年齢や住まいではなく、活動内容を知っているかどうかである。加入世帯にいる82人でも88%は活動を知らず、案内が世帯主に届いた段階で止まっている。

第三に、賃貸・集合住宅の若い世代も持家の人と同じ割合で参加できると答えている。自治会に入っていない人の記述でも、最も多いのは「案内がない・入り方が分からない」（37%）で、自分の意思で入らない（29%）を上回る。

第四に、自由記述の批判は自治会を否定する声ではなく、6割は「こう変えてほしい」という要望を伴う。最も多い論点は役員の負担で、役員を担う40歳以上で高い。次いで多いのは古い慣習・世代間の断絶で、若い世代ではこれとデジタル化、共働き・子育て世代への配慮が40歳以上より多く書かれている。以前役員を務めた人は、役員経験のない人より次の参加に応じにくい（第11章3節）。

第五に、参加は家族と一緒にか一人でのどちらかで、友人と一緒に参加する機会がほとんどない。一方で、友人と一緒に参加しやすいと答える学生は48%いる。

第六に、若い世代が続けたいのは祭り・イベントのような交流を伴う活動で、清掃やごみステーション管理のような維持管理の活動は続きにくい。祭り・イベントは、若い世代の方が40歳以

上より続けたい人が多い唯一の活動である。

第七に、地域の違いは考え方ではなく抱えている課題の重さに現れ、中山間の課題は案内の届き方ではなく、若い世代の数そのものと、いる人の負担である。

本調査から言えるのは、以上の状態が存在することまでである。案内が届けば何割が参加するか、認知が先か参加が先か、「参加は難しい」と答えた 58 人がなぜそう答えたかは、一時点の調査からは分らない。示唆はこの範囲の中で導いている。

12.2 八つの示唆

示唆ごとに、対象と規模を明示する。示唆 1～3 は、参加するかどうかを本人が選べる状態をつくるものである。案内が届いた場合に、そのうちどれだけの人が参加するかは本調査では分からないが、まずこの前提を整える。示唆 4～6 は参加のきっかけ、示唆 7 は負担の軽減、示唆 8 は自治会の運営の見直しに関するものである。対象、関係する主体、根拠となる数字を表 12-1 にまとめる。

表 12-1 示唆ごとの対象、関係する主体と、根拠となる数字（事務局の整理）

示唆	誰に（規模）	関係する主体	根拠となる数字
A 案内を届ける			
1 転入時・加入時の案内を標準化する	未加入者（全年代 70 人）、転入 5 年未満（64 人）、賃貸・集合住宅の 15～39 歳（94 人）	地域振興課、市自治会連合会、自治会	未加入者の記述 52 件中 33 件は案内・対象外・親世帯経由。自分の意思は 15 件
2 世帯主で止まらない連絡経路をつくる	会員世帯の中の若い人＝参加できると答えた未参加（D・E・F 層 116 人）。希望は選択肢を示して聞く	地域振興課、自治会	未参加 174 人の 67%が参加できると答え、その 71%は加入世帯、うち 88%が活動を知らない
3 情報を届ける手段を、紙から電子に移す	全世代（電子回覧板で見たい 63.0%）	地域振興課、依頼文書を出す各課、自治会	若い世代で高い論点（15～39 歳 27.4%、40 歳以上 17.4%）
B 参加のきっかけをつくる			
4 個人として関われるきっかけを設ける	技能があるのに参加したことがない 15～39 歳（70 人）	自治会、まちづくり組織、公民館等	近所の人と参加 3.1%、友人と 1.3%
5 最初に頼む活動は、維持管理ではなく交流と学びから	これから参加する人すべて	自治会、まちづくり組織、公民館等	継続率は祭り 50.6%、清掃 28.0%。選択肢にない案 37 件
6 子育て世帯への配慮と、こどものない層向けの行事や役割を両立させる	子育て世帯（371 人）とこどものない若い世代（186 人）	自治会、まちづくり組織、公民館等	前者はつながりがあり時間がなく、後者は逆。地域で力点が違う
C 負担を減らす			
7 市や各種団体が自治会に依頼している業務を見直す	現に役員を担っている人（全年代、参加経験者の 27.7%）	全庁、地域振興課	最多論点は役員・当番の負担（33.9%、40 歳以上 36.4%）
D 運営を見直す			
8 慣習と役割を見直す場をつくる	自治会の役員・総会の運営（全年代）	自治会、市自治会連合会、地域振興課	2 番目に多い論点は古い慣習・世代間の断絶（21.6%、15～39 歳 26.2%）。不公平感 12.0%

1 転入時・加入時の案内を標準化する

自治会に入っていない人の記述 52 件で最も多いのは、案内がない・入り方が分からないというもの（19 件）で、標準の案内が直接に応える対象である。賃貸・集合住宅の若い世代では「参加方法がわからない」が 20%と持家（7%）を大きく上回る。転入届の窓口や不動産事業者を通じ

て、所属する自治会・会費・活動・連絡先等が参照できる標準の案内を渡す仕組みは、検討の価値がある。案内には必要に応じてごみステーションの利用条件を明記することが望ましい。加入とごみ出しが結びついているという指摘は加入者・未加入者の双方から出ている（資料編 B-6）。対象は、加入していない 70 人（全年代）、15～39 歳の転入 5 年未満 64 人、賃貸・集合住宅に住む 15～39 歳 94 人である。

2 世帯主で止まらない連絡経路をつくる

参加したことがない 174 人の 67%は参加できると答え、その 71%は加入世帯にいるが、88%は活動を知らない。案内が世帯主で止まっている。電子回覧板を世帯主以外も家族ユーザーとして登録する、世帯の中の若い人への案内、学校を経由した告知など、世帯を単位としない経路を、ライフステージごとに組み合わせて用意する（第 10 章）。対象は参加できると答えた未参加 116 人（D・E・F 層）で、活動の認知が 36%にとどまる親と同居と学生でとりわけ起きやすい。この層の希望は、選択肢を示せば 91%が答えるが、自由記述の記入は 5%にとどまる（第 9 章 3 節）。意見を聞くときは選択肢を示して尋ねることが望ましい。

3 情報を届ける手段を、紙から電子に移す

電子回覧板で見たい人は全体の 63.0%で、40 歳以上（64.0%）と 15～39 歳（59.8%）に差はなく、紙の回覧板は 22.2%にとどまる。電子化は若者向けの特別な施策ではなく、全世代に向けた基盤の整備であり、個人単位で登録できる家族ユーザーを普及させることが示唆 2 と組み合わせて効果的である。ただし学生に届くのは 21%で、電子回覧板の更なる普及に加えて学校や SNS を経由する経路が要る。LINE は全体 57.3%と世代を問わず最も身近で、Instagram は 15～39 歳で 36.2%と追加の手段になる。自由記述では、電子回覧板が導入されていない自治会や、未加入世帯に案内が配られない自治会が指摘されており（資料編 B-3）、手段を増やす前に、既に導入したものを確実に普及させることが必要である。行政側でも、自治会長向けの依頼文書の多くが紙で送付されており、電子化で対応できるものが相当数ある。対象は全回答者の 63.0%（15～39 歳では 339 人）である。

4 個人として関われるきっかけを設ける

友人と一緒に参加しやすいと答える学生は 48%いるが、実際の参加は家族と一緒にか一人でのどちらかで、友人と参加する機会がない。家族を介さないこどものいない若者と単身者には、参

加のきっかけがない。世帯単位の加入とは別に、単発の役割を個人に頼める仕組みや、友人と参加できる行事を検討する。技能があるのに参加したことがない 15～39 歳は 70 人おり、役割を指定して単発で頼む対象として具体的である。

5 最初に頼む活動は、維持管理ではなく交流と学びから

同じ活動を続けたい人の割合は、清掃 28.0%・ごみ管理 19.6%に対し、祭り・イベントは 50.6%である。若い世代を最初に迎える活動を祭りやこども向けの催しに置き、維持管理はその後の選択肢とする順序が、参加の継続性を高める。自由記述では、設問 21 の選択肢にない案が 37 件あり、その大半は料理教室や健康体操、救命救急講座のように「学ぶ」形の案で、最初に頼む活動は「地域の仕事」の枠の外にも候補がある（第 5 章 2 節）。一人暮らし 29 人もやりたい活動として祭り・イベントを防災と並んで最も多く挙げており、不足しているのは参加のきっかけである。

6 子育て世帯への配慮と、こどものいない層向けの行事や役割を両立させる

15～39 歳の 22.6%が共働き・子育て世代への配慮に言及しており（40 歳以上 10.4%）、子育て世帯（未就学児）が月 1 回以上なら参加できると答えた割合は 8%と最も低い。参加条件は短時間 66%、こども連れ 59%で、活動の時間帯や運営の仕方について応える必要がある。一方で、対象を子育て世帯に寄せすぎると時間のある層を取りこぼす。子育て世帯にはつながりはあるが時間がなく、こどものいない層には時間はあるがつながりがない。夫婦のみ 68 人は「役員の負担が重そう」78%、「メリットを感じない」41%と、自治会活動に参加する理由を見出しにくい層である。配慮を厚くすることと対象を広げることは別であり、両方を進める。

7 市や各種団体が自治会に依頼している業務を見直す

自由記述の最大の論点は役員の負担で、全体の 33.9%が言及している。40 歳以上では 36.4%、15～39 歳では 25.0%と、役員を担う年代で高い。庁内の調査では、自治会長を通じた委員の委嘱や協力依頼が年間で延べ数千人規模に及び、辞退できないとしている依頼にも法令に基づかない任意のものが含まれる。住民が負担として挙げているものの一部は市や各種団体の依頼に由来しており、依頼側の見直しは、自治会に変化を求める議論と切り離せない。対象は現に役員を担っている人（全年代、参加経験者の 27.7%）で、若い世代に限らない。

8 慣習と役割を見直す場をつくる

自由記述で役員の負担に次いで多い論点は、古い慣習・世代間の断絶（21.6%、15～39 歳 26.2%）である。「昔からこうだった」で物事が決まり、若い世代や女性の意見が通らないという指摘で、役をやらない人がいて負担が同じ人に固まるという不公平感（12.0%）もこれに重なる。この二つは、案内を届けても、参加のきっかけをつくっても、市の依頼業務を減らしても解消しない。行事の取捨選択や役員の決め方について、住民アンケートや世代や性別を越えて話し合う場を設けることが自治会には求められ、市はアンケートや話し合いの手法と慣習の見直し事例を示す役割を担う。対象は自治会の運営そのもので、若い世代に限らない。

その他の論点

地域差については、若い世代の参加に関する取組はまず市内共通のものとして考えてよく、変わるのは、共通の取組のうち何を優先するかである。市街地周辺・郊外では若い世代の認知が 38.5%と最も低く、案内を届けることが課題に当たる。中山間は若い世代の数そのものが少なく（15 歳以上の 20.5%）、いる若い世代は既に自治会に近いとため、示唆 1（転入者の案内）と示唆 7（依頼業務の見直し）が主に関わる。中山間の会費の負担と高齢者支援の不足は、若い世代の参加とは別の論点を含むため、別途の検討を要する（第 6 章 2 節）。

12.3 働きかけの余地が大きい層

本節は今後の取組の材料として、働きかけの余地が大きいと読める層を代表例として示す。

表 12-2 働きかけの余地が大きい層（代表例）

いまの状態	対象	規模	ライフステージの内訳 (多い順)	考えられる打ち手
案内が届いていない	参加できると答えた 未参加（D・E・F 層）	116 人	子育て世帯（未就学 児）43／親と同居 21／ 夫婦のみ 20／一人暮らし 17	加入世帯の若い人に直接届く案内。日時・所要時間・内容が事前に分かる告知。年 1～2 回で完結する役割の提示。希望は選択肢を示して聞く（示唆 2）。
担っている	既に月 1 回以上参加 している（A 層）	48 人	子育て世帯（未就学 児）22／夫婦のみ 7／ 子育て世帯（小中学生）7	負担の見通しが立つようにする。年間予定の事前提示、こども連れ前提の運営、技能を活かす役。人数を増やすより、離れさせないことが課題となる層。
離れかけている	参加をやめかけている （C 層）	61 人	子育て世帯（未就学 児）26／子育て世帯 （小中学生）16／親と 同居 9	会費と使途の見える化。「またお願いします」ではなく「次も 1 回だけ」と頼む。断れる形を用意する。自治会運営の改善を図りながら長い目で見ていくことが必要。
距離を取っている	参加は難しい（G 層）	58 人	子育て世帯（未就学 児）27／親と同居 12／ 夫婦のみ 6	短期間で参加に転じる見込みは小さい。参加の依頼ではなく、市の依頼業務の見直しや会計公開の進捗を、電子の手段で届ける（示唆 3）。活動を知っている人は 10%にとどまるが、本音を書いた人は 50%と多く、自治会への意見は持っている層である。自治会運営の改善を図りながら長い目で見ていくことが必要。

ライフステージの内訳は図 10-2 による。ライフステージを特定できなかった 10 人を含まないため、内訳の合計は規模を下回る。

この四つを合わせると 283 人で、15～39 歳の 50%にあたる。なお、283 人は子育て世帯（未就学児）の人数と同じだが、偶然の一致である。残る B 層 284 人は、参加はしているが頻度が低い最大の層である。この層を C 層に近づけずに参加を続けてもらえるかどうか、若い世代全体の参加の水準を決める（第 9 章 1 節）。

資料編

資料編 A 分析の方法

A-1 調査票の作成

本調査の設問は、東京大学フィールドスタディ型政策協働プログラム（学生が自治体の現場で職員とともに政策課題に取り組むプログラム）福井市チームが作成した。若い世代の参加を妨げる要因を、意識ではなく条件の側から把握できるよう、参加経験・参加できる頻度・参加しやすくなる条件を分けて問う構成としている。設問の制約は A-11 に記す。

A-2 集計

全 2,524 件を対象とした。年齢を「回答しない」とした 6 件は年代別集計から除いた（年代別の母数は 2,518 件）。また公民館ブロックを「不明・回答しない」とした 180 件はブロック別集計から除いた（母数 2,344 件）。世代の分け方は 15～39 歳を「若い世代」、40 歳以上を比較対象とし、単純集計（第 3 章の図、資料編 C）は全体と 15～39 歳を併記した。世代差を論じる箇所では、15～39 歳を含む全体ではなく 40 歳以上と比較した。本文と表 A-4 の 95%信頼区間はウィルソン法で求めた。第 7 章 1 節の「土ポイント」は、比率 50%のときの幅を正規近似で示した目安である。

A-3 ライフステージの分け方

就業状況（設問 2）と世帯構成（設問 3・4）から 6 つのライフステージに分けた。判定は次の順に行い、最初に該当したものに割り当てた。第一に、就業状況が高校生・高専生または大学生・専門学校生等であれば「学生」。第二に、世帯人数が 1 人であれば「一人暮らし」。第三に、こども（未就学・小中学生・高校生以上）と同居していない場合、配偶者と同居していれば「夫婦のみ」、親と同居していれば「親と同居」。第四に、未就学のこどもと同居していれば「子育て世帯（未就学児）」、小中学生と同居していれば「子育て世帯（小中学生）」。

いずれにも当てはまらない 10 人は分析から除外した。

A-4 関わり方の分け方

参加経験（設問 10）と参加できる頻度（設問 20）の組み合わせで 7 層に分けた。参加経験ありのうち月 1 回以上を A 層、半年～年 1 回を B 層、オンラインのみ・参加は難しいを C 層。参加経験なしのうち月 1 回以上を D 層、半年～年 1 回を E 層、オンラインのみを F 層、参加は難しいを G 層とした。

A-5 継続率

参加経験者について、活動 X を経験した人のうち活動 X を今後もやりたいと答えた人の割合として算出した。経験者 30 人未満の活動は算出していない。

A-6 ロジスティック回帰

目的変数は参加経験「なし」。説明変数は、年齢（10 歳単位）、近所づきあい（4 段階）、自治会活動の認知度（5 段階）、居住年数（年）、一戸建て持家、小中学生と同居、印象 3 項目（役員の負担が重そう・高齢者中心の組織・何をしているかわからない）、障壁 3 項目（仕事や学業で忙しい・活動参加にメリットを感じない・人付き合いが負担になる）の 12 項目である。有効標本は 2518 件、有意水準は 5%とした。結果は図 4-2 と表 A-1 に示す。年齢の結びつきが他の項目を加えるにつれてどう変わるかを表 A-2 に示す。年齢だけでは 0.50、住まい・こどもの同居・居住年数を加えても 0.52 だが、近所づきあいを加えると 0.58、認知度を加えると 0.73 まで縮む。

第 11 章 3 節では、これとは別に、月 1 回以上参加できると答えたかどうかを目的変数とし、年齢（10 歳単位）、自治会活動の認知度、近所づきあい、小中学生との同居、役員経験を説明変数とする回帰分析を行っている。役員経験の結びつきの強さ 0.680 は、この第二のモデルによる値である。同じモデルを参加経験のある 15～39 歳 393 人に限って推定すると、以前役員を務めた人のオッズ比は 0.54 ($p=0.20$) で、方向は同じだが統計的に有意ではない（第 11 章 3 節）。

表 A-1 ロジスティック回帰の全結果

説明変数	結びつきの強さ（オッズ比）	p 値	有意
自治会活動の認知度	0.311	<0.001	○
一戸建て持家	0.352	<0.001	○
小中学生と同居	0.556	<0.001	○
近所づきあい	0.604	<0.001	○
年齢（10 歳）	0.734	<0.001	○
障壁：仕事や学業で忙しい	0.901	0.508	—
障壁：人付き合いが負担になる	0.966	0.822	—
障壁：活動参加にメリットを感じない	0.995	0.974	—
居住年数	1.002	0.824	—
印象：高齢者中心の組織	1.051	0.758	—
印象：役員の負担が重そう	1.080	0.652	—
印象：何をしているかわからない	1.473	0.035	○

表 A-2 項目を加えたときの、年齢（10 歳）の結びつきの強さの変化

考慮した項目	年齢（10 歳）の結びつきの強さ	読み方
年齢のみ	0.50	10 歳上がるごとに未参加の起こりやすさが約半分
+ 住まい・こどもの同居・居住年数	0.52	ほとんど変わらない
+ 近所づきあい	0.58	やや縮む
+ 活動の認知度（図 4-2 と同じ 12 項目）	0.73	半分近く縮む

目的変数は「参加したことがない」。各行は、上の行の項目に加えて当該項目を考慮した回帰分析における年齢のオッズ比。

A-7 自由記述の分類

設問 28「自治会への本音」1,078 件は、1 件ずつ読み、13 の論点（1 件が複数に該当しうる）と、極性（批判・不満、両論、中立・事実記述、提案・要望のみ、評価・肯定の 5 区分。1 件に一つ）、要望の表現の有無を付与した（概要図 4）。批判・不満は否定的な評価を含み肯定を含まないもの、両論は肯定と否定の両方を含むもの、提案・要望のみは評価を伴わず提案や希望だけを書いたもの、評価・肯定は肯定だけのもの、中立・事実記述は評価を伴わない事実や質問である。要望の表現は「～してほしい」「～べき」「～があるといい」など、変更や提案を求める言い回しを指し、極性とは独立に数えた。設問 27「参加したい活動の案」300 件も同様に読み、

「特にない」等、参加そのものを拒否、具体的な案の三つに分け（表 9-1）、具体的な案は活動分野に分類した（図 5-2）。やり方・条件への言及（図 5-3）も同じ 300 件を読んで付与した。加入状況（設問 14・17）の記述は、空欄と定型句を除く 52 件を、①自分の意思で加入しない（入りたくない・予定がない・必要性を感じない・面倒など本人の判断の表現があるもの。「賃貸だから入らない」のように住まいを理由に添えたものも含む）、②案内がない・入り方が分からない・加入しているか分からない、③賃貸・集合住宅で対象外（「アパートには自治会がない」など、本人の判断ではなく状況を書いたもの）、④親の世帯が加入している、⑤その他、の順に判定した（図 11-2）。分類は一人が全件を読んで行った。第三者による照合は行っていない。原文は回答者の特定を避けるため掲載しない。

A-8 要因ごとの説明力

第 6 章 2 節と概要図 8 の「説明できる割合」は、指標ごとに、住んでいる地区（公民館ブロック 8 区分）・年代（7 区分）・住まい（6 区分）のいずれか一つを説明変数とする一元配置分散分析の決定係数である。対象の 14 指標は、参加経験、活動の認知、近所づきあい、月 1 回以上を許可、参加は難しい、会費が負担、仕事や学業で忙しい、人付き合いが負担、印象 3 項目（役員の負担・高齢者中心・地域に必要）、困りごとは特にない、電子回覧板で見たい、短時間で終わる。地区は 0.2～1.7%、年代は 0.5～14.4%、住まいは 0.1～9.8%であった。ライフステージと 7 層の関連の強さは、クロス集計表（図 10-2）からクラメールの V を算出した。クラメールの V は二つの分類の関連の強さを 0（無関係）から 1（完全に対応）で表す指標で、0.1 程度は弱い、0.3 程度は中程度の関連とされる。本調査の値は 0.194 で、ライフステージが分かってもどの層に入るかはほとんど言い当てられない程度の関連である。

A-9 地域類型

公民館ブロックを都市計画マスタープランの 13 地域区分に照らして 3 類型に集約した。

表 A-3 公民館ブロックと地域区分の対応

ブロック	地区（括弧内は地域区分の番号）	類型
不死鳥	春山(1,4)、宝永(1,4)、順化(1)、松本(1,4)、日之出(1,2)、旭(1,2)、日新(1,5)	A 市街地中心
あたご	木田(1,7)、豊(1,7)、足羽(1,6)、湊(1,5)	A 市街地中心
みなみ	清明(7)、東安居(5,6)、社南(6)、社北(6)、社西(6)、麻生津(7)	B 市街地周辺・郊外
あずま	和田(1,2)、円山(2)、啓蒙(3)、岡保(2)、東藤島(3)	B 市街地周辺・郊外
九頭竜	明新(4)、中藤島(3)、西藤島(5,10)、森田(9)、河合(9)	B 市街地周辺・郊外
足羽	酒生(2,8)、一乗(8)、上文殊(8)、文殊(8)、六条(8)、東郷(8)、美山(13)	C 郊外集落・中山間
光	安居・一光(11)、殿下(12)、越廼(12)、清水西・東・南・北(11)	C 郊外集落・中山間
川西	大安寺・本郷・宮ノ下・鶉・棗・鷹巣(10)、国見(10,12)	C 郊外集落・中山間

地域区分：1 市街地中心部、2 市街地東部、3 市街地北東部、4 市街地北部、5 市街地北西部、6 市街地南西部、7 市街地南部、8 南東部、9 北部、10 北西部、11 南西部、12 西部、13 東部。表 6-1・図 2-2 の人口は、福井市年齢別人口統計表（2026 年 8 月 1 日現在、日本人）を、この表の地区構成でブロックに集計したものである。

A-10 ウェイト補正

住民基本台帳人口（2026 年 8 月 1 日現在、15 歳以上・日本人）の年代別シェアを回答シェアで除した値をウェイトとした（10 代 5.8 倍、70 代以上 3.6 倍など）。本文の数値には適用していない。第 2 章 2 節の「有効な回答数」は、ウェイトのばらつきによる精度低下を表す指標である。

感度分析として、公務員（17.1%）を除いて主要 20 指標を再計算すると差はいずれも 3 ポイント以内で、A-6 の回帰分析の結果も変わらなかった。公民館ブロック別の人口シェアで重み付けた場合の変化は最大 0.6 ポイントであった。

A-11 本調査の限界

- ・標本が自治会加入世帯に偏り、未加入者・集合住宅居住者・単身者の声は量的に語れる規模で集まっていない。年代構成も市の人口と異なり（70 代以上と 20 代以下が過小）、年齢による重み付けは有効標本数を半減させるため補正前の値を基本とした。
- ・断面調査であり、認知と参加のどちらが先かという因果の向き、および世代の違いと加齢の効果とを区別できない。案内が届いた場合に何割が参加するかは、本調査からは推定できない。
- ・設問 21 は「参加してみたい活動」を尋ねており、経験した活動を続けたいかを直接には尋ねていない。設問 20 は参加できる頻度を問うが、その理由は尋ねていない。
- ・学生 33 人、一人暮らし 29 人、親と同居 56 人は少数で、比率の幅は±12～18 ポイントに及

ぶ。性別は尋ねていない。

- ・設問 27 に活動の案を書いた人は回答者全体よりさらに自治会の内側に偏る（参加経験 92%、活動を知っている 80%。設問 28 に本音を書いた人は 90%・76%）ため、自由記述に現れる希望を市民全体の希望として読むことはできない（第 9 章 3 節）。
- ・自由記述は「個人が特定される形で公表しない」旨を伝えて得たものであり、市内の自治会は小規模で原文からの推測が避けられないため、原文は掲載せず論点として整理した。
- ・世帯単位の加入制度のもとでは、回答者個人の「加入状況」が世帯の状況を指す場合があり、若い世代の自己申告には曖昧さが残る。
- ・公民館ブロックの 3 類型への集約は都市計画マスタープランの地域区分に基づく近似であり、市街地と市街地外が混在するブロックを含む。設問が公民館ブロックを尋ねているため、より細かい地区単位の分析は行えない。

A-12 主要な差の 95%信頼区間と検定

本文で論じた主な差について、各群の割合の 95%信頼区間（ウィルソン法）と、二群の割合の差の検定（正規近似）を示す。自由記述の論点は、15～39 歳 248 件と 40 歳以上 827 件の比較である（年齢不明 3 件を除く）。役員経験（C 層対 B 層）、「参加は難しい」（賃貸対持家）、電子回覧板（世代間）の三つは差が認められず、本文の記述もそれに沿っている。

表 A-4 主要な差の95%信頼区間と検定

指標	群	値	95%区間	群	値	95%区間	差の検定
継続率：祭り・イベント	15～39 歳	50.6%	44.2～57.0	40 歳以上	42.8%	40.2～45.5	p=0.03
継続率：清掃・美化	15～39 歳	28.0%	23.2～33.5	40 歳以上	45.5%	43.0～48.0	<0.001
活動を「ほとんど知らない」「存在自体を知らない」	15～39 歳	37.9%	34.0～42.0	40 歳以上	11.1%	9.8～12.5	<0.001
一緒に参加した相手：一人	15～39 歳	41.0%	36.2～45.9	40 歳以上	50.1%	47.8～52.5	<0.001
一緒に参加した相手：近所の人	15～39 歳	3.1%	1.8～5.3	40 歳以上	13.4%	11.9～15.1	<0.001
月 1 回以上参加できる	一人暮らし	27.6%	14.7～45.7	子育て世帯（未就学児）	8.5%	5.8～12.3	p=0.001
活動を知っている	一人暮らし	13.8%	5.5～30.6	子育て世帯（小中学生）	54.5%	44.2～64.5	<0.001
メリットを感じない	C 層	62.3%	49.7～73.4	B 層	36.3%	30.9～42.0	<0.001
入会金や会費が負担	C 層	45.9%	34.0～58.3	B 層	23.2%	18.7～28.5	<0.001
役員経験あり	C 層	42.6%	31.0～55.1	B 層	40.8%	35.3～46.6	p=0.80(差なし)
参加経験あり	賃貸・集合住宅	39.4%	30.1～49.5	一戸建て持家	75.3%	71.2～79.0	<0.001
「参加は難しい」	賃貸・集合住宅	22.3%	15.1～31.8	一戸建て持家	17.7%	14.5～21.4	p=0.29(差なし)
参加方法が分からない	賃貸・集合住宅	20.2%	13.3～29.4	一戸建て持家	6.8%	4.9～9.5	<0.001
やりたい活動を挙げた／案を書いた（116 人）	選択式（設問 21）	91.4%	84.9～95.3	自由記述（設問 27）	5.2%	2.4～10.8	<0.001
自由記述の論点：デジタル化・情報公開	15～39 歳	27.4%	22.2～33.3	40 歳以上	17.4%	15.0～20.1	p=0.001
自由記述の論点：共働き・子育て世代への配慮	15～39 歳	22.6%	17.8～28.2	40 歳以上	10.4%	8.5～12.7	<0.001
自由記述の論点：ごみステーション	15～39 歳	13.3%	9.6～18.1	40 歳以上	7.7%	6.1～9.8	p=0.01
自由記述の論点：古い慣習・世代間の断絶	15～39 歳	26.2%	21.1～32.0	40 歳以上	20.2%	17.6～23.1	p=0.04
自由記述の論点：役員・当番の負担	15～39 歳	25.0%	20.0～30.7	40 歳以上	36.4%	33.2～39.7	p=0.001
本音に批判を含む（批判・不満＋両論）	15～39 歳	78.6%	73.1～83.3	40 歳以上	71.5%	68.3～74.4	p=0.03
電子回覧板で見たい	15～39 歳	59.8%	55.7～63.7	40 歳以上	64.0%	61.8～66.1	p=0.07(差なし)

資料編 B 自由記述に書かれた訴え

「自治会への本音」に寄せられた 1,078 件について、書かれている訴えを論点ごとに整理した。件数はその論点に触れた回答者の数であり、1 件の記述が複数の論点に該当する場合がある。見出しの割合は、全体 1,078 件、15～39 歳 248 件、40 歳以上 827 件それぞれに対するものである。除雪や道路、公民館の運営、個人の体験談など、いずれの論点にも該当しない記述が 83 件（7.7%）ある。

本調査では、回答は統計的に処理し個人が特定される形で公表しないこととお知らせしたうえで回答を得ている。市内の自治会は世帯数の中央値が 31 世帯と小規模であり、地名を伏せても記述の内容から書き手が推測される可能性がある。このため本書では原文を掲載せず、訴えの内容を論点として整理する形をとった。

B-1 役員・当番の負担となり手不足 365 件（33.9%） 15～39 歳 25.0%（62 件）、40 歳以上 36.4%

最も多く書かれた論点である。40 歳以上（36.4%）で高く、15～39 歳（25.0%）では低い。役員の仕事量そのものだけでなく、決め方、断りにくさ、引き継ぎの不備といった仕組みの問題が繰り返し指摘されている。

- ・ 輪番や前例踏襲で役が回ってくることが断ると気まずくなる、断れない雰囲気があること
- ・ 会長・副会長・会計の負担が特に重く、同じ人が何年も引き受けている状態が続いていること
- ・ 一度引き受けると、その後も繰り返し頼まれること
- ・ 会合が平日の夜や休日に集中し、就労している人が参加できないこと。
- ・ 金融機関での作業のために仕事を抜ける必要があること
- ・ 役員を引き受けない人が、引き受けた人に不満を述べること
- ・ 独居世帯や単身世帯では、家族の協力が前提の役割を担いにくいこと
- ・ 小規模な自治会や高齢化の進んだ自治会では、担い手が絶対的に足りないこと
- ・ 役員の任期が 1 年で、慣れた頃に交代し、引き継ぎと学び直しが毎年発生すること
- ・ 役員に手当や報酬がなく、無償で担わされていることへの不満
- ・ 病気や介護を抱えていても免除されない、または免除の基準が分からないこと

B-2 古い慣習・世代間の断絶 233 件 (21.6%) 15～39 歳 26.2% (65 件)、40 歳以上 20.2%

運営の進め方が変わらないこと、若い世代や女性の意見が通らないことへの指摘である。役員の負担に次いで 2 番目に多く、15～39 歳 (26.2%) で 40 歳以上 (20.2%) より多い。

- ・前例踏襲で、見直しの提案が通らないこと
- ・高齢の参加者の発言力が強く、若い世代が発言しにくい雰囲気があること
- ・転入者には分からない慣習があり、説明もないこと
- ・役員の多くが男性で、女性の意見が入りにくいこと
- ・意見を述べても結論に至らず、時間切れで終わること
- ・地元出身者と転入者の間に見えない線があること
- ・時代に合わせた柔軟な運用を求める声
- ・若い世代の新しい提案が高齢の役員に否定され、やる気を失うこと
- ・高齢者中心の飲食を伴う集まりに、若い世代が居場所を感じないこと
- ・役員の若返りや世代交代そのものを求める声

B-3 デジタル化・情報公開 212 件 (19.7%) 15～39 歳 27.4% (68 件)、40 歳以上 17.4%

デジタル化そのものへの反対はほとんどなく、導入の中途半端さと自治会間の差への指摘が中心である。15～39 歳では 27.4% が言及し、40 歳以上 (17.4%) との差は共働き・子育て世代への配慮と並んで最も大きい。

- ・電子回覧板を導入した自治会でも紙の回覧板が併存し、かえって手間が増えていること
- ・電子回覧板が導入されていない自治会があり、導入時期に差があること
- ・加入していない世帯に電子回覧板の案内が配られない自治会があること
- ・市の広報紙や配布物を紙で全戸配布する必要性への疑問
- ・会費の集金、総会、連絡をオンライン化してほしいという要望
- ・高齢者が使えないことを理由に紙が残るが、その高齢者への支援（講習会など）が用意されていないこと

- ・活動の内容や役員の仕事が外から見えず、写真付きの手引きなど分かる形で公開を求める声
- ・個人情報保護を理由に会員の把握ができず、かえって運営に支障が出ていること
- ・誰が同じ自治会の会員なのか、連絡先はどこか、が分からず、加入の判断や連絡ができないこと
- ・各自治会の会費や活動内容が外から分からず、転入者が判断できないこと
- ・LINE グループやアプリで班内の連絡を済ませたいという提案

B-4 活動のスリム化・廃止 187 件（17.3%） 15～39 歳 21.0%（52 件）、40 歳以上 16.1%

活動をやめる、減らす、外部に委託するという具体的な提案が多い。何を残すかについては、防災・防犯・ごみ・清掃を挙げる記述が目立つ。

- ・昔から続いているという理由だけで残っている行事の廃止や統合を求める声
- ・体育祭、祭り、懇親会など、参加者が限られる行事の見直し
- ・資源回収を市の収集に一本化してはどうかという提案
- ・公園や空き地の草刈りなど、体力を要する作業を業者に委託してはどうかという提案
- ・残すべき活動として、ごみステーションの管理、防犯灯の管理、防災訓練、年数回の清掃を挙げる記述
- ・毎月のように行事があり、準備と後片付けの負担が大きいこと。規模の縮小や隔年開催を求める声

B-5 会費・金銭と使途の不透明 160 件（14.8%） 15～39 歳 16.9%（42 件）、40 歳以上 14.3%

金額の高さそのものよりも、何に使われているかが分からないこと、徴収の方法が負担であることへの指摘が多い。

- ・自治会ごとに会費の額が大きく異なり、比較や納得の材料がないこと。
- ・収支の決算報告が示されない自治会があること。示されても内訳が分からないこと
- ・会費が懇親会や新年会などの飲食に使われていること。参加する人が限られているにもかかわらず全世帯が負担していること

- ・繰越金が積み上がっているのに会費が下がらないこと
- ・各種団体への寄付や募金を実質的に上乗せされ、世帯ごとの金額が決められていること
- ・現金を決まった日時に集める方式が続いており、集める側と払う側の双方に負担があること。
口座振替や電子決済を求める声
- ・街灯の電気代など、行政が負担すべきではないかと思う費用が会費から支出されていること
- ・住民税を納めたうえでさらに会費を負担することへの二重負担感
- ・単身世帯や高齢者世帯への減免がなく、世帯人数にかかわらず同額であることへの不公平感
- ・自治会費とは別に、子ども会費、神社への寄付、連合会費などが重ねて徴収されること

B-6 共働き・子育て世代への配慮 142 件（13.2%） 15～39 歳 22.6%（56 件）、40 歳以上 10.4%

就労と育児を抱える世代が、現行の活動時間や運営に参加できないという訴えである。

- ・活動のために仕事を休む必要があること。平日昼間や早朝の活動があること
- ・一日がかりの行事があり、休日が潰れること
- ・共働きやひとり親の世帯が前提とされていない運営になっていること
- ・こどもを預ける先がなく、行事に参加できないこと
- ・世帯主が出ればよいという慣行により、実際には配偶者が育児を負担していること
- ・子育て世代の意見が運営に反映されないこと
- ・こどもがいない世帯には参加の理由が見出しにくい行事が多いこと
- ・こどもが小学校を卒業すると地域とのつながりが切れること
- ・子ども会が自治会と一体で、子ども会の役員が自治会の役も兼ねる負担
- ・単身赴任や転勤で世帯主が不在の家庭への配慮がないこと

B-7 不公平感・フリーライダー 129 件（12.0%） 15～39 歳 9.7%（24 件）、40 歳以上 12.6%

負担が一部の人に偏っていること、加入者と未加入者の間に差があることへの指摘である。

- ・役員や行事の担い手が特定の人に固定していること

- ・協力しない人が、協力している人に不満を述べること
- ・加入者だけが清掃や管理を担い、未加入者も同じ環境を利用していること
- ・活動に参加してもしなくても会費が同額であること
- ・回覧板を回さない、夜遅くに持ってくるなど、日常的な摩擦があること
- ・高齢や病気を理由に役員を免除される世帯が増え、残った世帯に役が集中すること
- ・参加する家としない家が固定し、しない家には何も言えない状況があること

B-8 加入の任意性・強制感 118 件（10.9%） 15～39 歳 11.7%（29 件）、40 歳以上 10.8%

任意加入であるという建前と、実態としての強制感の落差への指摘である。

- ・近所の目があり、参加しない選択がしにくいこと
- ・子ども会や各種団体への加入が実質的に強制されていること
- ・連合会の役職を辞退できない運用があること
- ・各種団体への寄付や募金を、断れない雰囲気の中で求められること
- ・活動に参加できない場合に金銭を求められる運用があること
- ・加入と、行事への参加や負担金を切り分けてほしいという提案
- ・会員の種類を分け、関わり方を選べるようにしてはどうかという提案

B-9 行政からの下請け化・依頼過多 113 件（10.5%） 15～39 歳 8.9%（22 件）、40 歳以上 11.0%

市や公民館からの依頼が自治会の負担の一因になっているという指摘である。行政側の見直しを求める声が多い。

- ・市や公民館から毎月届く配布物の量が多いこと
- ・各種委員の選出依頼が多く、小規模な自治会では同じ人が複数を兼ねざるを得ないこと
- ・行政の縦割りにより、同種の依頼が別々に届くこと
- ・自治会長に地域のあらゆる役割が集中する構造への指摘
- ・ごみステーション、防犯灯、側溝、国勢調査など、行政サービスの実施を自治会が担っている

ことへの疑問

- ・ 連合会や地区の会議が、上位で決まったことを伝えるだけの場になっているという指摘
- ・ 補助金の申請や報告の書類が煩雑であること

B-10 つながり・交流への期待 99 件（9.2%） 15～39 歳 10.9%（27 件）、40 歳以上 8.6%

自治会の意義を認め、つながりを保ちたいとする記述である。ただし現状の形のままでよいとするものは少ない。

- ・ 災害時に助け合うためには、顔と名前が分かる関係が必要だという認識
- ・ 転入してきた人が地域に入るきっかけがないこと。自治会長から声をかけてほしいという要望
- ・ 清掃などの作業だけでは会話が生まれず、自己紹介の機会もないこと
- ・ 同世代の親同士が集まれる場を求める声
- ・ 義務ではない、緩やかなつながりを望む声
- ・ 行事を減らした結果、つながりが薄くなったことへの懸念
- ・ 福井の地域のつながりの強さを、負担の少ない形で受け継ぎたいという声

B-11 人口減少・存続への危機感 98 件（9.1%） 15～39 歳 6.0%（15 件）、40 歳以上 9.9%

現状の運営が近い将来に成り立たなくなるという見通しを示す記述である。役員経験者からのものが目立つ（記述者の 89%。設問 28 の記述者全体では 69%）。

- ・ 高齢化と世帯数の減少により、担い手が確保できなくなっていること
- ・ 空き家が増え、実際に動ける世帯が減っていること
- ・ 自治会の規模によって負担の重さが大きく異なること
- ・ 若い世代が加入しないため、このままでは組織が維持できないという見通し
- ・ 近隣の自治会との統合を求める声
- ・ 会費収入が減る一方で、行政からの依頼は減らないという指摘

B-12 ごみステーション問題 97 件 (9.0%) 15～39 歳 13.3% (33 件)、40 歳以上 7.7%

加入とごみ出しが実質的に結びついていることへの指摘である。書いた 97 人のうち 94 人は加入者で、加入者側からの指摘がほとんどである。

- ・ 加入しないとごみステーションを使えないと言われ、そのためだけに加入していること
- ・ 任意加入の団体であるはずなのに、加入しなければ行政サービスを受けられない状態への疑問
- ・ 会費を払えば利用できるとする判例があることを挙げ、市の見解を求める記述
- ・ ごみ出しのみを目的とした利用料の設定を求める提案
- ・ 加入していない世帯によるごみ出しをめぐるトラブルが、自治会に委ねられていること
- ・ 高齢で持ち出しが困難な世帯への支援がないこと
- ・ ステーションの設置基準や、分別ルールの分かりにくさ

B-13 防災・防犯 50 件 (4.6%) 15～39 歳 2.8% (7 件)、40 歳以上 5.1%

自治会の役割のうち、残すべきものとして防災・防犯を挙げる記述が中心である。

- ・ 災害時の助け合いのためには自治会の枠組みが必要だという認識
- ・ 一方で、自主防災組織としての役割が明確でなく、何をするのか分からないという指摘
- ・ 夜間パトロールを女性や高齢者が担っていることへの不安
- ・ 自治会の機能を防災に絞ってはどうかという提案
- ・ 避難所となる施設の設備（空調など）の整備を求める声
- ・ 防災訓練が形式的で、実際の災害を想定した内容になっていないという指摘

B-14 参加したい活動の案 300 件

設問 27 では、参加してみたい活動の案を自由に記述してもらった。分類ごとの件数は第 5 章 2 節の図 5-2 に、やり方・条件への言及は図 5-3 に示す。書いた人の偏りは第 9 章 3 節で扱う。ここでは書かれていた案を内容別に示す。

- ・ 清掃やごみ拾いなど、短時間で終わり会話が生まれる作業
- ・ 祭り、バーベキュー、食事会など、楽しむことを目的とした集まり

- ・ こども向けのイベント、学習支援、世代間の交流の場
- ・ 防災訓練、自主防災組織の再編、災害時の助け合いの仕組みづくり
- ・ 外国人住民との交流
- ・ 環境や温暖化をテーマとした学習と実践
- ・ 趣味を通じた集まり（スポーツ、料理、写真など）
- ・ ゲーム的な要素を取り入れた美化・緑化活動
- ・ 一方で、必要最低限の活動だけでよい、参加したい活動はないとする記述も相当数あること

本節は記述の内容を論点として整理したものであり、記述の多寡は論点の重要度を必ずしも示さない。

資料編 C 単純集計表

設問 8 から設問 28 までの集計結果を、全体、15～39 歳、40 歳以上を併記して示す（表 C-18 は全体と 15～39 歳）。単一回答は選択肢の順、複数回答は全体の割合が高い順に並べ、「その他」「特になし」は末尾に置いた。

表 C-1 【8】ご近所づきあい

選択肢	全体	15～39 歳	40 歳以上
ある（食事やお土産のやりとりをすることがある）	22%	11.8%	25.0%
少しある（軽い立ち話を交わすことがある）	41.2%	36%	42.6%
あまりない（挨拶を交わすのみ）	31%	39.3%	28.7%
ない（名前も顔も知らない人が多い）	5.8%	12.9%	3.7%

表 C-2 【9】自治会活動の認知度

選択肢	全体	15～39 歳	40 歳以上
よく知っている	19.8%	5.6%	24.0%
ある程度知っている	52.7%	39.2%	56.5%
名前は知っている	10.5%	17.3%	8.5%
ほとんど知らない	16.4%	35.6%	10.8%
自治会の存在自体を知らない	0.7%	2.3%	0.3%

表 C-3 【10】自治会活動への参加経験

選択肢	全体	15～39 歳	40 歳以上
ある	86.6%	69.3%	91.6%
ない	13.4%	30.7%	8.4%

表 C-4 【14】【17】自治会の加入状況

選択肢	全体	15～39 歳	40 歳以上
加入済み	97.2%	91.4%	98.9%
加入検討中	0.4%	0.9%	0.3%
未加入・退会済み	2.4%	7.8%	0.8%

表 C-5 【16】役員・運営の経験（参加経験者）

選択肢	全体	15～39 歳	40 歳以上
ある（現職）	27.7%	19.6%	29.5%

選択肢	全体	15～39 歳	40 歳以上
ある（以前）	47%	21.1%	52.7%
ない	25.3%	59.3%	17.9%

表 C-6 【11】 参加したことのある活動（参加経験者、複数回答）

選択肢	全体	15～39 歳	40 歳以上
地域の清掃や美化活動	84.8%	73.5%	87.4%
地域の情報伝達（回覧板や市の広報紙の配布等）	74.6%	56.2%	78.6%
季節の祭りやイベントの開催	71.5%	58.8%	74.3%
防災に関する活動（防災訓練等）	66.7%	46.1%	71.3%
ごみステーションの設置や管理	58.8%	42.7%	62.4%
生活道路の除雪や管理	30.3%	14%	33.9%
地域の見守り活動（防犯パトロール、小学生の登下校や高齢者の見守り等）	26.4%	17%	28.4%
街灯（防犯灯）の設置や管理	16%	2.5%	18.9%
墓地や寺社の維持管理	13.4%	5.3%	15.2%
その他	3.5%	2.3%	3.8%

表 C-7 【12】 直近の参加時期（参加経験者）

選択肢	全体	15～39 歳	40 歳以上
今年	67.6%	66.7%	67.8%
1～2 年前	15.6%	19.6%	14.8%
3～9 年前	9.9%	12%	9.4%
10 年以上前	6.9%	1.8%	8.0%

表 C-8 【13】 一緒に参加した相手（参加経験者、複数回答）

選択肢	全体	15～39 歳	40 歳以上
一人で	48.5%	41%	50.1%
夫や妻	42.2%	42.2%	42.2%
こども（小中学生）	18.3%	26.2%	16.7%
近所の人	11.5%	3.1%	13.4%
こども（未就学）	9.8%	29.8%	5.4%
親	7.9%	16.3%	6.0%
こども（高校生以上）	5.9%	0.8%	7.0%
友達	1.2%	1.3%	1.2%

選択肢	全体	15～39 歳	40 歳以上
祖父母	0.6%	1.5%	0.4%
兄弟姉妹	0.5%	1.5%	0.3%
恋人	0%	0%	0.0%
その他	1.1%	0.3%	1.3%

表 C-9 【15】 【18】 自治会に対する印象（複数回答）

選択肢	全体	15～39 歳	40 歳以上
役員の負担が重そう	67.4%	67.9%	67.2%
地域のつながりができる	52%	42%	55.0%
古い慣習が多そう	48.3%	54.3%	46.5%
地域に必要な組織	44.3%	33.3%	47.5%
防災・防犯に役立つ	42.7%	31.7%	46.0%
高齢者中心の組織	29%	40.7%	25.7%
地域を良くしている	23.2%	15.2%	25.5%
子育て世代に役立つ	19.1%	15%	20.3%
何をしているかわからない	11.8%	22.4%	8.7%
自分には関係ない	3.1%	6.2%	2.3%
その他	5.5%	5.8%	5.3%

表 C-10 【19】 活動への参加を妨げているもの（複数回答）

選択肢	全体	15～39 歳	40 歳以上
仕事や学業で忙しい	60.3%	70.9%	57.3%
人付き合いが負担になる	40.5%	45%	39.1%
活動参加にメリットを感じない	31.3%	38.8%	29.2%
高齢者中心で入りづらい	21.4%	30%	18.9%
育児で時間がない	19.5%	45.1%	12.1%
活動と一緒に参加する知り合いがいない	19.2%	27.2%	16.9%
入会金や会費が負担になる	17%	24.3%	14.8%
興味がある活動がない	16.8%	21%	15.5%
活動内容が分からない	14.8%	27.3%	11.2%
必要な活動時間がわからない	12.5%	20.5%	10.3%
情報が届いていない	10.3%	16.9%	8.4%
出費が多くなりそう	9.7%	15.5%	8.1%
参加方法がわからない	4%	9%	2.5%

選択肢	全体	15～39 歳	40 歳以上
その他	11.5%	5.5%	13.2%

表 C-11 【20】 参加できる負担の程度

選択肢	全体	15～39 歳	40 歳以上
月 2～3 回程度	2.3%	0.5%	2.8%
月 1 回程度	18.4%	10.4%	20.8%
半年に 1 回程度	42.6%	42.7%	42.6%
年 1 回程度	20.8%	22.8%	20.1%
オンラインのみなら参加可能	4.2%	5.1%	4.0%
参加は難しい	11.6%	18.5%	9.6%

表 C-12 【21】 今後参加してみたい活動（複数回答）

選択肢	全体	15～39 歳	40 歳以上
地域の清掃や美化活動	35.3%	21.2%	39.5%
季節の祭りやイベントの開催	33.3%	36.2%	32.6%
防災に関する活動（防災訓練等）	28%	17.6%	31.1%
地域の情報伝達（回覧板や市の広報紙の配布等）	20.8%	15%	22.4%
ごみステーションの設置や管理	20.2%	10.9%	22.9%
子育て関連の支援・イベント（子ども向けイベント・学習支援など）	18.1%	32.6%	13.9%
生活道路の除雪や管理	16.7%	11.1%	18.3%
地域の見守り活動（防犯パトロール、小学生の登下校や高齢者の見守り等）	12.9%	11.1%	13.5%
デジタル関連の支援・イベント（IT 相談会、広報活動など）	10%	7.4%	10.8%
社会人向けのイベント（キャリア交流会など）	8.4%	9.3%	8.2%
街灯（防犯灯）の設置や管理	5.9%	4.8%	6.3%
学生向けのイベント（地域課題解決プロジェクトなど）	4.6%	5.8%	4.3%
墓地や寺社の維持管理	4.1%	1.6%	4.8%
その他	15.2%	18.2%	14.3%

表 C-13 【22】 参加しやすくなる条件（複数回答）

選択肢	全体	15～39 歳	40 歳以上
短時間で終わる	62.6%	63.8%	62.3%

選択肢	全体	15～39 歳	40 歳以上
単発参加できる	34%	32.3%	34.6%
活動内容が事前に分かる	32.6%	35.1%	31.9%
謝礼・ポイントがもらえる	25.6%	34.9%	22.9%
SNS で情報が見られる	23.5%	27.3%	22.5%
こども連れで参加できる	20.4%	39.3%	14.9%
オンライン参加できる	19.4%	17.8%	19.9%
スキルアップにつながる	12.2%	12.5%	12.1%
友人と参加できる	8.2%	10.4%	7.6%
ボランティア証明書がもらえる	4.5%	3.7%	4.7%
その他	7.9%	8.3%	7.8%

表 C-14 【23】 見たい情報発信の手段（複数回答）

選択肢	全体	15～39 歳	40 歳以上
回覧板（電子）	63%	59.8%	64.0%
LINE	57.3%	58.9%	56.8%
Instagram	24%	36.2%	20.5%
回覧板（紙）	22.2%	18%	23.4%
メール	11.4%	7.1%	12.7%
YouTube	9.2%	7.4%	9.7%
X	8.5%	10.1%	8.0%
その他	3.4%	3.9%	3.3%

表 C-15 【24】 地域で困っていること（複数回答）

選択肢	全体	15～39 歳	40 歳以上
災害への備えが不安	30.2%	27%	31.2%
防犯が不安	22%	18.5%	23.1%
若者同士の交流が少ない	19.9%	27.3%	17.8%
高齢者支援が不足	10.4%	2.8%	12.6%
地域情報が入手しづらい	9.2%	12.9%	8.2%
子育て支援が不足	7.4%	14.8%	5.2%
地域イベントが少ない	6.7%	7.2%	6.5%
ゴミ出しルールが分かりづらい	5%	6.5%	4.6%
一人暮らしで孤立感がある	2.1%	1.9%	2.1%
特にない	32.6%	32.5%	32.6%

選択肢	全体	15～39 歳	40 歳以上
その他	14%	12%	14.6%

表 C-16 【25】 地域について知りたい情報（複数回答）

選択肢	全体	15～39 歳	40 歳以上
防災情報	67.6%	59.8%	69.9%
防犯情報	57%	48.5%	59.5%
イベント情報	34%	41.4%	32.0%
子育て情報	20%	45.7%	12.6%
地域の店舗情報	19%	24.5%	17.4%
健康情報	13.9%	7.8%	15.7%
ボランティア募集	6.8%	5.8%	7.1%
就職・キャリア関連	5%	4.9%	5.1%
その他	7.5%	7.9%	7.3%

表 C-17 【26】 地域で活かせる技能（複数回答）

選択肢	全体	15～39 歳	40 歳以上
子ども向け活動	11.3%	17.8%	9.4%
イベント企画	8.8%	9%	8.8%
写真撮影	8.5%	11.5%	7.6%
SNS 運用	8.1%	12.5%	6.8%
IT サポート	7.4%	7.8%	7.3%
小～高校生までを対象とした学習支援	7.3%	8.6%	6.9%
広報	5.9%	4.9%	6.2%
動画編集	3.4%	6.3%	2.5%
デザイン	3.3%	5.5%	2.7%
プログラミング	2.6%	3.5%	2.3%
語学	2.3%	3.2%	2.1%
特になし	64.1%	57.8%	65.8%
その他	3.3%	2.6%	3.5%

表 C-18 【28】 自治会への本音の分類

選択肢	全体	15～39 歳
批判・不満	67.0%	71.4%
両論	6.1%	7.3%

選択肢	全体	15～39 歳
中立・事実記述	3.5%	2.0%
提案・要望のみ	22.6%	17.7%
評価・肯定	0.7%	1.6%

割合は選択肢ごとに四捨五入しているため、合算した値は本文の値と 0.1 ポイント異なることがある。

資料編 D 層別集計表

表 D-1 ライフステージ別プロフィール

項目	学生 (n=33)	一人暮らし (n=29)	親と同居 (n=56)	夫婦のみ (n=68)	子育て世帯 (未就学児) (n=283)	子育て世帯 (小中学生) (n=88)
自治会に加入	82%	55%	82%	91%	97%	97%
参加経験あり	67%	34%	41%	62%	75%	86%
活動を知っている	36%	14%	36%	37%	49%	55%
近所づきあいあり	48%	14%	34%	32%	55%	55%
一戸建て持家	85%	41%	86%	76%	88%	85%
賃貸・集合住宅	12%	59%	14%	24%	12%	15%
転入 5 年未満	9%	21%	2%	22%	11%	7%
単身世帯	9%	100%	0%	0%	0%	0%
活かせる技能あり	67%	28%	39%	51%	41%	36%
やりたい活動あり	94%	90%	80%	79%	86%	73%
月 1 回以上を許容	15%	28%	12%	12%	8%	9%
半年に 1 回以上を許容	52%	66%	38%	57%	56%	51%
オンラインのみ	3%	3%	2%	9%	6%	2%
参加は難しい	21%	10%	38%	9%	16%	23%

表 D-2 関わり方の 7 層 詳細

層	人数	加入	参加経験	認知	技能あり	平均活動数
A 層	48 人	96%	100%	71%	69%	3.6 件
B 層	284 人	99%	100%	62%	40%	1.9 件
C 層	61 人	93%	100%	34%	34%	0.9 件
D 層	14 人	36%	0%	7%	57%	2.4 件
E 層	87 人	75%	0%	17%	48%	1.9 件
F 層	15 人	80%	0%	0%	53%	1.8 件
G 層	58 人	90%	0%	10%	21%	1.0 件

資料編 E 調査票（設問と選択肢）

本調査の設問と選択肢を文章の形で示す。設問 14～16 は設問 10 で「ある」と答えた人、設問 17～18 は「ない」と答えた人に尋ねたもので、加入状況と印象の設問は両者で同じ内容である。複数選択の設問には「その他」の記入欄を、いくつかの設問には補足のコメント欄を設けた。

設問 1 現在の年齢を教えてください

回答形式：数値入力（歳）

設問 2 現在の状況

選択肢：会社員／公務員／パート・アルバイト／自営業・フリーランス／専業主婦・主夫／高校生・高専生／大学生・専門学校生・その他学生／その他／回答しない ※コメント欄あり

設問 3 現在同居されている世帯人数を教えてください（ご自身を含む）

回答形式：数値入力（人。10 人以上は「10 人以上」）

設問 4 上記世帯の構成員を選択してください（複数選択可）

選択肢（複数選択可）：祖父母／親／夫や妻／子ども（未就学）／子ども（小中学生）／子ども（高校生以上）／兄弟姉妹／なし／回答しない／その他 ※コメント欄あり

設問 5 福井市内での居住年数を教えてください（通算）

回答形式：数値入力（年。20 年以上は「20 年以上」）

設問 6 ご自宅の状況について教えてください

選択肢：一戸建て（持家）／一戸建て（賃貸）／分譲マンション・アパート／賃貸マンション・アパート／団地・社宅／下宿・シェアハウスなど／その他／回答しない ※コメント欄あり

設問 7 お住まいの地域の公民館ブロック名を選択してください

選択肢：不死鳥／あたご／みなみ／あずま／九頭竜／足羽／光／川西／不明・回答しない

設問 8 ご近所づきあいの有無について教えてください

選択肢：ある（食事やお土産のやりとりをすることがある）／少しある（軽い立ち話を交わすことがある）／あまりない（挨拶を交わすのみ）／ない（名前も顔も知らない人が多い）

設問 9 自治会の活動についてどの程度知っていますか

選択肢：よく知っている／ある程度知っている／名前は知っている／ほとんど知らない／自治会の存在自体を知らない

設問 10 自治会の活動に参加したことがありますか

選択肢：ある／ない

設問 11 どんなテーマの活動に参加しましたか（複数選択可）

選択肢（複数選択可）：地域の情報伝達（回覧板や市の広報紙の配布等）／季節の祭りやイベントの開催／ごみステーションの設置や管理／地域の清掃や美化活動／防災に関する活動（防災訓練等）／地域の見守り活動（防犯パトロール、小学生の登下校や高齢者の見守り等）／生活道路の除雪や管理／街灯（防犯灯）の設置や管理／墓地や寺社の維持管理／その他 ※コメント欄あり

設問 12 直近で自治会の活動に参加したのは何年前ですか（今年の人とは 0）

回答形式：数値入力（年。今年とは 0、10 年以上前は「10 年以上前」）

設問 13 自治会の活動には誰と一緒に参加しましたか（複数選択可）

選択肢（複数選択可）：祖父母／親／夫や妻／こども（未就学）／こども（小中学生）／こども（高校生以上）／兄弟姉妹／近所の人／友達／恋人／一人で／その他 ※コメント欄あり

設問 14 自治会の加入状況

選択肢：加入済み／未加入・退会済み／加入検討中 ※コメント欄あり

設問 15 自治会に対してどのような印象を持っていますか（複数選択可）

選択肢（複数選択可）：地域に必要な組織／防災・防犯に役立つ／地域のつながりができる／子育て世代に役立つ／地域を良くしている／何をしているかわからない／高齢者中心の組織／役員の負担が重そう／古い慣習が多そう／自分には関係ない／その他 ※コメント欄あり

設問 16 自治会で役員や運営に携わったことがありますか

選択肢：ある（現職）／ある（以前）／ない

設問 17 自治会の加入状況

選択肢：加入済み／未加入・退会済み／加入検討中 ※コメント欄あり

設問 18 自治会に対してどのような印象を持っていますか（複数選択可）

選択肢（複数選択可）：地域に必要な組織／防災・防犯に役立つ／地域のつながりができる／子育て世代に役立つ／地域を良くしている／何をしているかわからない／高齢者中心の組織／役員の負担が重そう／古い慣習が多そう／自分には関係ない／その他 ※コメント欄あり

設問 19 自治会活動への参加障壁があれば教えてください（複数選択可）

選択肢（複数選択可）：活動内容が分からない／興味がある活動がない／活動参加にメリットを感じない／必要な活動時間がわからない／仕事や学業で忙しい／育児で時間がない／情報が届いていない／活動と一緒に参加する知り合いがいない／人付き合いが負担になる／高齢者中心で入りづらい／参加方法がわからない／入会金や会費が負担になる／出費が多くなりそう／その他

※コメント欄あり

設問 20 参加するとしたら、どの程度の負担なら可能ですか

選択肢：月 2～3 回程度／月 1 回程度／半年に 1 回程度／年 1 回程度／オンラインのみなら参加可能／参加は難しい

設問 21 今後参加してみたい自治会活動を選んでください（複数選択可）

選択肢（複数選択可）：地域の情報伝達（回覧板や市の広報紙の配布等）／季節の祭りやイベントの開催／ごみステーションの設置や管理／地域の清掃や美化活動／防災に関する活動（防災訓練等）／地域の見守り活動（防犯パトロール、小学生の登下校や高齢者の見守り等）／生活道路の除雪や管理／街灯（防犯灯）の設置や管理／墓地や寺社の維持管理／子育て関連の支援・イベント（子ども向けイベント・学習支援など）／デジタル関連の支援・イベント（IT 相談会、広報活動など）／学生向けのイベント（地域課題解決プロジェクトなど）／社会人向けのイベント（キャリア交流会など）／その他 ※コメント欄あり

設問 22 自治会の活動に参加しやすくなる条件があるとすれば何ですか（複数選択可）

選択肢（複数選択可）：単発参加できる／オンライン参加できる／友人と参加できる／子ども連れで参加できる／活動内容が事前に分かる／SNS で情報が見られる／短時間で終わる／謝礼・ポイントがもらえる／ボランティア証明書がもらえる／スキルアップにつながる／その他 ※コメント欄あり

設問 23 どのような情報発信なら見たいですか（複数選択可）

選択肢（複数選択可）：LINE／Instagram／X／YouTube／回覧板（電子）／回覧板（紙）／メール／その他 ※コメント欄あり

設問 24 現在、地域で困っていることはありますか（複数選択可）

選択肢（複数選択可）：災害への備えが不安／防犯が不安／子育て支援が不足／地域情報が入手しづらい／ゴミ出しルールが分かりづらい／一人暮らしで孤立感がある／高齢者支援が不足／地域イベントが少ない／若者同士の交流が少ない／特にない／その他 ※コメント欄あり

設問 25 地域について知りたい情報は何か（複数選択可）

選択肢（複数選択可）：防災情報／防犯情報／子育て情報／イベント情報／地域の店舗情報／ボランティア募集／就職・キャリア関連／健康情報／その他 ※コメント欄あり

設問 26 あなたが地域で活かせると思うスキルはありますか（複数選択可）

選択肢（複数選択可）：SNS 運用／デザイン／動画編集／写真撮影／IT サポート／プログラミング／語学／イベント企画／広報／子ども向け活動／小～高校生までを対象とした学習支援／特に

なし／その他 ※コメント欄あり

設問 27 参加したいと思う自治会活動の案があれば自由に記入してください

回答形式：自由記述

設問 28 最後に、福井市の自治会や地域活動が「もっとこうなったらいいのに」「ここが不便だな」と感じる本音を、ご自由にお書きください。

回答形式：自由記述